
未来のキミを救いたい ミリア = ミリス編

水鏡樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来のキミを救いたい ミリア＝ミリス編

【Nコード】

N5027B

【作者名】

水鏡樹

【あらすじ】

ミリア＝ミリスは天界と地界を結ぶ、中界で働いている女性である。中界からの使者として、鷹野信也を迎えに行くミリアは、いつも通りに仕事をこなしていた。だが、とある失言がきっかけで、予想だになかった事件に巻き込まれてしまうのだった。

プロローグ（１）（前書き）

このたびは数ある小説の中から『未来の君を救いたい』を選んでいただき、ありがとうございます。

この小説は『鷹野信也編』『ミリア＝ミリス編』の二通りがあります。同じ時間帯を信也の視点、ミリアの視点からといった、Ａ面Ｂ面型の小説となっています（プロローグ、エピソードは除きます）

どちらから読んでもらっても、かまいません。片方だけ読んでは、話の全貌が見えませんので、もう片方を読んだときに新たな発見、驚きがあると思います。

また、二つを同時に読んでいくのもいいと思います。ただ、話は分かりやすくなりますが、その分発見や驚きは、納得といった感覚になると思います。

かなり長い話になりますが、最後までお付き合いしていただければ幸いです。感想などありましたら、ぜひお聞かせください。

プロローグ（１）

わたしにだけ課される、年に一度の仕事を終わらせると、いったん職場へと戻った。

室内はすでに閑散としており、わたしの存在すら危つく消し去りそうな――そんな感覚に捕らわれる。

「やっぱりだれもいないか」

時計はすでに二十時を回っている。わたしの部署は朝から夕方までを担当としていた。

残業なんて滅多にないので、みんな帰ってしまってもおかしくはない。

「わたしも早く帰ろう。一杯やりながら、余韻に浸るのもいいかな？」

一人で呟き、鞆に荷物をまとめると、わたしは職場から出ようとした。

刹那、なにか冷たい物体が首筋に寄せられた。同時にわたしを呼ぶ声。

「ミリア」

「う、うああ！」

爆音を鳴り響かせる心臓を、押さえつけながら振り返る。

そこには黒いローブを身にまとい、腕に緑色の腕章を着けた男がいた。

わたし――ミリア・ミリスのやっている仕事場で、最高責任者にあたるテラ・マクスウェルだ。固められたオールバックの髪が、彼の几帳面さを露にしている。

首筋に触れた冷たい物体は、どうやら彼の手だったらしい。

「家に帰って、宴会でもするつもりか？」

「違いますけど……」

「まあいい。仕事さえきちんとこなせば、お前がどこでなにをしよう

うが関係ない」

思わずムツとしてしまった表情を、笑顔に戻す。

昔から上司のテラとは馬が合わず、衝突ばかり繰り返してきた。

親友であり、同僚でもある信也君をも巻き込んで――。

「用がないのなら失礼します」

「用ならある。エンマ様からの言伝だ。これを渡しておいてくれとな」

テラが懷から出したのは、一本の白いビデオテープだった。

「これをわたしに？」

「なんのビデオかは知らんが。きっとエンマ様の説教が何時間も入っているのだろう」

「い、いらないです」

「そう言うな。きちんと見て、説法でも学ぶのだな」

淡泊なせせら笑いを発しながら、テラはわたしの鞆にビデオテープを押し込んだ。

「なっ、ちよつと!」

「それじゃあな。非番にやることでできてよかったじゃないか。どうせ暇なんだろう」

皮肉たつぷりに言つてのけると、テラはわたしの横をすれ違い、職場から出ていった。

ご丁寧に、肩と肩をぶつけて。

「本当に嫌な奴。違う部署に飛ばされちゃえばいいのに」

去り行くテラの背後に、アツカンベーを食らわすと、自宅への帰路についた。

鞆の中に入れられてしまったビデオテープには、大した興味も持たずに――。

わたしたちの世界は、生きている人達の世界とは違う――死者の世界だ。

わたしがいるのは、中界と呼ばれる、天界と地界の仲介を行って

いる場所である。

天界と地界とは、よく知られた言い方になおすと、天国と地獄みたいなものだ。

つまり、死んだ人は天界行きか地界行きかの判決を受ける。中界はその判決の場所だ。

わたしは、その中界で案内人の仕事をしている。

死んだ人を中界まで連れていき、判決を下すエンマ様の元へと案内する。

判決が終わると、天界や地界へと送り届ける。死んだ瞬間を思い出せない人には、その死に様を説明し、納得させる。それが主な仕事内容だ。

目を覚ましたわたしは、目覚まし時計を掴んで、顔の前に持つてくる。針は九時をさしていた。

本来なら遅刻の時間帯だけど、今日は週に一度の非番なので問題はない。

非番の朝は、とにかく寝るに限る。普段むさばれない惰眠を堪能し、再び目を覚ました時には、すでに午後一時を回っていた。

カーテンを開けると、太陽はすでに南の空高くまで上がっており、皓々と中界を照らしていた。

雲よりも高い位置にある中界で、雨や雪に見舞われるのは稀である。

大きく背伸びをし、さんさんたる日光を浴びる。

今日の予定に使う予算を決定しようと、わたしは鞆の中から財布を取り出してみた。

財布の中身をみて、自然と全身に鳥肌が巻き起こる。

「こ、これだけ？」

給料日前とはいえ、財布にはたった九十八ペソミしか入っていなかった。

これでは缶ジュースも飲めない。

「予定もなにもないわね。どこかに千ペソミぐらいないかな？」

鞆の中身をひっくり返して、全財産を確認する。出てきたのは手鏡、ティッシュ、ハンカチ、家の鍵——そして最後に、白いビデオテープが現れた。

プロローグ（２）

「これって……」

出てきたビデオテープを掴み、いろんな角度から眺めてみる。

どこをどう見てもただのビデオテープだ。少なくともお金にはなりそうにない。

「エンマ様もどうせくれるなら、金でできたビデオテープでもくれればいいのに」

ばやきながらラベルを確認する。そこには『ミリア＝ミリス 鷹野信也と行動を共にした一週間』と書かれてあった。

「鷹野信也？　これって信也君よね。なにをいまさら。普段から一緒にいるじゃない。ばかばかしい」

ポーンと後ろに放り投げると、放物線を描いたビデオテープは、備え付けの電話機と衝突した。

まるでそれが原因だと言わんばかりに、電話の呼び出し音が鳴り響く。

「はいはい、出ますよあ」

電話に出ると、聞きなれた重低音の声が聞こえてきた。

「ミリアか？」

一瞬にして背筋が凍りつき、治まっていた鳥肌が再び全身へと際立つていく。

「エンマ様！」

声の持ち主は、間違いなくこの中界を統べるエンマ様だった。

「あの、わ、わたし非番なんですけど、なにかご用ですか？」

頭の中に、緊急出勤の四文字が浮かび上がる。たしかにお金も予定もないが、休みの日がなくなるのは悲しすぎる。

「それは知っている。ただ、ビデオテープを受け取ったかどうかを聞きたかったのだ」

「あの白いやつですか？」

「そうだ。もう見たのか？」

「まだですけど、なんですかあれは」

「見れば分かるだろ」

「あんな適当なラベルで、わかるわけないでしょう！」

抗議すると、エンマ様は電話の向こうで一度、大きな咳払いをした。

「そうではない。実際にテープを再生すればわかっていているのだ」

「何時間も説教されるんでしょう？　せつかくの非番を説教で埋めたくないですから」

「何を言ってるんだ。あれは三年前の事件のテープだぞ？」

「ああ、三年前の事件ですかあ……三年前の事件！？」

三年前の事件——それは親友の信也君が事故死して、この世界へと来た時の事件だ。

ただ、その事件は簡単には終わらなかったのだ。

「昨日の青いビデオテープなら、ちゃんと信也君に渡しましたよ。」

それに信也君の活躍ぶりを、延々眺めてたっしょうがないし」

「そうではない。それはミリアのビデオテープだ」

「わたしの？」

「昨日渡した青いテープは、鷹野信也を主体としたテープだ。だが、その白いテープは、

ミリアを主体として作られたテープなのだ」

「わ、わたしのビデオもあつたんですか？」

エンマ様の笑い声が電話から部屋中へとこだまする。してやったりといわんばかりだ。

「本来なら中界で働く人のビデオは無い。カルバドスにも手伝わなかったが、わたしが直々に編集したものだ。感謝しろよ？」

カルバドスとはわたしの先輩にあたる仕事仲間だ。よく信也君を交えて三人で話したりもする。

「じゃあ、あの時のわたしの行動が……」

「滞りなく、そのビデオに収められている。せつかくの非番だ、懐かしむのも悪くはあるまい？」

「その前に、壊しちゃいそうですけどね」

近くにあったハンマーを握り、足元のビデオテープへと振り下ろそうとする。

と、突然エンマ様の口から、一つの宿題が出されていた。

「感想を書いて提出するように。原稿用紙二十枚以上だ」

「え、えええ！？」

「提出しないならしくなくてもいいが、滅給を覚悟しておくんだな」

「そ、そんなあ」

「年末のボーナスがないと、年を越すのも楽じゃないぞ」

この時点でわたしは、ハンマーを手放していた。

落下したハンマーが、ビデオテープのそばで重々しい音を立てる。

「わかりましたよ！ 壊さないで見ます！」

「そうするといい。非番にはもってこいの品物だろう？」

『無理やり宿題を作っておいて、なにが非番よ……』

聞こえないように小声でつぶやいてはみたものの、口のそばには受話器がある。

「ほう、わたしがミリアの非番を、滅茶苦茶にしたと」

「ち、違います、冗談ですよ！」

「そうか。ではまた明日、仕事場で会おう」

重低音の高笑いを残し、エンマ様は電話を切った。

「ふう、あの時のビデオだったのかあ」

ハンマーの側に転がっていたビデオを拾いつつ、頬を何度か掻いてみる。

いい思い出と、悪い思い出が合わさった、複雑な心境を生み出すビデオだろう。

「でも、あの奇跡にもう一度出会えるのね」

小さく微笑み、ビデオデッキにテープを入れる。

テレビの前に配置された大きなソファに腰をかけ、わたしはビ

デオの中の自分と同化していた……原稿用紙二十枚分の感想を書くために。

10月24日(1)

十月二十四日 金曜日

「すみません。遅れました！」

大きな声で謝りながら仕事場に入ると、同僚の視線が一斉に集中した。男も女も白いローブに緑色の腕章である。

緑色の腕章は、案内人という役職の区分を示し、白色のローブは死んだ人に清廉潔白さを第一印象として与えるためだ。

それもこの狭い職場の中に集まれば、白いカーペットの所々に、緑色のシミが付着しているように見える。

一度わたしに集中した視線は、一瞬にして散開していた。

一人を除いた全員が『またミリアか……』といった呆れ顔で、仕事へと戻ったのだ。

「ミリア、こっちに来い」

除かれた一人がわたしを呼びつける。黒いローブをまとい、緑の腕章をつけたテラだ。

なぜ彼だけが黒いローブかというと、最高責任者である証明と同時に、死んだ人を迎えに行ったりしないからだ。

仕事熱心で、趣味なんてなさそうだけど、女の目からも美しいと思う奥さんと結婚しているので、愛妻家ではと噂されている。

「今月、きみの遅刻は何回目だ？」

「えつ、えつと、何回目でしたっけ？」

「二十回目だ！」

怒鳴り声と同時に、テラは机を力を入れて叩いた。

辺りには轟音が響き渡るも、周りにいた同僚は眉一つ動かしていない。

「いいか？ 今日とは二十四日だ。そして君の遅刻は二十回目。要するに君は今月遅刻しなかった日は四日しかないんだぞ！」

「はいっ、申し訳ありません」

「そんなに朝寝でいたいのなら、夕方の部署に移ってもらった方がいいんだぞ」

わたしたちの仕事は、同じ仕事でも違う時間帯で、部屋も三つに分かれている。

朝から夕方にかけて、夕方から夜、そして深夜から朝にかけてだ。人は二十四時間、いつでも死ぬ可能性がある。それに対応するため、こうして三分割しているのだ。

わたしは其中で、朝から夕方にかけて働いている。この時間帯以外は、絶対にやりたくない。

夕方から夜にかけては、家でお酒でも飲んでのんびりしたい。ましてや深夜は寝る時間であり、仕事をするなんて考えられない。

「確か深夜に、空気が何席かあったな……」

「二度と遅刻はいたしません。お願いですから深夜は勘弁してください！」

泣いてテラに頼み、土下座して、やっと許してもらえた。

——もちろん嘘泣きだったけど。

中界での仕事は絶対になくってはならないものだけど、それ以外——生きてた時に得た技術を利用して、仕事をする職人なんかは、趣味でやっているようなものだ。

「これが今日の仕事だ。まだ時間はある。担当する人の資料でも整理するんだ」

「は、はい、申し訳ありませんでした」

嘘泣きを続けつつも、心の底では笑いながら、わたしは自分の席へと戻っていく。

「あ、そうそう」

不意に声がして振り返る。テラはわたしを嘲るように見下していた。

「君は嘘泣きが下手すぎる。もっと練習しておくんだな」

ビクッと体を震わせると、テラは小さく鼻を鳴らし、ほくそ笑んでいた。

「なんでばれたんだろ」

頭をかきつつ、わたしは自分の席へと着いた。横では同僚のカルバドスが、声を殺して笑っている。

無精ひげにあどけないスマイル、つんと逆立った髪の毛が、天井へと向かって伸びている。

ナンパをこよなく愛するカルバドスは、女好きで手が早い。そのせいで、よく女性とのいざこざにも巻き込まれている。

それでも何気に人気があるらしいけど、わたしには気楽に話せる同僚でしかない。

「相変わらず懲りないな、お前は」

「なによ、カルバドスだってさ、よく遅刻するじゃないの」

「おれはミリアとは違うさ。なんせ一週間に一回のペースだからな」
カルバドスの笑いが辺りに響き渡る。テラがうるさそうにこちらを睨みつけているが、

カルバドスには関係なかった。

主従関係が嫌いらしく、だれと話す時も気さくに話してくれるのだ。

わたしのような後輩にも優しく、自分が納得いかないことは、たとえテラが相手でも反論する。もしかしたらそこが人気の秘密かもしれない。

「回数なんて関係ないでしょ。遅刻は悪いことなんだから」

「だったらどうして遅刻するんだよ」

カルバドスの問いにわたしは人差し指を立てると、二、三度その指を振った。

「わたしだって女の子なんだから、朝の身だしなみとかいろいろあるのよ」

「身だしなみに気をつけてるなんて、見栄はるなよ。頭の寝癖がいい証拠だぜ」

「えっ!？」

自分の髪をまんべんなく触ってみる。

だけど、どこにも寝癖特有の髪が跳ねた感触はなかった。

「どこにも寝癖なんて、ないじゃないの！」

「その慌て振りを見た限り、身だしなみに気をつけてるとは思えないな」

——やられた。愕然としてカルバドスを見やると、カルバドスはわたしに指を差して笑い転げている。

「相変わらず嘘が下手だな、お前は」

「わ、悪かったわね！　嘘なんて下手でいいのよ！」

「負け惜しみだな」

「フンッ！」

そっぽを向くと、カルバドスは一層大きく笑い飛ばし、椅子から立ちあがった。

「はぁ、笑った笑った。おれはそろそろ迎えに行くけど、ちゃんと仕事するんだぞ」

念を押すと、手に資料を握ったまま、カルバドスは去っていった。その代わりに、テラからの鋭い視線が、わたしを突き刺してくる。「さてと、テラになにか言われない内に、仕事をしましうかね」

10月24日(2)

机の方を向くと、わたしは資料の整理を始めた。といっても大した仕事ではない。

迎えに行く人はそれぞれの案内人で決まっているので、迎えに行く時刻、場所を整理、復習するだけだ。

「えっと、今日は玖珂春子さん。明日は鷹野信也君。明後日は……」
担当になっている人物の集計表を、口に出しながら確認していく。
「明々後日は美祢薫さん、その次が山倉優美ちゃんか。そういえば、この子のDVってまだ見てなかったっけ」

DVとは、わたしたちが迎えに行く人が死ぬ瞬間が録画されたビデオテープである。

内容を詳しく説明し、死を認識しない死者に納得させるため、案内人が確認しておかなければならないものだ。

「ちょうど迎えに行くまでに時間があるし、パパッと見てこようかな！」

人の死んだ瞬間を映し出すビデオがあるのは、仕事場とは少し離れた場所だ。

部屋の中はビデオデッキとテレビ、それに赤いソファ。入り口の側にはパソコンが置いてある、ただそれだけの部屋だ。

パソコンの電源を入れると、名前とパスワードを入れるように表示された。

「名前は、ミリアミリス。パスワードは@*##@*+と」
口に出しながらパソコンを操作するキーボードを打つと、今度は死亡者名を入れるように表示された。

「えっと、山倉優美と」

打ち込みを完了すると、側にあった四角い穴から一本のビデオテープが出てきた。ラベルには『山倉優美 享年十七歳』と書かれて

いる。

「さてと、再生、再生」

テープをビデオデッキに入れて、再生ボタンを押す。何やらサーカス会場のような場所が映し出された。

満員御礼の会場は、少なくとも三百人はいるだろう。

ソファアーに腰をかけ、画面に目をやる。そこには大きく優美ちやんの姿が映し出されていた。

会場の一番前の席に座り、サーカスを眺めていた。愁いを帯びた表情は、あからさまに寂しそうだ。

「サーカス会場？　こんなところでどうなったら死ぬのかしら？」
疑問を胸に秘めたまま、目を画面に釘付けにする。

サーカスから一転して死の予感を感じさせたのは、その直後だった。

突然に、画面左から光が差し込んできた。薄暗い会場が、まばらに明るくなっていく。

直後、どこかに設置されているであろうスピーカーから、かすれ気味の音声が聞こえてきた。

「会場の皆様！　落ち着いてください！　ただいま場内に爆弾が仕掛けられているのを発見いたしました！　すぐさま避難していただけるよう、お願い申し上げます！」

楽しむはずのサーカス会場に、怒声や号泣がこだまし始めた。

だけど、優美ちゃんも落ち着きなく辺りを見回しながら、歩くように出口へと向かっている。

「な、なにやってるのよ、この子！」

思わず叫び、ソファアーから立ち上がると、テレビのすぐ前へと移動した。

張り付いて観察すると、彼女は右足にギブスをはめていた。骨折して思うように身動きが取れないらしい。

「まだ時間があります！　落ち着いてください！」

係員の指示と多数の出口で、二分を経過する前には、人影は見当

たらなくなっていた。

優美ちゃんはその頃になっても、ようやく出口までの距離の半分までしか進んでない。

「よし、全員退避したか！」

「はいっ、団長！ いや、まだあそこに女の子が！ 早く逃げるんだ！」

心配そうに優美ちゃんを指差しながら、声が続く。

「どうやら骨折で動けないようです。助けに行きましょう！」

時計を確認して、団長は助けに行こうとする若者を止めた。

「ダメだ。もう間に合わん。早く退避しなければ我々も命を落としてしまう」

「で、ですが！」

「緊急避難だ。これ以上、団員を危険な目に遭わせるわけにはいかん！ 退避しろ！」

そのまま係員が、会場から去っていく。

一步、また一步と確実に歩みを進め、優美ちゃんは出口を目指していた。

「もう、いいや。鷹野君、わたしもそっちに行くよ……」

優美ちゃんが力尽き、その場に膝をついた瞬間だった。

無情にも優美ちゃんは爆音に巻き込まれていた。

光熱に背後から押され、優美ちゃんの全身は引きちぎられるように細切れになり、肉片となって、吹き飛んでいく。

まるで潰れたトマトのように、血液が弾け飛ぶ。

「うつ！」

わたしは思わず、テレビ画面から顔を背けてしまった。何度も人の死ぬ瞬間を傍観しているわたしでも、胃液が逆流してしまいそうな有様だった。

よろめきながら、ソファーへと倒れこむ。気がつくともビデオは終わっていて、画面は

砂嵐状態だった。雑音が延々と流れている。

「夢、じゃないわよね？」

思わず口走ってしまうほど、あの瞬間は強烈だった。

わたしは力なくビデオを元に戻し、胸元を押さえながらビデオルームを出た。油断すると、嘔吐しかねない。

ふらつく足取りで職場へと戻り、コップ一杯の水を一気に飲みほす。

「やなものの見ちゃったなあ」

自分の机に戻り、椅子に腰をかける。それでも気分は晴れなかった。

これほどまでにひどい死に方は、未だかつて見た試しがない。

資料を調べると、あの爆発は自殺願望を持つ男が設置したらしい。自分ひとりで死ぬのが怖いからと、あれだけ多くの人間を巻き込むつもりだったのだ。

偶然とはいえ、サーカス団員が爆弾の一つを発見したことで、被害は最小限に食い止められた。その被害者の内の一人が、優美ちゃんとなる。

山倉優美という人物は運動神経抜群だったらしいので、あの骨折さえなければきっと逃げ出せたはずだ。

だけど、運命は時として残酷なもの——その運命に逆らえる人など、存在しないのだ。

10月24日(3)

「よっ、どうしたんだ青い顔して。拾い食いでもしたのか？」

仕事が終わって帰ってきたカルバドスが、ふさぎこむわたしに声をかけてきた。

「うん、ちよっとね」

「どうした？ いつもなら『だれが拾い食いなんかするか！』って反論してくるのに」

「えげつない映像みちゃったのよ。ごめん、そつとしておいて」

真顔で言っと、わたしよりも経験を積んでいるカルバドスは、すべてを察したようだ。

二度ほどわたしの肩を叩き、そのまま立ち去っていった。

「はあ、こりや当分夢に出てきそうだわ」

カルバドスと違い、わたしはこの仕事を始めてそんなに長くない。わたしが仕事を始めたのは約三年前。かなりの新米に入る。

カルバドスは確か十三年ほどだけど、それでも古株ではない。

そして、わたしがこの世界で生まれたのも同じ時期だった。

仕事をしている人は、死んでここに来た人がほとんどだ。カルバドスもしっかり、テラもしっかりだ。

それでも一部、中界で生まれた人もいる。

わたしもその内の一人だ。といつても、ある程度の知識、常識は植えつけられていて、

体も元々この大きさだった。

つまり『生まれた』と言うよりは『造られた』と言ったほうが近いのかもしれない。

ただ、命令されたことしかできないロボットとは違い、自分の考えや意思も持つて行動している。だから自分では『生まれた』と言っているのだ。

そんなわたしは、同僚から態度が冷たいと言われる。迎えに行った

人の中には、わたしの言動でショックを受ける人も少なくない。

わたしは変な期待を持たせるよりも、真実を告げて理解してもらいたい——そう思っているだけなのに。

「はうう、死んだ人を迎えに行かなきゃいけないのに、さっきのビデオが頭から離れないよお……」

大きく深呼吸をしてみても、一向に改善へと向かわない。

「明日になれば少しは楽になるだろうから、誰かに頼んで代わりに行ってもらうか」

ちょうどその時、カルバドスがこちらへと戻ってきた。

手にはコップを二つ持っていて、その一方をわたしへと差し出す。

「ほら、水持ってきて来たぞ。大丈夫か？」

「ありがとう。ところでさ、今日の仕事は終わったんだよね？」

「終わったけど、なにか用か？ デートならだめだぞ。俺にはたくさんの……」

「わたしが担当だった人、代わりに行ってくれない？ 気分が悪くてさ」

鼻を高くして、得意げに述べるカルバドスを無視して、さっさと話を進める。

カルバドスは優しく、頭を撫でてくれた。

「しょうがない奴だな。これは貸しにしとくぞ」

「ごめん、ありがとう」

「気にするな。困った時はお互い様だ。帰ってゆっくり休むといい。資料はどれだ？」

「はい、これ」

「おっ、女の人か、燃えるなあ……って、迎えに行く時間はもうすぐじゃないか。行ってくる！」

カルバドスが出て行くのを見送ってから、次の日の資料に目を通す。

「明日はちゃんと行かないとね。鷹野信也君だっけ……鷹野？」

なにかが引つかかった。さつきからわたしを苦しめ続ける映像のなにかに。

「そついえば優美ちゃん。最後に鷹野君って言ってなかったっけ？」
慌てて優美ちゃんと、信也君の資料を見比べる。

住んでいる地区、通っている学校、学年、さらにはクラスまでもが、すべて綺麗に一致していた。

「好きな人を数日前に亡くして、さらに自分はあるな死に方したっていうの？」

非情な運命——現実とはどうしてこんなに残酷なのか。

「まっ、分かったってどうしようもないんだけどさ」

資料を机の上に残したまま、わたしは家路へとついた。

今日はカルバドスの言葉に甘え、早く帰って寝よう。

10月25日(1)

十月二十五日 土曜日

さすがに今日は遅刻せずに、職場へと着いていた。

遅刻したとなれば、間違いなく深夜の仕事へと回される。なんとしても夜勤だけは避けなければ。

残念そうに目を逸らすテラと、物珍しそうな顔で見る同僚の脇を通り、机へと向かう。

「よっ、今月五回目の定時出勤。気分はどうなんだ？」

悪態をつきつつ声をかけてきたのは、もちろんカルバドスだ。

「ん？ ああ、大分良くなってきたよ。当分の間全快にはならないだろうけど、我慢しなくちゃね」

「そうだな、どんな映像を見たかは知らないが、これからは嫌っていうほど見なきゃいけないからな」

「あれ以上の映像は、見れないと思うなあ」

「そんなに凄かったのか？」

両手を軽くあげ、カルバドスから天井へと視線を上向かせる。

「あんな死に方する人が、いてもいいのかって、疑問に思うぐらいね」

「どんな事象でも起こってしまえば現実、そして現実とは紛れもない現実なのだ」

「何よそれ？」

聴きなれない言葉に視線を戻すと、カルバドスは人差し指を顎の前に立てた。

「つまりだ、どんなに信じられない出来事でも、数万分の一の確率でも、起こってしまえばそれは現実だ。そして、現実が起こったことは、曲げられない真実にもなる」

「よくわからないけど」

「死んだと認めない人に言ってみな？ 納得してくれるから」

得意げに述べ、カルバドスがウインクをしてみせる。正直に言うて気味が悪い。

「カルバドスの教えなんて役に立ちそうにないけれど、いちおう覚えとくわ」

「だてに十三年も、この仕事をやってない。もつと信用しろよ」

「他の人なら説得力があるけど、カルバドスじゃあね」

「ひどい言われ様だな、まったく」

先ほどまでとは反対に、不機嫌そうに顔をしかめたカルバドスは、腕を組んでわたしから顔を逸らした。

「冗談よ。それよりまだいいの？ 迎えに行かなくても」

「おっと、そうだった。早く行かないと迷子になるからな」

死んだ人を迎えに行くわたしたちは、ある意味では時間との戦いでもある。

室内ならまだしも、交通事故や墜落事故など野外での死亡者は、自分が死んだことに気がつかず、どこかへ消えてしまっている場合がある。

そうになると、幽霊や亡霊なんて話に発展しかねない。

わたしたちの到着が遅れば遅れるほど、その可能性は高くなるのだ。

「じゃあ、行ってくる。今日はちゃんと自分で行けよ」

カルバドスは昨日と同じように、豪快な笑いと共に去っていった。

「さてと、鷹野信也君について、復習でもしようっと」

机の上から資料を探し出すと、声に出して読み始めた。

「鷹野信也。十七歳独身……って、当たり前じゃない。性格は温厚で淳良、学校でも人気あり。人の前で目立ったことをするのが苦手で、すぐに顔を赤らめる。そうそう、それでかわいい子どもだって思ったのよね」

綴られた資料を一枚めくって続きを読む。

「横断歩道に飛び出した子どもをかばい、自分が車に撥ね飛ばされる。そのまま気絶、病院での手術の甲斐も無く絶命か」

もう一枚、資料をめくる。そこには家族や友人の関係図が記されていた。

「父親を早くに亡くして、母子家庭で育ったと。一番の友人は三村光輝、つきあっていた

彼女は、山倉優美!？」

以前は気にもしなかった内容でも、昨日のビデオと照らしあえば、この文章が表す衝撃的な事実はあるからかだ。

信也君と優美ちゃん両想いで、つきあっていた。お互い揺るぎない夢と希望を抱え、一生懸命に生きていくとしていたはずだ。

ただ、この二人は他の死者とは違い、少しは幸せかもしれない。なぜなら死後の世界とはいえ、最愛の人とすぐに一緒になれるのだから。

「二人とも、特に悪い人って訳じゃないし、きっと天界に来れるだろうしね」

わたしは何度か頷くと、資料を持って職場を後にした。信也君が亡くなるまで、そう時間はない。

目的地は吉沢総合病院の霊安室、そこに信也君はいるはずだ。

職場を後にして、わたしは外に出た。無限に広がっているかに見える大地が、目の前に広がっている。

数分歩くと、そこは中界の入り口だった。

城壁のような壁に、巨大な赤い扉が備えられている。扉の上には『閻魔城 中界 日本支部』と書かれた看板が、威風堂々とわたしを見下ろしていた。

扉から見て真正面に、いくつものパソコンが並んでいる。

これが中界と、生きている人の世界——わたしたちは現界と呼んでいる——とをつなぐ階段を発生させる装置だ。

「目的地、吉沢総合病院…… っと」

呟きながら入力すると、装置が音をたてて動き出した。そのまま下方へと、カラフルな階段が伸びていく。

わたしが最上段に乗ると、階段は自然に動き出した。

このまま乗っておけば、吉沢総合病院の屋上へとたどり着く。時間にして、十五分ほどだ。

10月25日(2)

資料にもう一度目を通すと、信也君の遺体は霊安室に安置してある。

霊安室に迎えに行くのは、わたしたちの仕事では一番多い。吉沢総合病院の霊安室も、何度も行った経験がある。

屋上にたどり着くと、わたしは一目散に霊安室へと向かった。

屋上から院内へと続く扉を、難なくすり抜ける。中界の人はもちろん、死んだ人達も現界の物質をすり抜けることが可能である。

屋上から階段を下りると、そこは三階にあたる。

看護師や患者の横を通り過ぎ、わたしは廊下を突き進んだ。もちろん、わたしの姿は誰にも見えていない。

「ちよつと遅れちゃったかな？ もう信也君いるかも」

いそいで廊下を直進し、霊安室と書かれた扉の前に立った。

中に入るために、わたしは扉を通り抜けようとした。すると、

「ひゃあ！」

突然、扉から一本の手が、わたしの目の前へと飛び出してきた。飛び退きのけぞったわたしは、無様にも尻餅をついてしまった。しびれるような痛みがお尻に広がっていく。

「いたたた……いたいなんなのよ！」

荒々しく吐き捨てながら、お尻をさすって立ち上がる。改めて扉を貫通しようと歩を進めると、

「うひゃあ！」

再び扉から手が飛び出してくる。しかも今度は二本の手だった。

再びのけぞったわたしは、尻餅をつき、さらに勢いあまって後転して、壁にお尻を強打してしまっていた。

「い、いたいなんなのよまったく！」

壁にお尻、床に顎をつけたまま、扉を見上げる。

きつとわたしが来ないうちに、扉に迷子の死者が取り付いてしま

つたに違いない。地界に行きたくないがために、案内人であるわたしを拒否するのだ。早急に連行班を派遣させなければ。

体をひねりつつ起き上がろうとすると、視線の隅に足を引きずる女性が姿を現した。

「優美ちゃんだ」

愛する男性を失った優美ちゃんが、絶望で顔を歪めていた。涙がとめどなく流れ落ち、頬に跡を何本も作っていた。

震える腕をなんとか動かし、霊安室に入る扉を全開にする。

そのまま優美ちゃんは部屋の中へと入っていった。

「かわいそうに。でも数日の辛抱だからね」

体制を整えたわたしは前髪を無造作にかきあげると、開けっ放しの扉から中へと入っていった。

いくつかの蠟燭に火が灯り、薄暗い室内。

目の前には信也君の体に寄り添って、むせび泣く優美ちゃんの姿があった。その横に、わたしの目的である信也君が立っている。

信也君は茫然自失といった面持ちで、優美ちゃんを見下ろしていた。優美ちゃんと同じく、愛する女性を残して死んだことに、苦しみを抱いているのかもしれない。

「おい、起きろよ、起きろってば！」

自分の死体へと信也君は近づき、一生懸命に起こそうとしている。もちろんそれで死体が起きるはずもなく、不動を貫き通している。

信也君にも無駄な行為というのが、容易に分かったらしく、がっくりと膝を突いた。

「頃合いかしら……」

わたしは信也君へと近づき、優しさを装いつつ声をかけた。

「そろそろ自分が死んだって、認めてくれたのかしら？」

信也君が振り向く。色男というよりも、優男という言葉が似合いそうな、写真よりもかわいい青年だった。

ただ、すでに涙でぐしゃぐしゃになった顔は、本来とは別物に違いない。

黒髪にパーカーを着込み、黒いジーンズをはいた姿は、死ぬ直前の格好のはずだ。

10月25日(3)

「諦めが悪いというか、鈍感というか……」

「だ、誰だ、あんた？」

「誰？ 相手の名前を知りたい時は、まず自分から名乗るべきじゃないの？」

一瞬ひるんだ信也君を見下ろし、髪をかきあげる。そして、わたしの言った言葉に理解を示したのか、

「ご、ごめん、僕は……」

と、名乗ろうとしていた。わたしはひそかに微笑みながら、信也君へと切り替えます。

「鷹野信也君……でしょ？」

予想以上の驚きっぷりに、わたしの頬はさらに緩んでいた。面白いほど顔によく出る。

わたしはおもむろに右手を差し出し、自己紹介を始めた。

「わたしはミリア＝ミリス。天界と地界を結ぶ中界で、案内人の仕事をやっているわ」

「中界？ 案内人？ なんだよそれ……」

当然の反応に、慌てず対応する。この程度なら案内人マニュアルに全て記されている。

「天界と地界は、生きている人々——わたしたちは現界人って呼んでるけどね——その現界人が言ってる天国と地獄みたいなもの。中界ってのはエンマ様が、天界と地界の仲介をするところってわけ。あ、別にダシャレじゃないから」

このネタは、いつもわたしが迎えに行った死者に対して使うものだ。秀逸だと思うのだけれど、あまり評判はよくなかった。

信也君も例に漏れず、あっさりとスルーしてしまった。乙女の遊び心を理解できる、余裕のある死者はいないのだろうか？

「ぼ、僕は死んでいない！」

不意に、信也君が声を上げる。半ば呆れつつも、相手をしてあげる。

「あれ？ まだ認めてないの？」

「そうだ、こんな馬鹿げた話、あるはずがない。天界と地界にエンマ様のいる中界。迎えに来る使者だって？ ありえないよ！」

「あのねえ」

あいた口がふさがらないとは、まさにこのことだ。往生際のいい人も、死者の中にはほとんどいない。もう少し現実を見てほしいものだ。

「そうだ、これは夢だ。よくある夢だよ」

「よくはないと思うけど」

「まだ十代なんだぜ？ 死とは一番かけ離れた場所にいるんだぞ」

「一番かけ離れてるのは、十代よりも生まれたばかりの赤子じゃない」

「うるさいな、さつきからしつこいぞ。夢の人物なら、ちょっとは気を使えよ」

「んじゃ、気を使って一言いいかしら？」

カルバドスの言葉を思い出し、早速使ってみる。

「どんな事象でも起これば現実、そして現実とは紛れもない真実なの。分かる？」

途端に、信也君の荒々しい口調が止まる。

カルバドスの助言が役に立つなんて、わたしの人生で、三本の指に入るであろう珍事だ。

「ってことは、やっぱり僕は……」

「そう、死んだのよ」

はつきりと告げると、信也君はようやく大人しくなった。信也君の手をつかむと、強めに引っ張る。

「さっ、行きましょ？ わたしだって他に仕事があるんだから」

本当は他に仕事なんてない。だけど、早く帰りたいかった。

仕事の後で喉を潤す一杯を、邪魔されたくはない。

大人しく引きずられていく信也君が、何を思ったか、突如わたしの手を振り解く。

振り向くと、わたしを強い眼差しで睨みつけていた。

「なに、どうしたの？ もしかして地界に行くのが怖い？ 大丈夫だつて！ 信也君はいい子だから、きっと天界に行けるからさ」

「そうじゃない。僕は行かないんだ」

「はあっ？」

思わず、怒りのこもった強い調子で問い返す。わたしは頬を叩き、再び案内人スマイルを取り戻した。

「僕は山倉を支えるって約束したんだ！」

また馬鹿げた宣言をする——そう思いつつも、きちんとした対応をしてあげた。

「ふーん……じゃあ聞くけどさ、死んだ信也君が、どうやって優美ちゃんを支えるって言うの？」

「そ、それは……」

「確かに死んだ人を心に抱き続けて、それを支えに生きている人もいるらしいわ。でも、それは別に死んだ人が何かしてあげてるわけじゃない。生きている人が自分のために、自分で心にとどめているだけ」

「だ、けど！」

反論しようとする信也君を、無碍に扱き下ろしてやった。こうなつては、優しく説得なんて無理な話だ。

「けどもへつたくれもないわ。あなたは死んでしまったから、優美ちゃんには触れないし、声も聞こえない。まあ、顔を見れば分かるけど、そこに横たわっている死体が信也君だってことは間違いないから」

「嘘だ！ そんなこと……」

「嘘？ どこからそんな結論が出てくるのかしら。実際に信也君は何も触れない。声も届いていない。全部わたしの言った通りになつてるじゃない。それなのに、わたしの説明が嘘だって言えるの？」

信也君が、ぼろぼろと涙をこぼし始める。

絶叫する信也君を見て、ようやく一つの区切りがついたと判断する。このまま調子に乗せてしまえば、本気でここに残ろうと、暴れ始めるかもしれない。

「さっさといくわよ！ いい、もう一度言っわ信也君。あなたは死んだの！ もうあなたが優美ちゃんにしてあげられることは、何もないのよ！」

最後の引導を渡すと、信也君の体から力が抜けていくのがはっきり分かった。

10月25日(4)

再び手を握ると、信也君を引っ張る。屋上まで戻ってエスカレーターに乗せれば、こつちのものだ。

といつても、通例どおりならば、これで終わるはずもなかった。諦めきれない死者が、最後のお別れをしたいと言い出す——よくある話だ。

「ミリアさん……」

「ミリアでいいわよ。なに？」

「じゃあミリア。少しだけ、時間をくれないかな？」

予想が的中したわたしは、高らかに信也君を笑い飛ばしていた。こつちもピタリと予想が的中してしまうと、笑いたくなくても笑ってしまう。

意に反した態度に腹を立てたのか、信也君がわたしの胸倉をつかんできた。

「な、何がおかしい！」

「おかしいわよ。死んだ人ってみんな同じこと言っただもん。死んだ人間が喋つても、現界人には聞こえないんだよ？ それなのにお別れだなんて——意味のない行為だよ」

「やってみないと、分からないさ」

「正気なの？」

「もちろん」

本当なら首に縄をつけてでも、すぐに中界へと連れて行きたかった。

だけど、死者がこう言い出した場合は、その望みを叶えさせねばならない——これも、案内人のマニュアルにある規定だった。

「五分間だけだからね！」

わたしは片手を開いてみせると、そのまま部屋の外へと向かった。ありがとうミリア。恩にきるよ」

背後から信也君のお礼が聞こえるも、無視して部屋から出て行く。意味のない行為に付き合うほど、お人よしではない。

「まったく死者ってのは、どうしてこうも頑固なのかしら……」

霊安室の外で、思わずぼやきが漏れる。

大抵の死者は、無駄だと話してもお別れを言いたがる。お別れを言わないと、納得しないのだ。

もちろん最後のお別れなんて、現界人に届くはずもない。十人が十人、肩を落としてその場を去っていく。

わたしはその光景に、何度も出くわしている。今までに例外は一つもないのだ。

だからこそ、わたしは死者に無駄だと説明する。

三年間仕事をやり続けても、この疑問だけは未だに解明されなかった。

しかし他の同僚に聞くと、この行為は当たり前で、それを妨げようとするとわたしの方がおかしいと言うのだ。

「どうしてかなあ？ 生きた経験のある人と中界で生まれたわたしでは、何かが違うんだろうか……」

ずっと不思議ではあるけれど、その答えが導き出されるはずもなかった。

なぜなら、現界で、現界人と同じ生活、同じ恋をするなんて、中界で過ごすわたしにはありえないからだ。

「あれ？」

ふと気がつく、優美ちゃんが来た方向から、一人の女性が早足で歩いてくる。

黒い革製の服に、球体の物質を持って。

そのままわたしの側まで来ると、信也君のいる霊安室へと入っていった。

「今の人も、信也君の関係者かなあ」

どんな関係かは知らないけれど、どうでもいいのも確かだ。

そろそろ五分経ったと判断し、わたしは再び霊安室の壁を通り抜

ける。

先ほど入っていった女性が、優美ちゃんの隣で泣き崩れていた。信也君は二人に背を向けて、涙を流し続けていた。

「お別れは済んだかしら？」

わたしが声をかけると、信也君は無言のまま頷いた。ようやくこれ、わたしも仕事をまっとうできる。

10月25日(5)

「優美ちゃんか。いい子そうだね」

泣き続けて止まない優美ちゃんに、目をやりながら話しかける。

「いい子そうじゃなくて、いい子なんだよ。支えることのできない僕のために、こんなに涙を流してくれてる。苦しいけど、少し嬉しい気もするよ。おかしいかな？」

「さあ？ わたしには分からないし、関係のないことだわ」

なぜか再び、信也君の眼差しに怒りが生まれる。

わたしは一瞬ひるむと同時に、信也君を慰める言葉を思いついていた。

早めに信也君の怒りを静めようと、深く考えもせずに、その言葉を元氣よく発する。

それが重大な意味を持つ、最悪の失言とも気づかずに――。

「まっ、いいじゃないの。すぐにまた一緒になれるんだからさ！」

途端に、信也君の動きが止まった。震えはもちろん、涙まであつさり止まる。

「すぐ？　すぐってどういう意味だよ？」

「そりゃあ……」

説明しようと、頭の中で整理を始める。そこでようやく、わたしは自分の失言に気がついていていた。

「やばっ！」

慌てて口を塞ぐも、時すでに遅し。信也君は確信を得た面持ちで、わたしに近づいてきていた。

「っ、つまりね、天界にいれば楽しすぎて早く時間が流れるから、一瞬で優美ちゃんと一緒になれるって意味よ。そうそう、そういう意味なのよ。まったく信也君ったら、何を勘違いしてるんだか……」

執拗にわたしの瞳を覗いてくる信也君に、わたしは慌てて目をそらした。

わたしは黙って、信也君の次の言葉を待った。唇を噛みつつ、うまくごまかせたと信じて……。

「それで？ 本当はどういう意味なんだ？」

現実はその甘くはなかった。現実には真実になるという、カルバドスの言葉が、今度はわたしに向けられて、発されている気がした。

「や、やだなあ信也君、いま言ったばかりじゃない。ひよっとして死んだショックでぼけちゃった？」

「フフフフ……」

「ハハハハ……」

うつむき加減で、不気味に笑う信也君。それに合わせて、ごまかし笑いを放つ。

次の瞬間には、信也君は顔を上げ、わたしの胸倉をつかんできていた。

「どういうことだ！ すぐってどういう意味だよ！」

「ちよっ、くるし、信也君！」

顔が高潮し、息苦しさがわたしを容赦なく襲ってくる。必死になって信也君を振りほどこうと、腕に力を込めるも、徒労に終わっていく。

「だったら説明しろ！ 何がすぐなのか、山倉がどうなるのかきちんと説明しろ！」

「説明、する、するから！ 離してよ！」

もちろん、説明なんてしたくなかった。

だけど、このままでは本当に殺されかねない——そんな危機感が、わたしの中に芽生えていた。

ようやく信也君の手から力が抜け、わたしの体は開放された。渴ききった喉に吹き込む空気が、わたしに幾度もの咳を放たせる。

「で、どういうことなんだ？」

わたしの苦しみも何のその。平然と問う信也君に、怒りが爆発し

ていた。

「こ、こっちは死にかけたのよ！ 自分の行為に対してのお詫びはないわけ！？」

「死にかけたって、もう死んでるんじゃないのか？」

これだから無知な現界人は困る。いや、元現界人か。

「わたしは元々天界で生まれたから、最初からこうなのよ！ どっちにしたって天界や地界の住人が死んだらそれこそ本当の消滅！

二度と笑ったり遊んだり、できなくなるんだからね！」

プイツと顔を背け、自然と漏れる愚痴に身をまかす。

「まったく、元現界人が。中界についたらどうなるか……そうだ！
そこでわたしは一計を閃いていた。この場はうまく収め、自然な流れでエンマ様の下へと連れて行く妙案だ。

「悪かったよ、謝るからさ。でもそれじゃあ落ち着けないんじゃない？」

……

「大丈夫よ、天界じゃ滅多に起こらないし、殺した方も消滅するんだからさ！」

舌を出して挑発すると、信也君の顔が青ざめていく。

やはり、恐怖というものにはあまり耐性がならしい。

「さっ、エンマ様の所へ行きましょ！」

わたしは信也君をこれでもかというほど笑い飛ばし、腕を引っ張った。だけど――、

「ちよつと待て」

あっさりど、わたしの妙案は看破された。

恐怖を植えつけて、動揺を誘い、うやむやのうちにエンマ様の下へと、連れて行こうという計画だったのに。

「そ、そんなに甘くはないわよね……」

言いながらも、わたしはまだ諦めてはいなかった。部外者——それも死んだばかりの信也君に、詳細を教えるわけにはいかない。

そんなことをすれば、わたし自身がどんな目に合うか。

地界巡礼、給与没収——想像しただけで寒気が生まれる。

思わずわたしはその場に座り込み、頭を抱えてしまった。

「その通りだ。さっ、分かりやすく説明してもらおうか？」

腕を組んで、信也君は冷たくわたしを見下ろしている。

「分かった、分かったわよ！ 教えればいいんでしょ！？」

「そう、教えればいい」

勝ち誇った笑みに、わたしは心中で舌打ちをする。

なんとかして時間稼ぎをしなければ――。

「んじゃ、行きましようか？」

「だから、その手はくわな……」

再び振りほどこうとする信也君を、わたしは目で止めた。

「そうじゃなくて、説明に最適な場所へと案内するのよ。百聞は一見にしかずって言うでしょ？」

「本当だろうね？」

「この可愛いミリアちゃんが、嘘なんてつくと思う？」

につこりと微笑んでみせると、信也君は納得したのか、何も言わなかった。

わたしの本心を見抜けないとは、まだまだ甘いようだ。お子ちゃまの域を出ていない。

10月25日(6)

「んじゃ、こつちよ」

信也君の手をつかんで、屋上へと案内しようとする、信也君は不満そうにわたしの手を振り払った。

「小さな子どもじゃないんだからさ。引っ張らなくてもついていくよ」

「そう、じゃあついてきてね」

わたしは壁をすり抜けると、廊下を進んでいった。

「どうにかして、信也君をエンマ様の下へと連れて行かないと……」
ぼやきつつ、ふと振り返ると、信也君の姿がなかった。

「あれ？　もしかして迷子！？」

慌てて引き返して、霊安室へと戻る。壁をすり抜けようとするわたしの額に突如、激痛が走った。

「あ、あれ？　どういうことだ？」

間抜けな信也君の声が、耳に入る。

額を押さえるその姿から、わたしの痛みの要因が、信也君であると理解できた。

「もっつ、どうしてついてこないのよ！　迷子になられたら困るんだから、さっさと来てよね！」

わたしは無言を言わず、信也君の手をつかんだ。信也君も今度は、大人しくついてきている。

廊下にいる人々をすり抜け、わたしは屋上へと向かった。

もちろん頭の中は、機密事項を朗詠せずに済む方法を、模索するので精一杯だ。

「ミリア、どこに行くんだ？」

「中界だっていつてるじゃない。何を聞いてるんだか……」

頭をフル回転させているときに、信也君のあり得ない問いかけ。わたしはいらだちながら、小声で愚痴をこぼしまくった。

「さつ、ここから行くからね」

屋上に着くと、中界へとつながる動く階段が、わたしたちを出迎えた。

美しい色合いの動く階段には、死者の多くが感動を覚える。信也君も例外ではなかったようで、視線が釘付けになっている。

「これを上っていくのか？」

信也君がふと上を見上げ、わたしに問いかけてくる。

「大丈夫よ。現界というエスカレーターみたいなものだから。さつ、行くわよ」

わたしたちは、階段の一段目へと足を乗せた。動き出した階段が、上方へとわたしたちを導いてくれる。

中界に着くまでの約十五分、わたしのやることは言うまでもない。現界を見下ろす信也君をそのままに、わたしはまた一つ妙案を浮かばせていた。

見抜かれる可能性は高いかもしれないけれど、やらないよりはましだ。

「今まで、ありがとうございました」

信也君が現界へと頭を下げる。どうやら未練を断ち切ったらしい。

「さてと、もういいかな？」

声をかけると、信也君は無言で頷いた。

「それじゃあ今から天界と地界について説明するわね。地界の説明なんて信也君には不要だろうけど、一応ね」

これも案内人としての仕事の一つである。

「さつきも言ったけど、簡単に言うとな界と地界は現界人に天国とか地獄と呼ばれてる場所ね。とりあえず殺人や銀行強盗でもしないかぎり、大抵は天界に行けるわ。天界での生活は——まあ現界人の生活とかわらないかな？ 朝起きて、仕事に行って……」

「仕事って……死んでまで仕事しなきゃいけないのか？」

心外だと言わんばかりに、信也君が異議を申し立てる。

「死んでまでって、信也君は仕事してるわけじゃないでしょ？」

核心をつかれたせいか、信也君は一步後ずさった。何か言いたそうな信也君をそのままに、話を続ける。

「まっ、仕事をしなくても大丈夫よ。最初はそう望む人がほとんどだしね。だけど考えてみなさいよ。目標もなく毎日ボーツと過ごすなんて退屈でしょうがないと思わない？ だから仕事っていつても暇つぶしみたいなものの。心配しなくても大丈夫だって！」

元氣付けようと、信也君の背中を叩く。心なしか痛がっているようにも見えたが、気にしない。

「あと、天界の人間は将来的には生まれ変わるわ。いつになるかは分からないけど、生まれ変わりたいという嘆願書を出せば、少しは早くなるらしいよ。もちろん、今までの記憶なんかは無くなるんだけどさ」

わたしは信也君を脅えさせる演出のため、いったん話を切ってから、怪談を話す要領で語り始める。

「問題は地界の方ね。悪い人と、あとは自殺した人かな？ エンマ様がよく言ってるんだけど——生きるための努力が報われず死んでしまう人もいるのに、自ら命を絶つなど言語道断——ってね。地界に落ちた人は鬼たちによつて半永久的に苦しめられるの。その方法は様々なんだけど、その苦しみから解放されるのは、鬼が勢い余つて殺してしまった時だけだって。怖いわよねえ！」

信也君はあっさりと、術中にはまった。顔を曇らせ、恐れおののいているのが手に取るように分かる。

「まっ、信也君は悪い子じゃないみたいだから、天界に行けると思うけどね」

軽くフオローを入れて笑ってあげる。これで準備は万端。今度こそ信也君をエンマ様の下へと、引きずりこまなければならぬ。

「ついたついた。ここが中界です。ようこそ信也君！」

仏頂面だった信也君の表情に、少し明るみが戻る。

10月25日(7)

辺りを見回しつつ、信也君は足元を確認した。

「地面って、雲じゃないんだね」

「雲の上にあつたら、雲がないときには中界がないってことになるでしょ。ただ生きている人には見えないだけ」

せっかくの説明も聞いているのかいないのか、まったく分からなかった。信也君の周囲への興味は、まだつきそうにない。

それを遮るように、わたしは正面の赤い扉を指差した。

「ここがエンマ様が働いている場所だよ。ここで天界行きか地界行きかを判定されるってわけ。それじゃあ、サツサとエンマ様に会って天界へと行きましょうか！」

わたしは足取り軽く、正門の方向へと進んでいった。

だけど、信也君はついて来ていない。振り返りつつ、

「どうしたの、早く行こうよ」

尋ねてみる。信也君は鼻で笑ってから、

「ああ……って言うんでも思っただの？」

冷淡な囁きだった。すぐさま自分の浅はかな策略は、信也君に読まれていたのだと理解する。

「ちえっ、やつぱりダメか……」

「当たり前だよ」

「地界の説明で恐怖心を煽って、ごまかしたと思ったんだけどなあ」
ぼやきながら、仕方なくわたしは正門から足の向きを変えた。

「それじゃあこっちに来て。わたし達の仕事場で話をするわ」

「仕事場なんて、僕が入り込んで大丈夫なのか？」

確かにこのまま入れば、信也君が部外者であるのは明らかだった。
「それもそうね。んじゃこれをつけといて」

わたしはポケットから、緑色の腕章を取り出して、信也君へと差し出す。

「これは中界で働く人の身分証明書みたいなものの。色によってどの部署か区別が付くようになってるわけ」

以前、仕事中に無くしてしまった為に、職場へと戻れなくなった。それ以来わたしは、予備としてポケットに腕章を入れている。

——こんな時に役に立つとは、思いもしなかったけど。

「これをつけておけば……」

「あなたも案内人として働いてると思うてくれるでしょうね。もつとも同じ部署で働いている人に見られたら危ないけど。とりあえず見習いだってごまかすしかないわね」

テラに遭遇という一番最悪なパターンが、ふと頭に浮かぶ。

もしも信也君が本当の見習いなら、わたしよりも先にテラへと連絡が回るはずだ。

つまり、テラに出会った時点で、わたしの罰則は必至となる。

夜勤移動、テラへの肩もみや土下座——絶対に御免こうむる。

信也君が腕章をつけたのを確認してから、わたしは歩みを進めた。職場へとつながる黒い扉に、問題なくたどり着く。

『関係者以外立ち入り禁止』

今さらながら、その看板に脅えが生まれていた。

いつもこの扉の前に来るたび、関係者以外が入るなんてあり得ない——と、思っていただけに、いっそう強い罪悪感が沸き起こる。

だけど、真の勝負はこれからだ。この中に緑色の腕章を持った人間が、まったくくない状態を願うしかない。

「じゃあ、行くわよ。下手な演技でバレないようにね」

「それはこっちの台詞だよ」

まるで見下しているかのように、あきれ果てた口調でばやく。

『何よそれ！ わたしのせいではあるって言いたいわけ！？』

心の中で反論しながら、頬を膨らませる。

ゆっくりと扉を開けると、中から喧騒が聞こえてくる。案内人だけでなく、中界で仕事をしている人は多い。

わたしが前へ進もうとすると、信也君は立ち止まったまま、動こ

うとしなかった。

「どうしたの？ ポケーツとつつ立って。なんかあった？」

「いや、忙しそうだなって思ってた……」

確かに職場では、紫や赤、青色などの腕章が、職場を乱舞している。

だけど、その光景は、大して珍しいわけでもない。

「そうかな？ いつもこんな感じだと思うけど……」

信也君が混濁した、深いため息を漏らす。

「さっ、こっちょ」

わたしはそんな信也君を引っ張り、目的地へと急いだ。

その場所とは、優美ちゃんが死ぬビデオを見た部屋だ。あの場所でビデオを見せれば、信也君も納得してくれるだろう。

「おい、ミリア！」

背後から聞きなれた声が響き、わたしの心臓は高らかに鳴り響いた。

振り向くと、そこには仕事を終えて帰ってきたカルバドスの姿があった。

「あ、カ、カルバドスカ」

「珍しいな。仕事が終わってるのにまだいるなんて……」

「えっ、あっ、うん、ま、まあね」

一生懸命に頭をフル回転させ、わたしは信也君を背後へと隠そうとした。

だけど、信也君はわたしの心をまったく理解していないのか、動いてくれない。

カルバドスはあっさりと、わたしの行動に違和感を感じ、首をかしげている。

信也君の顔と腕章を交互に見やりながら、わたしに当然の質問を投げかけてきた。

「ん？ 誰だこいつ……案内人の腕章をつけてる割には見かけない顔だな」

「あ、この子はね、そのう……」

満面の笑顔で、ごまかそうと試みる。

——と、突然何を思ったか、信也君がわたしの前へと足を踏み出し
ていた。

「あ、あのですね。僕は鷹野信也というものです。このたび命を落
としたため、こちらで案内人の仕事をする事になりました。それ
で仕事をミリアさんに教わったところなんです」

「なんだ、そうだったのか。そうならそうと早く言えよミリア」

わたしは笑うしかなかった。いきなりのピンチに平然と嘘をつく、
信也君という人間に脅威を抱きつつ——。

「おれはミリアの同僚……つまり君とも同僚になるカルバドスって
もんだ。まあこれからよろしく頼む」

「こちらこそ、若輩者ですがよろしくお願いいたします」

「おお、礼儀正しい子じゃないか。ミリア、しっかり仕事を教えて
やれよ？」

言いながら、わたしの肩に手を乗せて、耳元ではそりと呟く。

「テラには内緒にしといてやるから、焼肉食い放題な？」

そのまま勝ち誇ったように笑いながら、カルバドスは職場から去
っていった。

やはりというか、当然というか、長い付き合いのカルバドスを騙
せるはずもなかった。

これでわたしは、焼肉食い放題をカルバドスへと奢らなければな
らない。

それでも、テラに見つかった事態を考えれば安いもの——そう、自
分に言い聞かせた。

「ミリア、大丈夫か？」

焼肉の予算を計算していると、信也君が心配そうに声をかけてく
る。

全ての元凶のくせに、まったく悪気がないのが口惜しかった。

「なんとかね、相手がカルバドスで助かったけど……とんだ貧乏く

じだわ」

わたしは首を左右に振って、考えるのを止めた。もたもたしている、今度こそテラに見えられかねない。

わたしが歩みを再開すると、信也君も黙ってついてくる。

10月25日(8)

ビデオルームに辿り着くと、素早く鍵をかける。ようやく安堵感に包まれ、全身から力が抜けていった。

部屋は昨日とは違うけれど、内装はほとんどかわらない。しいて言えば、ソファァーの色が赤色と青色で違うといったぐらいだ。

「さてと、適当に座ってて」

信也君にソファァーへと促すと、黙って信也君は言うとおりにした。パソコンへと、パスワードと優美ちゃんの名前を入力して、再び昨日見た、あの忌まわしいDVを取り出す。

本来なら二度とお目にかかりたくない代物だけれど、見せなければ信也君は納得してくれないだろう。

「お待たせ」

DVを、信也君へと見せる。首を傾げながら信也君が、

「なんだよ、それ」

当然ながら尋ねてくる。わたしは自慢げに胸を張って答えた。

「優美ちゃんの死ぬ瞬間が、収められたビデオテープよ」

「山倉が死ぬ瞬間!？」

信也君が勢いよく立ち上がると、わたしの手からDVをひったくる。ラベルを確認しながら、わたしの顔をまじまじと見やった。

DVの説明を軽く済ませてから、信也君から返してもらう。

「それじゃあ再生するからね」

デッキにDVを入れてから、再生ボタンを押す。

ただ、前回とは違い、優美ちゃん個人を映すのではなく、会場全体を映した映像へと切り替えておいた。

もう一度あの肉片の映像を、見たいという人は少ないだろう。それが愛する女性なら尚更だ。

映像がテレビから出力される。会場を天井から見下ろしたような、そんなアングルだった。

「ここは信也君たちが、修学旅行で行く予定の、サーカス会場だよ」
補足説明をすると、信也君は何やら考え事をしてから、

「それで、山倉はどこに？」

と、問いかけてきた。

「あとで説明してあげるから、今は映像を見ときなさい」

一喝すると、しぶしぶとテレビ画面へと興味を戻した。

しばらくすると会場内に、係員の爆弾発言がこだまする。そしてしばらく後に爆音が轟き、映像は終わった。

「と、ということなの、分かった？」

「いや、頭の整理だけで精一杯だ」

それはそうだろう……と心の中で思いながら、きちんと説明してあげる。

「現場には爆弾がいくつか設置されてて、そのうちの一つをサーカス団員がみつけたの。現界ではテロ目的とか、ツーリストに対する恨みとか、いろんな推測が飛び交ったけど、結局は目的不明のまま事件は迷宮入り。だけど、中界で仕事をしているわたし達には分かるのよ」

わたしはパソコンを動かし、中界のデータを呼び出した。それから信也君を呼び、内容を確認させる。

呼び出したデータは、優美ちゃんが死ぬ原因となった男のデータだった。

「自殺をしたいが一人で死ぬのが怖いという理由で、サーカスの会場に爆弾を仕掛け、その爆弾で死亡！？」

わたしが後ろを振り向くと、信也君は呆然と口を開けたまま固まっていた。

「現界ではこの人も爆弾に巻き込まれたと思われていたけど、そうじゃなかった。この人は自らの意思で爆弾を仕掛け、爆弾によって死ぬことを望んでいたのよ」

「それが山倉の死因……」

「そうということね。まっ、偶然とはいえサーカス団員が爆弾を見つ

けてくれたおかげで、死者は三人で済んだんだけどさ」

一歩だけ前に出てきた信也君が、ふと動きを止める。

何をしたかったのかは、よく分からないけれど、悔しそうに顔をゆがめているのは確かだった。

「優美ちゃんはサーカス見学るとき、一番前の席にいたの。普段の優美ちゃんならすぐに逃げ出せたでしょうけど、骨折が原因で出入り口まで逃げ切れなかった」

「……なんで山倉が一番前の席って知ってるんだ？」

「普通にわたし達が見るときは、死んでしまう人をアップにしてみるからね」

「だったら最初からそっちを見せてくれれば早かったじゃないか！」
反論してくる信也君に、わたしはいらだちを覚えていた。

爆発させたい怒りをなんとか静めて、冷静に信也君へと告げる。

「見たいんだ。信也君の大好きな優美ちゃんが、爆弾でバラバラに吹き飛ぶ瞬間を。普段から人の死に触れているわたしですら、吐きそうになった映像をさ」

信也君の喉もとから、唾を飲み込む低い音が聞こえてくる。全てを察知したのか、

「ごめん……」

と、素直に謝ってきた。

「いいのよ。分かってくれば」

そう返すわたしにも、信也君は表情を崩さなかった。自然と重くなる空気。わたしはこの空気が一番嫌いだ。

仕方なくわたしは手を打ってから、ちよつと信也君をからかうことにした。

「そうそう、信也君が死ぬ瞬間のビデオを見た時はね。ありがちな死に方だねえって笑いながら、お煎餅をかじってたわ」

「な、なんだよそれ！」

狙い通りに、食いついてくる信也君。

「だって交通事故でしょ？ まっ、子どもの命を救ってるんだし、

無駄死にじゃなくてよかったじゃない」

信也君の肩を叩きつつ、笑ってみせる。

信也君も最初は仏頂面だったけれど、すぐに笑みを取り戻していた。

10月25日(9)

少し軽くなった空気に勢いを任せ、信也君の手を引っ張る。

「これで優美ちゃんが死ぬ理由は分かったでしょ？ エンマ様のところへ行こつ！」

わたし達はビデオルームを後にして、仕事を素早くすり抜けていった。帰りは誰にも会わずに済んだのが、不幸中の幸いである。

そのまま中界入り口にたどりつくまで、信也君は一言も喋らなかった。

ただ、手を引いているため、ついてきているのだけは確かだった。「さつ、いよいよエンマ様とご対面ね！」

わたしが赤い門の前に立ち止まると、信也君が緑の腕章を差し出した。それを受け取ると、ようやく信也君の口が開く。

「なあ、ミリア。どうにかして山倉を救えないかな？」

意味が分からず、呆然とする。本気でいっているのなら、まだ死んでいるという自覚が足りないらしい。

「じゃあ聞くけど、信也君は優美ちゃんを救う方法があると思う？」
逆に問いかけると、信也君からの返答はなかった。分かっているも、聞かずにはいらなかったのかもしれない。

仕方なくわたしは、少しでも希望を与えてあげた。

「もし可能性があるとするとしたら、優美ちゃんが死ぬ理由を知っている人だね。もっとも現界人限定だし、いるわけないんだけどさ」

信也君の顔が顕著に曇る。希望を与えるというより、引導を渡してしまった気がする。

押し黙る信也君をいったんおいて、わたしは受付の女性へと声をかけた。

「ミリア」ミリスです。鷹野信也君を連れてきました」

「ああ、はいはい、了解ですよ」

大学イモを食べつつ、受付嬢——といっても、もういい年なのだ

けど——が告げると、赤門がわずかに開いた。

巨大な扉なので、わずかな隙間でもわたしたちが通るには十分な広さが確保できる。

「ところでさ、ミリアちゃん」

「へっ？」

声をかけられ、間抜けな返事が放たれる。

「現界人からの評判、よくないわよ？　あまり死人に鞭打つようなひどい暴言を吐かないでくれよ」

「はあ……」

曖昧な相槌に、受付嬢はため息をついた。

「みんなに言われてるんですけどね。わたしは事実を述べてるだけです」

「その事実を述べるというのをさ、もう少し柔らかく、オブラートに包んだような言い方にしてもらえば……」

「オブラートって、なんですか？」

逆に問いかけると、深いため息が再び漏れた。

「もういいわ。でも、少しは頭に入れておいてね」

「わかりました……」

あきれ果てる受付嬢と、納得のいかないわたし。どうしていつもわたしばかりが、悪者にされてしまうのだろうか？

だけど、そう簡単に答えが導き出されるはずもなかった。ちょっと考えただけで分かるのなら、すでに見つけているはずだ。

「さっ、行くわよ」

トリップしている信也君を引っ張ると、ようやく意識を取り戻した。

二人で中へと入る。わたしと同じ格好と、その他の格好をした二人組み——同僚と死者の組み合わせだ。

ここはまだエンマ様の部屋ではなく、待合室になっている。

中央にそびえたつ赤い柱が、大きな特徴の部屋だ。椅子は相当な数を用意されているけど、全部同時に使われているのは、あまり

見られない光景だ。

玉突き事故や飛行機事故などで死者が多く出た時でも、死ぬタイミングは微妙に違うことが多い。

エンマ様の裁きは数分で終わるため、大人数は溜まらないのだ。柱の回りにある座席を選び、わたしが座ると、慌てて信也君も追いかけてきて、隣へと座っていた。

「ねえ……」

天井を見上げる信也君に、小声で耳打ちをする。

ちらりとこちらを伺う信也君に、わたしは両手を合わせていた。

「さつき見せたビデオだけど、他の人には絶対に内緒だからね？」

部外者に機密事項である死因のビデオを見せたとなれば、こうなっちゃうんだから」

人差し指と中指で、首を切る仕草をしてみせる。実際どうなるかはわたしもわからないけど、最悪な事態となれば、消滅の可能性もある。

だけど、切羽詰ったわたしの脅かしに、信也君は無言で、再び天井を見上げていた。

「ねえ、ちゃんと聞いているの？ 信也君には無関係かもしれないけど、わたしにとっては死活問題なんだからね！」

「ああ……」

横から肩を揺さぶって、ようやくうわ言のような返答を得る。

だけどそれが、気の抜けきった空返事であるのは、誰の目にも明らかだった。

「本当に大丈夫なのかしら……」

不安に身を支配されつつ、しばらく沈黙が続く。

「あの……」

唐突に声がかかり、わたしは顔を上げる。

赤いローブに身を包み、黒の腕章をつけた色白の女性。

バイトで雇われている『待合室の幽霊』こと、クレア＝ラプソディだ。

「わたしたちの番ね」

「いや、その……」

「わたしたちの番なんですよ？」

「そ、そうなんですけど、お隣の人は？」

言われて横を見ると、信也君は涙腺が緩んだらしく、目に涙を溜めていた。

「いいのいいの、気にしないで」

「で、でも、わたしが怖いのかなって。みんな待合室の幽霊だって噂してるし」

——本人にはれてるじゃない。

「そんなことないよ。クレアはとっても魅力的だって」

「本当ですか？」

「大丈夫！ わたしが保証する！」

「そうですか、ありがとうございます！ 中界一の嘘下手と噂されるミリアさんの保障なら、間違いないですよね！」

喜び勇み、鼻歌を歌いながらクレアは去っていった。

中界一の嘘下手って……なに？

複雑な心境で首を傾げるわたしの横で、信也君の涙は、ついに頬を伝い始めていた。

「信也君、順番が来たみたいだよ」

信也君を急かすと、慌てて袖で涙を拭っていた。いまさら慌てても、もう泣く姿は何度も見ているのだけ。

入り口と同じ大きさの、巨大な扉がもう一つ。すでに度重なる来訪で開いた隙間から、中へと入る。

「失礼します！」

「失礼しまあす……」

わたしに続いた信也君の声は、緊張感のない、気の抜けた挨拶だった。

10月25日(10)

正面にある灰色の壁は、実はエンマ様の机である。エンマ様自体が巨大なため、机一つでもスケールが違う。

「どうなつてんだ？」

信也君も疑問に思つたらしく、わたしに尋ねてくる。

わたしは黙つて上方を見上げた。信也君もそれに続く。

そこには見慣れたエンマ様の姿があつた。身長は三十メートルを越える、青白い肌のエンマ様だ。どうやら機嫌は悪くないらしい。

「なあ、ミリア」

緊張しているわたしの気持ちも知らずに、信也君が耳打ちをしてくる。

「何よ、もう」

「あれが、エンマ様か？」

「他にだれがいるのよ」

当たり前のことを聞かれ、心底から苛立ちが沸き起こつた。

「だってさ、もっとこう肌も赤黒くて、牙が生えてて、筋骨隆々で……」

「あの方は紛れもないエンマ様、この中界を統べる偉い人よ」

「でもさ、金槌で腕をおもいきり叩いたら、ポキッとかいって折れちやいそうだぜ？」

「そんなの無理よ。だって……」

わたしが理由を説明しようとする、重低音が室内へと響いた。

「内緒話で花を咲かせるのも結構だが、そろそろ仕事に移ってもよいかな？」

「も、申し訳ありません、エンマ様！」

わたしは慌てて、頭を九十度に下げた。

「これじゃ、どっちがエンマ様と初対面か分かんないな……」

信也君が失笑しながら、ぼやく。エンマ様の恐ろしさを知らない

から、そんなことが言えるのだ。

本気を出せば、山の一つや二つ、一瞬にして平地に出来るというのに。

「ほら、信也君も頭を下げて！」

信也君の頭を無理やり押さえつけ、エンマ様へのお詫びを示す。

信也君はそれ以上何も言わず、わたしの言うとおりに頭を下げた。

「さて……君が鷹野信也君だな？ 自己紹介をしてもいいが、すでに話は聞いているだろう？」

「ええ、まあ……」

「ならば省略させてもらおうとしよう。一人一人に自己紹介するなど、大変だからな」

エンマ様は机の上に積まれた、大量の紙の中から、一枚の紙切れを取り出した。

その紙には、信也君の素性や生前の生き様などが、事細かに書かれている。

わたしが持っていた資料は、プロフィールと死に様、あとは日時だけなので、それに比べると、相当な量の情報が、記入されているだろう。

その資料を作るのもまた、中界の人の仕事だった。わたしの仕事ではないけど。

その紙切れの上から下まで目を通し、何度も頷いてみせる。これが出ると大抵、天界行きを指示されるものだ。

「ほう、今どき珍しいほどの好青年だ。文句なしで天界行きだ。よかったな」

「ほらね、言った通りだったでしょ？」

予想通りの結果に、胸を張る。信也君はなにか言いたそうだったけれど、結局なにも言わずじまいだった。

「ほら、天界はこつちよ。早く行きましょ」

信也君の肩を叩き、進む道を指差す。

だけど、信也君はなかなか動かない。考え事をしているのか、あ

「ごに手をやり何やらうめいていた。」

と、何かを閃いたように顔を輝かせ、瞬時に叫んでいた。

「ダメだ、やっぱりこのまま天界になんて行けない！」

「えっ？」

呆気にとられるわたしの前で、信也君は素早く行動に移っていた。

「エンマ様！ お願いがあります！ 山倉を助けてあげてください！」

「わっ、ちよっ、バツ、なっ、何を言ってるのよ！」

信也君の口を塞ぐため、わたしは地面を強く蹴りだした。

だけど、信也君はそれを上手にかわし、土下座を敢行する。

わたしはそのまま勢い余って、エンマ様の机へと頭から突っ込んでいった。

鈍い音と共に、脳に響く痛みが生まれる。

「エンマ様なら一つぐらい、死ぬ定めの人を助ける方法を知っているでしょ！ お願いします！ 僕は地界に落ちてもかまいません！」

山倉を殺さないでください！」

嘆願する信也君をよそに、エンマ様はわたしを凝視していた。

同時に、青白かったエンマ様の体が赤黒く変わっていく。これがエンマ様が怒りに打ち震えている証だった。

「ミリア、これはどういうことだ？」

「えっ、その、ア、アハッ、アハハハハ」

わたしの意志はあっさりと反故にされ、笑いが止まらなかった。

「ミリア、ごめん。僕は山倉が死ぬのを指をくわえて待つてるなんて無理だ。山倉を救うって、約束したんだ」

「アハ、アハハハハ、ハア……」

信也君の宣言で、止まらなかった苦笑いがため息へと変貌を遂げる。

絶望と恐怖が脳内を蝕んでいく。力なくその場にへたり込むのが、やっとだった。

「わたし、死ぬかも……」

自然と出てきたばやきが、これほどまで現実味を帯びているのは初めてだった。

「消滅して、だれにも会えなくなるんだ。カルバドスにも、テラにも、クレアにも」

少しずつ目頭が熱くなり、液体が溢れてくる。

「こんなことなら、真面目に生きとくんだったかな。テラには怒られてばかり、カルバドスには馬鹿にされてばかりでさ」

涙が一粒こぼれると、あとは堰を切ったように流れ続けていく。

「やだよ、やっぱり死にたくない。なんで、なんでわたしが死なないといけないのよ」

顔を上げると、信也君の姿が目に入った。一生懸命に優美ちゃんを救おうと、エンマ様に熱弁を振るっている。

「そうよ、信也君が悪いんじゃない。どうにかして信也君も巻き添えにしてやらなきゃ、わたしの腹の虫が治まらない」

横からじつと信也君を睨みつけながら、巻き添えにする方法を考えてみる。

だけど、何も思いつかなかった。悲しい限りだ。

「そうよね、無理なのよ。信也君を巻き添えにするなんてさ。やっぱり、一人で寂しく消滅するんだ」

10月25日(11)

信也君の話がようやく終わり、エンマ様が結論を述べる。

「なるほど、君の気持ちは十分に伝わった」

「じゃあ！」

「だが、決まっている死は変更できない。ミリアもそう言っていただろう？」

ようやく信也君の視線が、わたしへと向けられる。わたしは憎しみを込めた眼差しで、何度も頷いた。

当然の結果であり、いたずらにわたしの命を危険に晒す行為でしかなかったのだ。

うなだれる信也君を見ても、わたしの怒りは治まらなかった。

これでわたしが死ぬはめになったら、どう責任を取るつもりなのか――。

信也君からエンマ様へと、恐る恐る視線を移す。

だけど、エンマ様はわたしに一瞥をくれるだけで、すぐに信也君へと向き直っていた。

「決まっている死は変更できない。その代わりに、死を回避するチャンスをお前にあげたいと思う。どうかね？」

「エンマ様!？」

わたしは思わず叫んでいた。エンマ様を制止するように。

わなわなと手が振るえ、首が左右に動く。

「そうだな、一週間もあれば十分だろう。今から三日前――十月二十二日まで時間を戻そうではないか。それから山倉優美が死ぬ二十八日までの一週間、君は山倉優美を救うために全力を尽くすというのはどうだ？ もちろんいくつかの条件はあるが、悪い話ではあるまい？」

時を戻すという行為――それは年に一回あるかないか程度で、エンマ様の手により行使される現象だ。

ただ、それは大量の死者が中界に来れずに迷子になったとか、唐突に起こってしまった事変——天界で大量殺戮があったとか——などでしか、使われない。

現界人を救うためのチャンスとして、時を戻すなんて、間違いなく初めてのはずだ。

そもそも時を戻すという行為を、エンマ様自体はあまり好んでやらなかった。

なぜなら、一度終わらせた仕事をもう一度やらなければならないから。

今回の時間戻しは、歴史の改ざんをやらうとする行為に他ならない——エンマ様の真意が、まったく分からなかった。

エンマ様が信也君に、条件を説明していくも、わたしは頭の中の整理で精一杯だった。

ふと、そんなわたしの脳裏に、カルバドスの言葉が浮かぶ。

『どんな事象でも起こってしまうえば現実、そして現実とは紛れもない真実なのだ』

意味不明だったカルバドスの言葉を、ようやく理解できた気がした。

「わかりました。条件は守ります！　そして山倉を救ってみせます！」

話が終わったのか、信也君が声高に宣言する。ようやくエンマ様の体が、元の青白い姿へと戻り、わたしは安堵感に包まれていた。

「よく言った。では特に質問がなければ三日前に君を送るが？」

信也君がちりと、わたしのようすを伺ってくる。

少しでも罰を減らすために、手を組んで信也君へと祈りをささげる。その祈りが通じたのか、信也君はわたしに微笑んでくれた。ただ——。

「特にないです」

エンマ様への返答は、わたしの期待をあっさりと裏切っていた。

「信也君！」

「冗談だよミリア。あの、ミリアが罰を受けることになるんじゃない……」

エンマ様はあごひげに触りながら、ミリアを一瞥した。

「心配せずともよい」

「よ、よかった……」

わたしは心底ホツとしていた。本気で死の恐怖を感じていたからだ。

だけど、エンマ様の言葉が、淡々と続く。

「大した罰ではない」

「えっ、えええ！」

エンマ様からも期待を裏切られ、わたしは絶望のふちに立たされていた。

信也君を指差して、罪をなすりつけようとするも、うまく言葉が出ない。

そうこうするうちに、エンマ様からの怒声が、わたしの頭上へと降り注いだ。

「機密事項を漏洩しているんだ。罰があるのは当然だろう！」

「うつ、うつ……」

そう言われては、返す言葉もなかった。

「では、三日前に君を送り届けよう。一週間必死で頑張るんだぞ」

エンマ様が手をかざすと、信也君の体が光に包まれていった。ぼんやりしている信也君に、わたしは、

「帰ってきたら覚えてなさいよ！」

魂の叫びを放つ。だけど、信也君には聞こえなかったのか、返事もせずにそのまま消えてしまった。

10月22日(1)

十月二十二日 水曜日

「さて、ミリア、お前の罰の話だが」

「は、はい」

振り向きざまに、エンマ様を見上げる。こうなったら覚悟を決めるしかない。

もしも命に関わる罰なら、信也君も巻き添えにしようと企みながら、エンマ様の言説を待つ。

「まず、現界に行つて鷹野信也の手伝いをしてもらう」

「はへっ？」

思わずわたしの口から、普段よりも間の抜けた相槌がもれた。

「す、すみません！」

すぐさま謝ると、エンマ様はわたしに手を向けて制止させる。

怒らせたかとも思ったけど、肌の色が青白いままなので、怒ってはいないようだ。

「すでに時間は戻っているからな。後で鷹野信也のいる場所へと送ろう。死んだという事実を、夢だと思っている可能性もある。相談役として、鷹野信也をサポートしてほしい」

話の内容を、必死に整理させる。その内に疑問が浮かんできた。

「でも、生きている信也君には、わたしの姿は見えないのでは？」

「その点は心配ない。ミリアにも現界で生活してもらうからな」

「それって……」

「中界で生まれたミリアにはふさわしくない言葉ではあるが、ようするに生き返るという意味だ」

「わたしが……生き返る？」

にわかには信じがたい話だった。中界で生まれたわたしが、現界で生活することになるなんて。

確かに中界には、現界人の姿を借りて生き返り、いろいろな調査

をする部署もある。

それが案内人であるわたしに適用される。生まれて初めての経験どころか、中界初の経験者かもしれない。

そこに何が待ち受けているかなんて、想像もつかなかった。

「でも、サポートといわれても、いったい何をしてあげればいいのか……」

「生き返った鷹野信也は、中界での出来事を誰にも話してはならないと言っている。信じる者がいるとは思えないが、何かしら問題が起きかねんからな」

「そりゃあ、そうですね」

「鷹野信也は山倉優美を助けるため、いろんな行動を取るだろう。だが、その行動が本当に正しいのか、間違っているのか、迷う場面もあると思う。そんな時に、相談相手として誰かいた方がいいだろう？　となると、事情を知っているミリアが、一番適任ということになる」

「は、はあ……」

あいまいに返しつつも、わたしのやるべきことは、やっぱり頭の整理だった。

まず生き返る、そして信也君の相談に乗ってあげる。整理すればこんな感じだろうか。

これ以上なにかあれば、本気で脳がショートしかねない気がする。「それに関連してだが、ミリアには一週間の間、鷹野信也と同じ家に住んでもらう」

「で、でも、信也君のお母さんとか……」

「それはこちらでなんとかできる」

自身ありげに、頷くエンマ様が続ける。

「鷹野信也の姉として、美利亚という名前で過ごせるよう、母親に記憶を与えよう。どうかな？」

紙に漢字で書いて、エンマ様が説明してくれる。美しくて利巧で――亜はよく分からないけれど、わたしにピッタリの名前だ。

「それで終わりですか？」

恐る恐る尋ねると、エンマ様は指を一本立ててみせた。

「最後に一つ。ミリアと鷹野信也を送った次の日、つまり十月二十三日だな。その日は、朝から最寄りの駅に行くのだ」

「駅ですか？」

「いろんな男が言い寄ってくるだろうから、その中から自分で判断して、一人の男を選ぶといい。一週間という短い間でも、真剣に、心から好きになれそうな男性をな」

「なんでそんなこと……」

淡々とぼやくと、エンマ様の表情がとたんに険しくなった。

「ミリア……」

「は、はひ！」

緊張が全身へと走り、震えているのが分かる。逆鱗に触れてしまった——そんな予感がした。

だけどエンマ様の姿は変わらず、諭すような口調でわたしに話しかけてきた。

「最近、ミリアの噂をよく聞くのだよ」

「わたしの噂って、もしかして中界一の嘘下手とかいう……」

「なんだそれは？」

「ち、違うならいいです！」

両手を振って、失言を打ち消す。

エンマ様はすぐに『中界一の嘘下手』から興味をなくすと、咳払いを一つして続けた。

「君は死んだ人を迎えに行った際、何をやっても無駄だ、別れを言っても聞こえないなどと、迎えに行った死人に告げるらしいな」

「は、はい」

エンマ様の言うとおりだ。信也君だけでなく、他の死者にもよく言う。そして、同僚には冷たいと非難されるのだ。

「だけど、事実を言っているだけなのだ。悪気なんて一つもない。いいかミリア。愛する人のためなら、人はどんな苦しみにも耐え

られるものだ。それと同時に、愛する人を失えば、どんな苦しみよりもつらいのだよ。最近はそのような感情を持つ人間も、少なくなってきたいるがな」

「はあ、そうですか」

返事は肯定するものの、あまり実感が湧かなかった。

他人を愛するかどうかという感情を、体験したことがない。

「ミリアには、心の痛みがわかるような、そういう仕事ができるようになってほしい。生きた人間として過ごし、恋愛の一つでもすれば、それがわかるはずだ。だから向こうで生活してもらおう。わかったか？」

「はい、一応」

返事は肯定していたものの、心の中では否定的だった。

ようするに、生きている人と同じような恋愛——死んでも離れたくない、無駄とわかっていてもお別れを言いたくなる——を体験できそうな男性を、探せばいいのだろう。

間違はなく、そんな感情はあり得ないだろうけど。

恋愛の一つや二つ体験したところで、きっと考え方は変わらない。事実しか述べていないのだから、変わるはずがないのだ。

「わかりました。信也君のサポートと、恋愛の経験、共に頑張ってください！」

右手で敬礼を作り、エンマ様へと告げる。

なんだかんだと言っても、心はすでに好奇心で一杯だった。罰といつても、本当に罰らしい罰なんて一つもない。

信也君の世界で生活するなんて、罰でなくてもお願いしたいくらいだ。

「質問がなければ時間を戻すが？」

あらためてエンマ様に問われ、少し考えてみる。先ほどからあった胸のわだかまりを、思い切ってエンマ様へとぶつけてみた。

「どうして信也君の願いを、聞いてあげたのですか？ 死んだ人を生き返らせるために時間を戻すなんて、初めてですよ？ それな

のに……」

生唾を飲み込み、エンマ様の回答を待つ。

エンマ様は少し間をおき、顎鬚をなぞりながら語りだした。

「さつきも言ったが、好きな人の為ならどんな苦勞もいとわない……
……といった感情を持つ現界人が、少なくなっている気がするのだ」

よく分からないけれど、エンマ様はそれを由々しき事態と受け止めていたようだ。

「不倫、浮気は当たり前。質の悪いやつらは何人の男、女と同時に付き合っているかを、自慢げに話している。本当の恋愛というものがどんどん薄れているような気がするのだ」

恋愛経験のないわたしは、本当の恋愛などと言われても、いまいちピンと来ない。

ただ、不倫や浮気が悪いことであるのは分かる。それを自慢げに話すなんて、どう考えてもおかしい。

「そんな中で、あの鷹野信也という青年は、死んでなお最愛の女性を想っていた。自分を犠牲にしても、彼女を助けたい。自分はど
うなってもいいからと——彼の言葉には力がこもっていたよ。最近の若者にはないものを、持っている気がする」

「それで、チャンスあげたくなっただんですか？」

「そういうことだ。まあ、他にも理由はあるがな」

鼻息を荒げて笑うエンマ様に、

「他の理由ですか？」

当然のごとく尋ねる。するとエンマ様はとてつもない理由を暴露していた。

「ああ、暇つぶしだよ」

「ひま……」

呆気にとられるわたしをよそに、エンマ様は大声で笑い出した。

建物が震えるように軋み、張り詰めた音が鳴り響く。

「毎日同じような仕事をしていると、普段とは違った事件に憧れる。そこにたまたま鷹野信也が現れた。それだけだ」

「エ、エンマ様って、結構碎けた性格してるんですね」

「それを知らなかったのはミリア、お前だけだ。他の者はみんな知っている」

再び笑い出すエンマ様に、わたしの緊張は完全にほぐれていた。

これからはエンマ様を前にしても、普段通りに振舞えそうだ。

「それではミリア、現界へと送ってやろう」

指を鳴らすエンマ様に、目をつむってひたすらに待つ。

しばらくして目を開けるも、まだエンマ様の部屋の中にいた。

「……エンマ様？」

「今のはミリアの姿を変えただけだ。鏡を見てみるか？」

上から降ってきた手鏡を、うまくつかんで覗き込む。

そこには普段のわたしとは違う、うっとりするぐらい美貌を持った、理想の女性がいた。

肩までの黒髪は、ツヤとハリが今までのわたしとは天と地の差だった。パツチリと開いた大きな瞳は、きらきらと輝いている。

鏡から視線を、自分の体へと移す。赤いハイヒールのおかげで身長はわずかに高い。

そして、ずんどうな本来のわたしとは違うスリーサイズ。出るころは出て、引つ込むところは引つ込む。まさに理想的体型だ。

「それじゃあ、現界に行つて来ます！」

「ああ、すぐに送ろう……っと、一つ忘れていた」

「ま、まだ何かあるんですか？」

脱力感が全身を襲い、思わず背中が丸くなる。そろそろ覚えきれない可能性が出てきていた。

「別に言わなくてもいいぞ、困るのはミリアだからな」

少しこめかみをピクピクさせながら、エンマ様がボソリとつぶやく。

ここでエンマ様を怒らせては、今までの罰を撤回されかねない。

「いえ、なんでもないです。エンマ様の話、とっても聞きたいなあ！」

「わざとらしいやつだな、まったく」

呆れ果てるエンマ様に、全身全霊を込めた営業スマイルを送る。
苦笑をまじえながら、エンマ様は話を再開した。

「困難な事件や突発的な事故から身を守るために、中界の姿——ようするに生者から可視されない姿に戻るようになっておく。鷹野信也の世界で死んでしまつては、なんの意味も成さないからな」

「戻るって、どうやって戻るんですか？」

「スイッチの役目をするキーワードを作っておくのだ。唱えれば、ミリアの姿は見えなくなる」

「もう一度唱えると、現界人にも見えるようになるわけですね？」

「そうだ。キーワードはどうする？ ミリアの好きな言葉でいいぞ」
首を傾げて考えてみるが、覚えやすいキーワードはまったく思い
つかなかった。

仕方なく、最初に思い浮かんだ雑言を伝える。

「カルバドスのおたんこなす……でお願いします」

「そ、それでいいのか？」

「日頃から、言つてやりたかつたんですよ」

現界に行っている間は、カルバドスに会わない。それならばこれ
くらい、平気だろう。

「では、今度こそ現界へ送るぞ。約束はきちんと守るよに」

「はいっ！」

手を上げて返事をする、エンマ様が手をかざす。

わたしの体は信也君を包んだものと同じ、明るい光に飲み込まれて
いった。

気がつくと、わたしは始めている場所にいた。室内ではあるけれど、
もちろんエンマ様の部屋ではない。

ビデオテープがいくつも並んでいるのに、ビデオデッキが一台も
ないという、特殊な空間だった。

人々はビデオテープの箱を手に取り、何やら考えこんでいる。

「つと、それよりも信也君を探さない」と

わたしは室内を見回して、信也君の姿を探した。エンマ様は信也君と同じ場所に送ると言っていたので、この近辺にいるはずだ。

しばらく室内を歩き回っていると、信也君の姿はすぐに見つかった。中界に来た時とは違い、今は学生服を着ているものの、間違いなく信也君本人だ。

すでに室内から出ようとしている信也君に、わたしが近づいていく。

10月22日(2)

「あの……何か？」

信也君はあるうことか、そうほざいたのだ。

中界での出来事を、まくし立てそうになるのを必死で抑える——と、同時に自分の姿が中界とは違うということを思い出していた。

——このチャンスに逃す手はない。

心の底から、残忍な笑みが浮かぶのが自分で分かった。

だけど、わたしは悪くない。なんとか無事に済んだものの、信也君のせいで死んでいた可能性もあるのだ。

わたしは足に力を込めると、渾身の一撃を信也君の脛へとお見舞いしてやった。

「つつ！」

痛みに歪む信也君の顔へと、追い討ちのように怒鳴り散らす。

「ふんっ！　ざまあみなさい！」

これだけで、胸中が晴れていった。

「ひ、人違いじゃないかな？　僕はあなたのこと知らないんだけど……」

動揺を隠せない信也君に、わたしは正体を明かした。このままでは話が前に進まない。

「わたし、ミリア＝ミリスだよ」

「ミ、ミリアだって！？」

「そっ、なんでわかんないかなあ……」

もちろん、分かるはずがないと知っていながら言っただけ。

「いい気分、ああ、すっきりしたあ……」

先ほどまでのわだかまりは、もう跡形もなく消え去っていた。本来なら地界巡礼ツアーにでも連れて行きたいところだけど、これで勘弁してあげよう——そう思えた。

「なんで、なんでここにいるんだよ？」

慌てふためく信也君に、わたしは説明を始める。

「これがエンマ様の言う罰なのよ。現界で一週間の間、信也君のサポートをしながら一緒に暮らすんだって」

「一緒に暮らすって……母さんにはなんていうんだよ」

「えっと、なんでもわたしは信也君のお姉さんになってるらしいよ」
「姉じゃなくて妹の間違いじゃないのか？」

「ちよっと、それどういう意味!？」

わたしの方が幼く見える、もしくはわたしの方が頼りないと言いたそう。

ここはやっぱり、地界巡礼ツアーのプランを立てなくては。

「まっ、いいわ。とりあえず、信也君が死んだのは間違いないから」
エンマ様の言ったとおりに、信也君へと伝えた。それを理解してもらわなければ、何も始まらない。

「それから、わたしはサポートでこの世界に来たから、これから起こる未来や、信也君や優美ちゃんの運命、全部知ってるからなんでも話していいって。中界とか天界の話もね。そんなわけで、これから一週間よろしく!」

右手を差し出すと、

「ありがとう、助かるよ」

お礼を述べつつ、信也君は握手を受けた。

「まっ、いつでも相談してよ。わたしはバカンスだと思って楽しんでおくからさ」

「気楽に考えすぎてないか？」

「気楽に考えてるわよ。信也君が成功しようが失敗しようが、わたしには無関係だもん」

たとえ信也君が優美ちゃんの救出に失敗したとしても、わたしが地界に落ちるわけではない。

そう考えれば、罰というよりも休暇に近いと思えた。

いぶかしげに見つめてくる信也君に、微笑みを浮かべる。

信也君は顔をそむけ、どこかへ向かって歩き出した。

「ちょっと、どこ行くのよ」

「山倉の家さ。可能性は低いかもしれないけど、うまく話せば修学旅行へ行かないよう説得できるかもしれない。いや、しなくちゃいけないんだ！」

「そそつ、その意気よ。わたしが協力するんだから成功間違いなし！ 大船に乗ったつもりでいなさい！」

高笑いを発する。確かにわたしにとっては休暇だけれど、まじめに信也君の相手をしないわけではない。優美ちゃんを救えば、それに越したことはないと考えている。

ビデオテープだけが大量にある、意味不明な部屋を出て、わたし達は優美ちゃんの家へと向かった。

わたしはここぞとばかりに、案内人の仕事中はあまり聞けない、現界にある謎の物体や生物について、信也君へと聞きまくった。

「これはなに？」

「これは電信柱だよ」

「あれは？」

「あれはただの犬じゃないか」

「ああ、あれが犬っていうんだ！ 聞いたことはあったけど、ふわで柔らかさそうで、かわいいねえ！」

本当はもつといろいろ聞いたけど、信也君が早足で進むために、ついていくのが精一杯だった。

そうこうする内に、信也君がとある家の前で歩みを止めた。表札を見ると山倉と書いてある。

「ここが……優美ちゃんの家？」

「ああ……」

中界のエンマ様の扉よりは小さいものの、他の現界の家より、はるかに大きい正門。その奥には、屋敷の姿が垣間見える。

玄関から伺える範囲でも、相当に巨大な家だ。実際の敷地は想像もつかない。

「ここに優美ちゃん、一人で住んでるの？」

「よく分からないよ。なんだか複雑な家庭環境みたいだし」

「そんなことも知らないの？」

「悪かったな」

愛する優美ちゃんでも、知らないことはあるらしい。やはり恋愛なんて、大したものではなさそうだ。

信也君が門の横に付けられた、インターホンへと右手を伸ばす。

その動きを凝視していると、不意にその動きが止まった。

「今から山倉を説得してくるから、ミリアは先に帰ってろ」

「ええ！？ それはないでしょ！」

これではなんのために、信也君についてきたのか分からない。実際に信也君の愛する優美ちゃん見たさに、ついてきたのだから。

「ミリアがいると話がややこしくなるだろ。ミリアの紹介とか関係とか説明が難しいし、なんで一緒に来たのかも分かんないだろ？」

「やだっ、ここにいてわたしも優美ちゃんを見る！」

てこでも引かないつもりで、わたしは反論した。すると信也君は、ため息混じりにわたしの肩に手を乗せて、優美ちゃんの家を見上げた。

「じゃあ、こうしよう。ここにミリアがいてもおかしくない、上手な言い訳を思いつけたらいてもいいよ」

「えっ、えっ？」

「山倉にミリアのことを、説明しないってわけにも行かないだろ？ 僕が納得できる言い訳を考えてくれ」

「い、いいわよ。受けてたとうじゃないの」

わたしは必死に頭を回転させた。

信也君の彼女です——いや、これでは優美ちゃんに誤解を抱かせる。

信也君の姉です。信也君がだらしがなくて心配だからついてきました——これでは信也君が頼りない人間だと思われてしまう。

いっそのこと、信也君の将来のお嫁さんを見に——そんな言い訳で、信也君が納得してくれるはずがない。

「ブー、時間切れだ」

冷たく制限時間終了を告げる信也君は、どこか嬉しそうだった。

「あと一分……いや、三十秒でいいから！」

「ダメだ。先に帰って待っててくれ」

仕方なくわたしは信也君と別れ、来た道を引き返した。

10月22日(3)

だけど、こんなことで諦めるほど、物分りは良くない
最初の曲がり角を曲がったところで、足を止める。

「信也君、まだまだ甘いようね……」

わたしはほくそ笑むと、小さな声でエンマ様と決めたキーワード
を唱えていた。

「カルバドスのおたんこなす……」

エンマ様の話が本当ならば、これで生きている現界人——つまり
信也君には見えなくなるはずだ。

急いで引き返し、信也君の下へと戻る。

信也君は再び、門の横へと指を伸ばしている所だった。

「やつほお！ 信也くん！ わたしはまだいるよお！」

信也君の目の前で、ひらひらと手を振ってみせる。やはりという
か当然というか、信也君からの反応はなかった。

これで準備は万端だ。あとは優美ちゃんが家から出てくるのを待
てばいい。

信也君の指先がインターホンを押したらしく、大きな音が鳴り響
く。

すると、どこからともなく女性の声が聞こえてきた。

「どなたですか？」

「あ、あの、同じクラスの鷹野信也だけど」

門に向かって喋りだす信也君。死んだ影響で頭がおかしくなっ
てしまったのか——。

「……信也君？ ちょっと待ってね」

女性の声が聞こえなくなると、今度は置くの館から女性が駆けて
きた。

「あつ、本当だ」

「まさか、嘘だと思ってたの？」

「いや、なんていうかさ。突然の訪問だったから信也君の名前を語る誰かかって気がしたの。悪気はないから気にしないでね」

親しげに話す女性が、優美ちゃんと分かるのに時間はかからなかった。

ただ、中界で見たDVよりも、数倍美しい女性だった。

長くのびたサラサラの髪と、調和の取れている整った顔立ち。もしも中界に優美ちゃんがいたら、きっとカルバドスが黙っていないだろう。

もしもわたしが男だったら、信也君と優美ちゃんの取り合いをしたかもしれない。そこまで考えるほど、優美ちゃんは可憐だった。もつとも、勝ち目のない勝負になりそうだけだ。

二人は何やら、会話を続けているようだけど、わたしは家に帰ることにした。優美ちゃんの姿に興味があっただけで、信也君の説得には興味がない。

二人の姿に背を向けて、わたしは道を進んでいった。信也君に教わった現界のものをおさらいしながら、歩みを積み重ねていく。

ふと気がつくと、そこはわたしのまったく知らない場所だった。通った覚えも、案内人としてきた覚えもない。

「えっと、信也君の家は……」

考え始めて、ようやく気がつく。わたしは信也君の家の位置を、誰にも聞いていないという事実。

「ど、どうしよう……信也君の家、どこだっけ！」

懸命に資料に書いてあった、信也君の住所を思い出す。

だけど、中界の住所ならまだしも、現界の住所を思い出したところで、分かるはずもなかった。

「仕方ない。中界に戻ってから出直すか」

三度思い直す——と同時に、三度新たな絶望へと遭遇していた。「ど、どうやって中界に帰るのよ！」

案内人の仕事をしている時は、動く階段で現界へと降りて、中界へと戻る。

今回は、エンマ様に現界へと送ってもらった。中界に戻る力なくて、わたしにあるうはずもない。

「ど、どうしよう！ このままじゃ迷子のまま……餓死？」
のたれ死ぬ自分を想像して、かぶりを大きく横に振る。

どうにかして中界へと戻らなければ、わたしに未来はない。

「ど、どうにかして……あつ！」

中界の姿でいたのが、幸いした。遠くを指差し狂喜する。
そこにはぼんやりと、七色に輝く、動く階段の姿があった。

「だ、だれが使ってるのかな……この際だれでもいいや！」

わたしは動く階段へと、全速力で向かっていった。

使っているのが誰であれ、中界に戻った時点で消されてしまう。
そうなる前に、わたしが中界へたどり着かなければ。

「だあああああああ！」

雄たけびを上げながら、速度を緩めず階段を駆け上る。階段の動きも加わり、瞬く間に現界から離れていった。

中界にたどり着き、足を大地に乗せる。ようやくそこで、わたしは一息ついた。

どうやら階段の使用者は、まだ中界には戻ってきていないらしい。
額に浮き出た汗を拭いつつ、別のパソコンへと移る。

だけど、運悪くすべてのパソコンは使用中だった。

「うーん、仕方ない。誰かが戻ってくるのを待つか」

パソコンが並ぶ前で、しばらく時間をつぶす。すると、わたしが上ってきた動く階段から、人の気配が感じられた。

「君の声なら、どこにしようと思えるさ。困った時はすぐに呼んでくれ」

さびついてしまったネジのように、ゆっくりと声に向かって首を回す。そこにいたのはカルバドスと、まだ若い女性だった。

「カルバドス……」

「ん？ 可愛い女性だ。こんなところでなにをやってるんだね？」

齒が浮きそうな口説き文句を並べ、カルバドスが近寄ってきた。

「なに血迷ってんのよ、カルバドス」

「わたしの名前を知っているのかい？」

「当たり前じゃない。なに寝ぼけ……」

言いながら、わたしは鳥肌が立っていた。カルバドスの目は普段と違い、女性をくどく時の真剣さがあつた。

同時に、自分の体を確認する。現界の人には見えない——中界の姿に戻ら思っていたわたしは、自分の姿がエンマ様に変身させられたままだと、ようやく気がついていた。

そして緑色の腕章をつけずに、私服でいるわたし。誰が見ても死んで中界に來た現界人だ。

「まったく、君のような美女をほったらかしにして、案内人はどこへ消えたんだ？」

「いや、そうじゃなくて」

「ついだ。君も一緒に連れて行ってあげよう。なあに、お礼は君の愛情だけで十分さ」

「だから、わたしはミリア……」

「ミリアが担当者か。まったくあの中界一の嘘下手は、仕事ほったらかしてどこに消えたんだ。どうせ拾い食いでもして、お腹を壊したんだろ」

「この、おつちよこちよいの腐れ脳みそ！」

わたしの話をまったく聞かず、一人で納得すると、カルバドスはわたしの手をつかんで引つ張った。

「さっ、行きましょうか。麻奈ちゃん」

「はい……」

一緒に来ていた女性——カルバドス担当の死者だろう——は、頬を赤らめつつ頷いた。

「……こんなのがいいのか、現界人は」

カルバドスには聞こえないよう、ぼやく。

わたしがもし現界で恋をするとしても、カルバドスのようなタイ

プは絶対に嫌だけど。

結局わたしはカルバドスに引きずられ、中界の門をくぐる破目になっちゃった。

「すんませーん、カルバドスです。門を開けてくさーい！」

「カルバドス……いい加減さ、子どもみたいなこと言うのやめなさいよ」

「へいへーい！」

受付の説教も軽くかわし、門を潜り抜けていくカルバドス。

待合室は珍しく人がおらず、中央の赤い柱に、クレアが寄りかかって呆けていた。

「よっ、クレアちゃん。今日も綺麗だね」

「カルバドスさんの話は、信じるなって言われてますんで」

にべもなく言い放つクレアに、カルバドスは半笑いで反論していた。

「だれだ、そんな根も葉もない噂をばらまいている奴は」

「根も葉もない噂だから、ばらまかれてるんじゃないですか？」

軽く返されて、カルバドスが後ずさる。

「おっと、こいつは手厳しい。でも確かに、ミリアが『中界一の嘘下手』だって噂を流した時も、瞬時に広がっていったからなあ。説得力はある」

「噂を流したの、アンタだったわけね……」

内から奮い起こる怒りで、全身が強張っていった。

そんなわたしの変貌にも、カルバドスは気がつかない。

「んじゃ、エンマ様に謁見しますねー。今度一緒にデートしようよ」

「やめときます。カルバドスさんの他の彼女に恨まれたくないですから」

「やだなあ。本気なのはクレアちゃんだけなのに」

「そうだったのね！？ ひどいじゃない！」

最後の言葉はもちろんわたしではない。今日のカルバドスの担当で、一生懸命口説いていた麻奈ちゃんだ。

「いや、これはね、麻奈ちゃん」

「知らない！」

弁解する余地もなく、麻奈ちゃんはそっぽを向いてしまった。

気まずい雰囲気の中、落胆しながらカルバドスが先頭で、エンマ様の部屋へと入っていく。わたしたちはそれに続いた。

「カルバドス入ります……糸井麻奈とミリア担当の女性を連れてきました」

「ミリア担当の女性？」

当然のごとくエンマ様からは、疑問まじりの返答が聞こえてきた。ぎよろつとしたエンマ様の眼球が、わたしの姿を見下ろしてくる。とりあえず、軽く会釈しながら、苦笑いを返すしかない。

「何をしているのだ？ ミリア」

「まったくです。こんなかわいい女性をほったらかして。当分の間、減給処分にした方がいいですよ。ついでに減った給料を、おれの給料に上乘せ……いてっ！」

エンマ様の問いに答えようとしたわたしを無視し、さらには好き勝手をのべるカルバドス。わたしはその足を、思い切りかかとで踏んづけてやった。

足を持つてぴょんぴょんと飛び跳ねる。

涙目になっているカルバドスを、麻奈ちゃんが指をさして笑いとばしていた。つられてわたしも笑みこぼれる。

「で、どうしたのだ、ミリア」

「あ、すいません。つい面白くて」

「まあ、否定はせんがな」

よくみると、エンマ様もうつすらと微笑んでいた。

「実は迷子になってしまいました」

「そうなんですよ。ミリアがほったらかすから、こんなに美しい女性……いてえ！」

もう一度、今度はカルバドスのでん部めがけて、背後からおもいきり蹴り飛ばした。

油断していたカルバドスが、前へつんのめると、頭からエンマ様の机へと激突する。

再び巻き起こる爆笑の渦。麻奈ちゃんは抱腹しながら涙を流し、さすがのエンマ様も大きな口を開けて、存分に笑っていた。

「なんだってんだ、今日は厄日か？」

へたり込んだカルバドスが、肩で大きく息を吐く。

わたしはカルバドスの前まで移動すると、腰に両手を当てて見下ろした。

「人の噂を勝手に流すからよ、カルバドス」

「へっ？」

「勝手に人の給料を減らして、自分の給料を増やそうとするからよ」

「エ、エンマ様、これは？」

ようやく事態を把握して、カルバドスが真偽を確かめようとエンマ様を見上げる。

「まあ、そういうことだ」

エンマ様が肯定すると、震えた手でわたしを指差してきた。

「お前、ミリアなのか！」

「そういうこと」

腕を大きく振り回しながら、カルバドスの次の言葉を待つ。

カルバドスは頭を両手で抱え、首を振り乱しながら答えた。

「ミ、ミリアをナンパするなんて、人生最大の汚点を作ってしまった！」

「言いたいことはそれだけかぁ！」

わたしの放った渾身のストレートは、カルバドスの腹をを的確に捉えていた。

「ぐえっ！」

一瞬だけうめき声を上げると、そのままカルバドスは尻餅をつきのびてしまった。

「で、お前はどうしてここにいる？」

ひと段落着いたところを見計らって、エンマ様が再びわたしに質

問してくる。

事情を一通り説明すると、エンマ様はすぐに納得してくれた。

「次からはわたしの名前を大きな声で呼べ。そうすれば中界へと引き戻してやる」

「分かりました！ それじゃあ、すぐに現界へと戻ります！」

敬礼してから、その場を立ち去ろうとするわたしを、エンマ様が呼び止める。

「待て、ミリア」

「はい？」

「彼女をどうするつもりだ？」

エンマ様の視線の先には、のびてしまったカルバドスと、我に返っておろおろとする麻奈ちゃんの姿があった。

「カルバドスを気絶させたのはお前だ。ついでに案内してこい」

「そんな！？ 悪いのはカルバドスで、わたしじゃ……」

「彼女は天界行きだな。鷹野信也に負けず劣らず、良い人生を歩んでいる」

わたしの訴えを無視し、エンマ様が判決を下す。

しかたなく、わたしは麻奈ちゃんを連れてエンマ様の部屋を出た。すれ違い際にカルバドスを軽く蹴飛ばして――。

10月22日(4)

麻奈ちゃんを天界に送った後、わたしはようやく信也君の家へと降り立った。

辺りはすでに暗くなっており、家の中から光があふれてくる。ちょうどその頃、信也君がこちらへと走って帰ってきた。

「やつほお！ 信也君！」

手を振るもまったく気づかず、信也君はわたしの前を素通りしてしまった。

「あ、そつか。カルバドスのおたんこなす」

つぶやいてから、家の中へと入ろうとしている信也君に、再度声をかける。

「待って、信也君」

体を震わせつつ、信也君は振り返った。

「なんだ、まだ帰ってなかったのか？」

「うん、いろいろあってね、信也君を待ってたんだよ」

「僕を？」

「自分の家になってるっていつても、ちょっと不安だからさ。信也君と一緒になら、さすがに追い返したりはしないでしょ」

迷子になっていたなんて、口が裂けても言えない。中界からこっちに来るまでに、必死で考えた言い訳だった。

「そりゃそうだけど。こんな時間に見知らぬ女の子を連れ込んだら、それはそれでボコボコにされそうだなあ……」

わたしの嘘は、どうやらバレずに済んだようだ。これで中界一の嘘下手という汚名も返上できる。

「ただいま」

「た、ただいま」

信也君の背後から、こっそりと家の中を覗き込む。

板張りの廊下が、まっすぐと伸びていて、その横に二階へと上が

る階段があつた。左右にはそれぞれ部屋がありそんなものの、どんな部屋かまでは伺えない。

「おう、帰ったか。遅かったな？」

左の扉から出てきたのは、霊安室に後から来た女性だった。

短い黒髪と言葉遣いだけなら、男性と間違えそうな風貌だ。

お母さんは娘として、わたしを認識しているのか——不安を胸に抱いてしまい、堂々と姿を現せないでいると、

「なんだ、美利亞も一緒だったのか。お前もいいかげんブラブラしてないで、母さんに楽させてくれよ」

お母さんから、声をかけてきた。どうやら現界のわたしは、働きもせずに毎日歩いてばかりいる、親不孝者らしい。

それでもお母さんの発言は、わたしの存在を肯定するもの。遠慮なく信也君の背後から姿を現し、満面の笑顔を送る。

だけど、笑みの送り先はすでに、元の部屋へと引き返していなくなっていた。

「よかったな、ミリア」

「ま、まあわたしはエンマ様の言うことを信頼してたけどね」

笑い飛ばしてみせると、信也君は何か言いたげに口を開いた。だけど、そのまま何も言わずに閉じる。

「ねえ信也君、家の中を案内してよ」

提案すると、信也君はなにやら心配そうな面持ちでこちらを見ていた。

「その前に一つ、家の中では僕のことを信也と呼び捨てにしてくれ。僕もミリアを姉さんと呼ぶから。弟を君付けで呼ぶ姉はあまりないだろうし」

「わかったよ、信也」

ふざけ半分で返事をするも、信也君は納得したのか、靴を脱いで家の中へと入った。

「じゃあ、ついてきてよ」

信也君の後ろから、廊下を進んでいく。

まずはお風呂とトイレを説明される。

お風呂はそれほど大きくなかったけれど、中界のわたしの家のよりふた周りは大きかった。ゆったりと入れて、気持ちよさそう。

トイレもきちんと清掃されていて、清潔感にあふれている。わたしも少し、見習わなければ。

その後、玄関横の二部屋を素通りし、信也君は二階へと上がった。廊下はすぐに行き止まりになった。左右にそれぞれ扉が一つずつある。

信也君はまず、右の扉を覗き込んだ。だけど、わたしを招き入れるわけでもなく、案内するわけでもなかった。

ただ単に覗いて、確認をしているといった感じ。その上どこか、落ち着きがなかった。

なんだかこつちが、不安になってくる。

「どうかしたの、信也。キョロキョロして」

我慢できずに尋ねると、信也君はあごにてをやりながら、首を傾げていた。

「いや、姉さんはどこで寝るのかわって。もしかして廊下かな？」

「なんでそうなるのよ！　ここが信也の部屋なら、反対じゃないの？」

「いや、そっちは物置……」

信也君の返答も聞かず、向かいの扉を開ける。

そこには、見慣れた風景があった。

ベッドと必要な電化製品以外にはなににもない、シンプルな構成。

わたしは毎日、この光景を目の当たりにしている。

「どうしたんだよ？」

「わ、わたしの部屋……」

「はっ？」

理解できていない信也君は、間の抜けた声を発していた。

「わ、わたしの部屋……わたしの部屋！」

わたしは無意識のうちに、部屋の中へと踏み込んでいた。床から

伝わる感触も、踏み慣れたものだ。

「わたしの部屋だよ！」

振り返って絶叫すると、信也君が耳を塞ぎながら答える。

「そんなに何度も言わなくなたっていいよ。廊下で寝ずに済んでよかったじゃないか」

「違う、わたしの部屋なの！ わたしが中界で使ってる部屋！」

「へっ？」

「わたしが中界で暮らしてる部屋が、そっくりそのままここにあるの！」

そう、中界でわたしが毎日帰宅する、わたしの自宅がそのままそこにあった。

さすがにトイレや風呂まではついてなかったけれど、この構成、ベッドのさわり心地、色あせた壁紙、どれをとってもわたしの部屋に間違いなかった。

信也君はわたしの驚きとは正反対に、落ち着いたようだった。

「住み慣れた環境でいいじゃないか」

「そ、それは、そうだけどさ」

「それよりも、物置にあった荷物、後で返してくれるよう、ちゃんとエンマ様に伝えておいてよ」

まったく意に介さず、偉そうに述べる。

「なによ、自分だって死ぬんだから、自分で伝えればいいじゃない。大体、本当に中界に荷物があるかなんて、知らないっての……」

信也君には聞こえないよう、顔をそらせてからぼやく。

「信也、美利亚！ ご飯ができたぞ！」

一階からお母さんの声が聞こえてくる。信也君はわたしを引っ張り、一階へと降りた。

10月22日(5)

先ほどお母さんが引つ込んだ部屋に入る。台所とテーブルが一部屋にあるという、変わった構造だった。

テーブルにはお母さんが作ったであろう、料理が均等に並んでいた。その臭いに、わたしは思わず顔をしかめた。

「今日はミリアの好物だからな。しっかり食べて母さんに楽しさせてくれよ」

ご飯をよそいながら、お母さんが微笑んでくる。わたしはなんとか平静を装いながら、笑みを返した。

「それにしても姉さんの好物が、おでんだったとはね」
何も知らない信也君が、平然と言つてのける。

思わず飛び出しそうになるパンチを必死に抑えて、わたしは椅子に座った。目の前に並ぶおでんを凝視しながら――。

「どうかした？ 早く食べなよ」

「どうしておでんなのよ……」

「姉さんの好物なんでしょ？」

ついにわたしは我慢できずに、信也君の胸倉をつかんでいた。

「な、どうしたんだよミリ……姉さん」

「おでんが好きなんていつ言つたのよ……」

「いや、それは……もしかして？」

わたしの顔を伺いながら、尋ねてくる。

「おでん、大嫌いな……」

真相を述べると、信也君が固まった。

初めて食べたのは、カルバドスに連れて行かれたおでん屋だった。大根を口に入れた瞬間、吐き出しそうになるのを必死に堪える。

ほとんど味がない――それがわたしの感想だった。

しかもその後、カルバドスに無理やりいろんな種類の具材を口に入れられた。味もなく熱いだけのおでんに意識が遠のき、その場で

卒倒した——懐かしくも、苦い思い出。

「じゃあ、なんで母さんはおでんを姉さんの好物だなんて言ったんだろ」

「知らないわよそんなの……あっ！」

信也君から手を離し、祈るように組み合わせる。そのまま天井を見上げると、エンマ様のせせら笑いが聞こえてきた気がした。

「……エンマ様の仕業だ」

「エンマ様が？　なんでそんな手の込んだことを……」

「いつも言ってるのよ、好き嫌いがあるようじゃ立派な案内人にはなれないって」

「どういう理屈なんだ、それは」

わたしは目の前の大根、白滝、牛筋など順番につつついた。

「大根嫌い、白滝いやだ、牛すじ気持ち悪いよ……」

あふれてきそうな涙を、グツと堪える。ある意味これが、本当の罰なのかもしれない。

「なんだ、行儀が悪いな。そんなに待ちきれないなら先に食べててもいいぞ」

お母さんに勧められて、わたしの箸が止まる。このままでは、わたしは本気で失神しかねない。

「んじゃ、先に食べとくね。いただきます」

何を思ったのか、信也君が率先しておでんを食べだした。これではわたしが食べないのが、不自然になってしまう。

信也君の行動は、新手の嫌がらせとしか思えなかった。

「い、いただきます」

「おう。おでんのおかわりたっぷりあるからな。しっかり食べるよ！」

最初は味噌汁から——と思っていたわたしに、聞こえてきた悪魔の言葉。口から味噌汁が噴出する。

わたしは覚悟を決めると、箸を強く握り締めた。ここからが、わたしの腕の見せ所だ。

わたしは二人の目を盗んで、おでんを信也君の皿へと移していった。

わたしの素早さを駆使すればこの程度、バレずにやるのは造作もない。

「ご、ごちそうさま！」

白飯と味噌汁だけを堪能し、わたしは勢いよく立ち上がった。

「なんだ美利亜、もういないのか？」

疑惑の表情で、お母さんがわたしを見つめてくる。

騙すのは忍びなかったけれど、誰しも苦手なものはある。

「う、うん、もうおなか一杯！」

「いつもだったら鍋一杯に作っても、一晩でたいらげるじゃないか。どっか具合でも悪いのか？」

「鍋一杯のおでん……」

今しがた食べたものが、逆流してくる恐怖に捕らわれ、わたしは足元をふらつかせる。

——もう耐えられない。

わたしは部屋から飛び出すと、自分の部屋のベッドにもぐりこんだ。寝心地のいいふわふわのベッドが、次第に心を落ち着かせてくれた。

しばらくすると、部屋をノックする音が聞こえてきた。

「どうぞ……」

必死にひりだした声に反応して、入ってきたのは信也君だった。

「信也君……」

「ほら、また君付けする」

「そんなことより、なにか食べ物。おでんの臭いを忘れられるような、美味しくていい香りの食べ物を、ちょうだいよう」

信也君はお腹を押さえながら、

「おかげで僕はおなかが破裂しそうなくらい満腹だけどね」

と苦しそうだ。どうやらわたしが移したおでんに気がつかず、残さず食べてしまったらしい。

「そんなことよりも……」

「そんなこと！？ 信也君にとってわたしの空腹よりも大事なことがあるっての！？」

「ある」

そうはつきり言われては、わたしも返す言葉がなかった。

「じゃあ、その用事が済んだらなにか食べ物持ってきてよ」

交換条件を出すと、信也君はいとも簡単に頷いていた。

「分かってるさ。確かリンゴがあったから、剥いて持ってきてやるよ」

「リンゴ……じゅる」

口の中に広がる甘酸っぱい味覚を想像し、わたしはよだれを垂らしそうになった。

慌ててよだれをぬぐう。ちらっと信也君のようすを伺うも、バレてはいないようだ。

おでんの件といい、信也君は鈍感なのかもしれない。

「それで、わたしになんの用？」

わたしは信也君の相談を、真剣に聞いてあげた。すべては後にながるリンゴのため。

どうやら信也君は明日、優美ちゃんの骨折を防ぐために頑張るらしい。骨折のために逃げ遅れたのなら、骨折を防げばいいと判断したみたいだ。

信也君の相談が終わり、リンゴを受け取ると、わたしは口いっぱいに頬張った。おでんの嫌な臭いが、どんどん薄れていくのが分かる。

ようやく人心地ついたわたしは、お風呂に入って寝ることにした。明日はエンマ様に言われた通り、駅前まで出向かなければ。

この一週間、信也君とわたしは、無事に任務を果たせるのか——そんなことを考えながら、わたしは深い眠りについた。

10月23日(1)

十月二十三日 木曜日

「ふあああ、今何時だろ」

誰に起こされるわけでもなく、自然に目覚めるまでわたしは眠り続けていた。

部屋に置いてある、カルバドスからもらった目覚まし時計に目を向けると、十一時三十五分だった。

「なっ！ ち、遅刻！」

慌ててベッドから飛び起きる。普段なら三十分程度の遅刻なのに、すでに三時間半も過ぎている。このままでは本気でテラに説教されかねない。

白いローブに着替えて腕章をつけると、わたしは部屋の扉を全開にした。

寝ばけ眼のわたしの前に広がる、見慣れない光景。

「な、なんだ、その格好。いまはそんな服が流行りなのか？」

声が聞こえた方向に反応すると、信也君のお母さんが、わたしの格好を信じられないといった顔で、観察している。

そこでようやく、わたしは事態を飲み込んでいた。わたしは信也君の家で、信也君の姉を演じているということ。

「えっ？ あっ、あはははは……」

ごまかし笑いを放ちながら、わたしは背中から部屋の中へと引っ込んだ。扉を閉めると同時に、心の底からの嘆息が溢れ出る。

改めて私服へと着替えて、わたしは階段を降りていった。中界では流行最前線の服装ではあるけれど、現界ではどうなのかという不安に捕らわれながら。

昨日食事をした部屋にいくと、お母さんが食器を洗っていた。わたしの格好を確認してから、大きく頷く。

「ああ、その格好ならまだましだな」

まだましということとは、そんなによくもないのだろうか。わたし自身、ファッションにうとくはないけれど、決して詳しくもない。「さてと、エンマ様に言われたとおり、駅に行きましょうかね」

正直に言うと、何が起こるか分からない不安ではある。だけど逆に、それが楽しみでもあった。

「またどっか行くのか？ いい加減どこかに身を置いて、わたしを養ってくれよ」

出かけようと玄関に手をかけると、手を拭きながら、お母さんが声をかけてきた。

「あ、うん。ちょっと駅までね」

「遅くなるなよ。ただでさえお前は、ほっつき歩いていい年齢じゃないからな」

「はい！」

適当に返事だけして、わたしは家を飛び出した。駅への大体の道のりは、中界から信也君の家に降りてくる途中に確認している。

駅に着くとエンマ様の言ったとおり、駅前でボーっと空を眺めているだけで、いろんな男の人に声をかけられた。

確にかっこいいというか、端麗な人は多かった。中界ではカルバドスが人並みにかっこいいのかもしれないが、まるつきし相手にならない。

ただ、何かが違った。雰囲気だけで、何が違うのかまでは、わからなかったけれど。

四時間ほど駅前に立ち続け、十九人の男性の誘いを断った。思わずため息が洩れる。

「エンマ様は言ってなかったけど、気に入った人がいなかったらどうするんだろ？」

エンマ様を呼んで中界へ帰るという手もあるけれど、あまり乗り気はしなかった。

もしも誰でもいいから付き合えなんて言われても、わたしには無理な気がする。

「とりあえず、明日また来ればいいかな？」

駅から離れて、家へと向かって歩き出す。

だけど、このままでは自分の理想の人になんて、出会えそうになかった。

「結局わたしには、現界人の恋愛なんて無理なのかなあ」

嘆きつつ、足早で家へと向かう。ふと、お母さんの注意を思い出したのだ。

帰路の途中、子どもが遊ぶ公園を通り過ぎると、悲鳴に似た声が聞こえてきた。

「ぎゃあうう！」

「な、なんだろ、今の声……」

園内の木に体を隠しながら、恐る恐る覗きみる。

すると学生服を着た男の子三人——信也君と同じぐらいの年齢だろう——が、これまた同じぐらいの年齢の男の子一人を、集団で虐待しているようだった。

一人が男の子を羽交い絞めにして、残りの二人が容赦なく殴りつける。

「や、やめて……ぐあう！」

先ほどの悲鳴は、虐められてる男の子の声だったらしい。それでも残りの三人は、手を休めようとしなかった。

「言ったよな？ 今日までに三万円用意しとけて」

「もうお金はないよ。貯金も全部君たちにあげちゃったんだから……」

……

「だったら親に言って、小遣いもらえばいいだろうが！」

「ぎゃいいい！」

またも苦痛を感じさせる、壮絶な悲鳴。

わたしは我慢の限界だった。木の陰から姿を現すと、三人に向かって金切り声を上げていた。

「ちよつと、いい加減にしなさいよ！」

「ん？ なんだあんた」

「お前、知り合いか？」

「いや、でも可愛いじゃん」

いやらしい目つきでわたしを、舐めるように視姦してくる。殴られていた男の子はぐったりとしていて、羽交い絞めが終わるとその場に崩れ落ちた。

「最低ね。こんな奴ら、絶対に許せない」

小声でつぶやいたものの、わたしは少し焦っていた。はっきり言っ
て力比べになれば勝機はない。

「あんた、聡史の知り合いか？」

「聡史？」

「こいつだよ、こいつ！ まったく役に立たないクズさ」

足元に転がっていた男の子——彼が聡史君だろう——を足蹴にし
て、高々と笑う三人。

わたしの奥歯が、ギリギリと音をたてる。

「その子を放しなさい」

「なんで？ あんた聡史の知り合いじゃないっぽいけど？」

「だったら関係ないじゃん。回れ右して帰ったほうがいいんじゃない？ 怪我しないうちにさ」

我慢の限界だった。だけど真っ向から戦って、勝てる見込みはない。
い。

「カルバドスのおたんこなす」

小声でつぶやく。すると、目の前の三人の顔色が、瞬く間に青く
なっていた。

「な、なんだ、どこに消えた？」

「もしかして、幽霊とか……」

「幽霊って夜中に出るんだろ？ まだ明るいの……」

動揺し、ひそひそと語り合う三人を、真横で見下ろす。本当はこ
のまま蹴り飛ばしてやりたいけど、中界の体では現界人に触れられ
ない。

「けっ、聡史。明日はちゃんと金を持ってこいよ！」

気味悪がった三人は捨て台詞を残して、足早に公園を去っていった。

「カルバドスのおたんこなす」

三人の姿が消えたのを確認してから、現界の姿へと戻る。

すぐさま倒れた男の子——聡史君のようすを確認する。まだ意識は戻っておらず、消え入るようなうめき声を発していた。

わたしは公園の水道でハンカチを濡らし、傷口を拭いてあげた。

傷が一通り綺麗になった頃、ようやく聡史君はまぶたを重そうにあげた。

10月23日(2)

「大丈夫？」

「あ、あなたは……」

頬を染めながら、聡史君が尋ねてきた。

「えっと、わたしは……美利亞だよ」

一瞬、ミリア＝ミスと自己紹介しようとして、息が詰まる。職業病というか癖というか、危ないところだった。

「美利亞さん？ 苗字は？」

「えっと、鷹野……そう、鷹野よ」

「鷹野美利亞さんですか……」

聡史君はわたしの腕の中から、おもむろに起き上がった。どこかに痛みが響いたのか、苦痛で顔をゆがませる。

「僕は、その、竹下聡史です。あの、助けてくれたんですよね？」

「あ、うん、まあ……大したことはしてないけどね」

消えた瞬間を見られてないのは、幸いだった。種も仕掛けもないけれど、説明には苦労しそうだから。

「ありがとうございます……」

「いえいえ、どういたしまして。傷口は拭いておいたけど、帰ったらしちゃんと消毒しておいたほうがいいよ？」

「はい。何から何まですみません」

礼儀正しい子だな——それが聡史君の印象だった。こんないい子を虐めるなんて、納得がいかない。

「あのさ、よかったら、お姉さんに話してみない？」

「……なにをですか？」

警戒心を露にする聡史君。わたしは両手を振って、無抵抗を示していた。

「あの子達にお金を請求されて、虐められてるんでしょ？ 相談に乗ってあげようか？」

「でも……」

「誰にも言わないし、一人で悩むよりはずっと楽になれると思うけど?」

上目づかいでわたしの顔色をうかがいながら、聡史君はぼそぼそと話し始めた。

「お金を……あいつらにせがまれるんです」

「そういえば、三万円がどうのこうの言ってたわね」

中界でのお金の単位はペソミだけれど、さすがに現界のお金の単位は知っている。

ただ、それがペソミに換算した時、どのくらいの価値になるのかは分からなかった。

「お金を持ってこないと殴られちゃう。だけど、もうあいつらに払うお金なんてない。これから先、ずっと殴られちゃうんだ……」

しおれていく花のように、ぐったりと力が抜けていく。

わたしは少し考えてから、聡史君へと尋ねてみた。

「殴られるの、嫌なの?」

「あ、当たり前じゃないか!」

顔を真っ赤にして、聡史君が憤慨する。このリアクションを、わたしは望んでいた。

「そうだよ。わたしだって殴られるのは嫌だ。じゃあ、どうして黙って殴られるの?」

「そ、それは、逆らうと後でなにをされるかわかんないから」

恐怖に顔をゆがめる。よほど今までひどい目に合わされたらしい。

「聡史君、あいつらに一泡吹かせるためにはどうすればいいと思う?」

「わ、わからないよそんなの。どうすればいいかなんて」

うつむいて、聡史君が視線をそらす。

わたしは人差し指を立て、それを二、三度横に振った。

「教えてあげるわ。あいつらと戦うのよ。怖がらずに、ね?」

「戦うって、喧嘩するってこと!?! そんなの無理だよ。余計に殴

られちゃう！」

「確かに負けるかもしれない。殴られれば痛いと思う。でも、このままじゃなにも変わらない。聡史君が動かなきゃ、なにも進展しないんだよ？」

「だ、だからって！」

聡史君は立ち上がると、公園から出て行こうとした。わたしからも、戦うことから逃げるように――。

「聡史君、逃げちゃだめ！」

動きが止まる。わたしはさらに続けた。

「現実を見ようよ！ あいつらに虐められてる日常から逃げ出すために、戦わなきゃ！」

「だけど！ あいつらに敵うはずなんてないだろ！ 向こうは三人で、こっちは一人なんだぞ！ 人の気も知らないで！」

「確かに分らない。聡史君の気持ちも分からないよ。だけど一つだけ言える。逃げたって何も変わらない。自分の身に起きている現実を見据えなきゃダメだよ！」

――今のままじゃ、死んだ人達と変わらないよ――わたしはそう続けようとして、慌てて口をつぐんだ。死んだ人々も自分が死んだという事態を認めず、すぐに現実から逃げようとする。

そして聞こえないお別れの挨拶をしたい――などのたうつのだ。

「あいつらの言いなりになって、お金を渡して、渡さなきゃ殴られる。聡史君は何もして

いないのに。そんな生活を続けて楽しい？」

「楽しくないよ」

「でしょうね。早くそんな生活、終わりにしたいでしょ？」

「う、うん」

「だったら終わりにする努力をしなきゃ！」

「でも、どうすればいいの？」

逆に聡史君が聞き返してきた。顔中に不安を溢れさせ、眉毛がハ

の字になっっている。

「だから戦うの。勝てなくてもいい。でも、もうお金を払っちゃだめ。殴られたら殴り返す。どんな時でも絶対に反抗するの」

「でも、反抗なんてしたら、今まで以上に殴られちゃうよ」

「そうしなくても殴られるんでしょ？　だったらいいじゃない。痛い目に合うつらさを、相手にも味あわせてやればいいのよ。そうすれば少しはわかるんじゃない？　殴られた痛みや苦しみがさ」

「そうかな？」

「そうよ。それに、集団でないと行動できないなんて、臆病なやつらばかりなのよ」

「確かにそうなのかも……うん、わかった。やってみるよ！」

最後の一押しに納得してくれた聡史君は、勇気を振り絞って決心した。

「よし！　それでこそ男の子だ！　お姉さんも応援するから、頑張ってね！」

「ありがとう美利亞さん。頑張ってみるよ」

「さんはつけなくていいよ。美利亞でいい」

「じゃあ美利亞！　僕もう負けないから！　絶対にあいつらに一泡吹かせてやる！」

聡史君の瞳に、もう迷いはなかった。ぐぐもった瞳が嘘のようにいまは煌々と輝いている。

「それじゃあ美利亞！　僕はもうそろそろ帰るよ！」

「分かった。あいつらをこてんぱんにしてやりなさい！」

「うん！　うまくいったらまたここに会いに来るよ！」

満面の笑顔で手を振りつつ、聡史君は公園から去っていった。きつとうまくいく、うまくいってほしい、わたしは心からそう願っていた。

「さてと、わたしもそろそろ帰らなきゃ」

辺りはもう暗くなってしまうている。わたしは早足で信也君の家

へと向かった。

エンマ様が望むような、運命的な出会いはなかったけど、わたしの心は晴れ晴れとしていた。

10月23日(3)

だけど、その晴れ渡った心も、すぐに雨模様へと変化した。

「ただいまあ！」

玄関の扉を開けると、まだ靴も脱がずに立っている学生服の信也君、そしてこめかみに青筋を浮かべているお母さんの姿があった。

「美利亜！ こんな時間までどこほつつき歩いてたんだ！」

「えっ？ 信也もいま帰ったんじゃない……」

「信也は学校に行ってたんだ！ いつまでもぶらぶらしてるお前とは違うんだよ！ 罰として明日は外出禁止！」

「えっ、えええ！？」

お母さんの宣告が、わたしを容赦なく谷底へと突き落とす。

お母さんが何やらわめき続けているけど、そんなものは耳に入らなかった。これで明日は駅前へと出かけられない。

それはつまり、わたしが現界の人と恋をする可能性も、減ってしまふという意味だ。

「いいか、もう何度も言わせるな。早く家に帰れ！ 働いてわたしに楽をさせる！ わたしの言うことを素直に聞け！」

ようやく耳に戻ってきたお母さんの声に、

「何度もって、言われたことないのに……」

小声で反論する。だけど、

「なんか言ったか！？」

鬼の形相でにらみつけたお母さんに、わたしは必死でかぶりを振った。地界の鬼でも、お母さんには敵わないかもしれない——そんな思いが頭をよぎる。

「とにかく、今日はもう夕飯を作る気分じゃない」

「あちゃ……」

横で信也君が頭を抱えるも、

「信也、なんか言ったか！」

素早く反応したお母さんに、全身を使って頭を振った。

信也君の持っていた鞆が、わたしのわき腹に直撃しているのめ気がつかずに。

「カップラーメンでも食べとけ！　ちゃんと片付けしろよ！」

お母さんは荒々しく鼻息を鳴らし、玄関すぐ右の部屋へと引っ込んでしまった。

勢いよく閉められたふすまが、甲高い衝撃音を屋内にこだまさせる。

「信也君のお母さん、すごいねえ……」

ようやく解放され、強張った全身から力を抜く。

だけど、信也君は納得していないようだ。

「まったく、こっちはいい迷惑だよ。ミリアのせいで夕飯がカップラーメンになっちゃったじゃないか」

「わ、わたしのせいなの？」

「機嫌が悪くなると、母さんはご飯を作らないんだ。そんな時は、決まってカップラーメンなんだぞ」

「カップラーメンって……なに？」

まるで信じられない、奇跡の証でも見つけたように、信也君はわたしから一歩離れた。

どうやらカップラーメンとは、中界にはなくとも、現界では誰もが知っている食べ物らしい。

「まったく、食べさせてやるよ」

呆れつつ信也君は、食事をする部屋へと入り、わたしを椅子へ座らせた。

よくわからない蓋のついた容器の中に、固まってしまった麺が入っている。ラーメンならば　知っているけれど、こんなに硬くないはずだ。

信也君は何も言わずに、お湯を入れて蓋をした。

三分ほど経過してから、信也君がわたしに蓋を開けさせる。

「わぶっ！」

蓋を開けた瞬間、中から湧き出てきた湯気がわたしの顔面を襲ってきた。

必死で湯気を払い、再び容器の中を覗き込む。すると先ほどまでカチカチだった麺が、ちょうどよい柔らかさへと変化していた。

試しに一口、食べてみる。少し味が濃い気もするけど、わたし好みの麺の固さ、具の味付けだった。

「美味しいじゃない！ しかもお湯入るだけでいいなんて。仕事に疲れた夜にはピッタリね」

中界でも作られればいいのに――本気で考えてしまった。

だけど、今まで誰もが作っていないのならば、本当に必要としている人がいないのかもしれない。天界はもちろん、中界で仕事をしている人も元現界人が多いのだから、この味には飽きている可能性もある。

食事を終えると、わたし達は片づけを済ませて、素早く二階へと上がった。お母さんにバレないよう、足音を忍ばせながら。

信也君の部屋へと入ると、今日も信也君の相談に乗ってあげた。

優美ちゃんの骨折は防げたものの、どうやら違う悩みが浮上したらしい。それもわたしにかかれば、あつという間に解決だった。

信也君と別れ、今日も一日が終わる。明日は外出禁止という名目が打たれ、わたしは家で無駄な一日を過ごすしかない。

「このままじゃ、あつという間に一週間なんて、過ぎちゃうだろうなあ」

そんな想いを胸に、わたしは布団の中へともぐりこんだ。

10月24日 α (1)

十月二十四日 金曜日

自然に目を覚ますと、すでに十二時を回っていた。さすがに今日は、慌てて着替えたりはしなかった。

外出禁止のわたしは、当然家から出られない——とっていると、どうやらお母さんは仕事に出かけたらしく、家には誰もいない。

「なんだ、でかけたって大丈夫じゃない」

昨日に続いて駅前に行こうと、玄関に移動する。

靴を履き替えようとするわたしの視界に、大きな張り紙が入ってくる。玄関の扉に張られたものだ。

『外出したらわかるからな。家でおとなしくしてろ！ もし家から一歩でも出たら一生飯抜きだからな！ 母より』

赤色の極太ペンで書かれた文字は、お母さんの迫力と恐ろしさを十分に再現していた。

「……やめところ」

結論を導き出すと、わたしは自分の部屋に戻った。

ベッドの上に体を投げ出し、ボーツと天井を見つめる。仕事で忙しい時にはこんな時間に懂れていたけれど、いざその時間が手に入ると、退屈で仕方がなかった。

「なにか、やること。家の中で……」

しばらく考えたわたしは、素晴らしいアイデアが浮かび上がった。

「そうだ、中界に戻ろう」

わたしは白いローブに緑色の腕章をまとうと、

「カルバドスのおたんこなす」

中界で生活する状態に戻る。そして、

「エンマさまあ」

猫などで声を上げると、わたしの体が光に包まれていった。

次の瞬間には、エンマ様の部屋にいた。

「どうしたミリア。何かあったか？」

審判中のエンマ様が、当然のごとく尋ねてくる。

「いえ、なんでも……オホホホホ」

適当に愛想笑いをしながら、わたしはエンマ様の部屋から逃げ出した。

中界に戻ってきた理由——それはもちろん仕事をするためではない。

優美ちゃんは骨折のせいで、爆弾の仕掛けられた会場から逃げられなかった。

そしてその骨折は、すでに信也君が昨日の内に防いだと言っていた。

となれば、優美ちゃんがサーカス会場から逃げ出せない理屈はなくなり、死ななくてすむはず。

それを確認するには、中界のDVを見るのが一番早い。

もし優美ちゃんのDVに書かれた享年が、八十歳にでもなっていれば、それはすなわちサーカス会場から逃げ出せたという結論になる。

「わたしって、頭いいよねえ」

鼻歌を歌いながら、廊下をスキップで進んでいく。

ビデオルームに入ると、早速わたしは優美ちゃんのDVを検索し、手中に収める。

そして一度目を閉じ、片目だけをゆっくり開きながら、背表紙のタイトルを見る。

そこには『山倉優美 享年十六歳』と書かれていた。

「はあ。やっぱり、そんなに甘くはないか」

わたしはDVを元の場所へ戻そうと、手を伸ばした——と、同時に、妙な違和感を感じていた。

もう一度、手元までDVを戻し、タイトルを眺める。何度見ても『山倉優美 享年十六歳』だ。

「優美ちゃんの享年、十六歳だっけ？」

必死にサーカス会場での死亡が録画されたDVの、背表紙を思い出す。

確かそこには『山倉優美 享年十七歳』と書かれていたはずだ。一瞬で、背筋に悪寒が駆け抜けていた。パソコンを利用して、優美ちゃんのデータを呼び出す。

確認したわたしは、愕然としてしまった。

優美ちゃんの命日は、十月二十八日だったはずだ。それが今では、十月二十五日になってしまっている。

「何これ……何かの間違いでしょ？」

だけど、何度確認しても間違いではなかった。資料には、母親に壺で殴られて死亡という死因まで、きつちりと書き込まれている。

手が震えだし、持っていたDVが軽い音を鳴らす。

「そうだ、確認すればいいんだ！」

わたしはビデオデッキに優美ちゃんのDVを入れて、すぐさま再生ボタンを押した。

画面に映し出された映像は当然、サーカス会場ではなかった。どこか場所は分からないが、靴が大量に並んだ室内——玄関だと思われる。

そこには優美ちゃんともう一人、派手な格好をした、四十代前後のおばさんがいた。この人が優美ちゃんの母親なのだろう。

「鷹野君はそんな人じゃない！」

「なぜ断言できるの？ 人間なんてみんな、お金の前では本性を現す。その子もすぐにそうなるわ」

どうやら優美ちゃんは、母親ともめているらしかった。温厚な優美ちゃんの表情が、激昂している。

「お母さんには、お金では得られない絆なんて一生、分からないのよ！」

そう最後に吐き捨てた優美ちゃんは、振り返り母親に背を向ける。刹那、陶器が砕け散ったような音がこだました。

母親の手には、かつて壺であったものが握られている、そして、

スローモーションのように、崩れ落ちる優美ちゃん。

「高い壺なのに……道具のくせに生意気な口きくから、そうなるのよ」

吐き捨てるように告げると、母親はその場から去った。頭から流れる流血が、鼓動に合わせてどんどん溢れ出てくる。

「鷹野君……」

後に残された優美ちゃんが、ゆっくりと目を閉じる。

「もう、いいや……」

最後にそうつぶやく。映像はそのままを維持した。DVが終わらないということは、まだ優美ちゃんが生きていることを意味する。

わたしは早送りをしつつ、成り行きを見守った。すると約一時間が過ぎた頃、家の中にインターホンの音が鳴り響く。

何度も何度も、インターホンは自分の存在をアピールする。

だけど、それに優美ちゃんは応えることなく、画面は暗くなつていった――。

砂嵐状態に戻った画面をそのままに、わたしは両腕で自分の体を抱きしめていた。鳥肌が全身にたち、寒気が治まらなかった。

「何よ、これ。わたしや信也君が生き返ったせいで、優美ちゃんは予定より早く死んじゃうわけ？」

人の死に触れることは何度もあったけど、自分のせいで誰かが死ぬのは初めてだった。

10月24日α(2)

「どうすれば、どうすればいいの……だいたい信也君は、こんな大
事な時にどこにいつてるのよ……」

わたしはDVを元に戻し、ビデオルームを後にした。そのまま駆
け足で、生前の映像を管理している現生課へと向かった。

現生課では、生まれてから死ぬまでの映像がすべて管理されてい
る。莫大なデータを管理するため、その規模も人員も大きい。

「あの、すみません！」

茶色の腕章をつけた、眼鏡をかけた現生課の女性に尋ねる。名前
も知らない人だけど、そんなことはこの際関係ない。

「なんですか？」

「あの、鷹野信也っていう子の、生きているときの映像が欲しいん
ですけど……」

「アンタ案内課でしょ？ 死ぬ瞬間の映像なら編集課じゃないの？」

「死ぬ瞬間の映像じゃなくて、生きている時の映像が見たいんです」
眼鏡を一度上げてから、女性は何やら書類を書き始めた。

「ふーん、あなたの名前は？」

「えっと、ミリア＝ミリスです」

「ミリア？ ミリアっていったら中界一の嘘下手のミリアでしょ？
そばかすにずんどうの女の子で、あなたとはまるつきり違うわ」

「それはその……わけあっていまはこの格好なんです」

「わけ？ どんなわけよ？」

「それは……」

説明できるはずがなかった。生き返らせてもらった信也君のサポ
ートとして、現界にこの格好で住んでいるなんて――。

気がつくとなわたしは現生課を飛び出していた。その足は、わたし
の職場――案内課を目指していた。

勢いよく案内課の扉を開けると、全員がわたしに釘付けになった。

まったく知らない人が、白いローブに緑の腕章の制服姿なのだ。当然だろう。

だけど、一人だけ驚きながらもわたしの正体を察していた人物がいた。昨日、渾身の右ストレートを食らったカルバドスである。

「ど、どうしたんだよミリア、こんなところで油を売っていいのか？」

「いいから来て！」

「お、おい！」

わたしはカルバドスの手を引いて、現生課へと引き返した。先ほどの眼鏡の女性の前にカルバドスを突き出し、まくしたてる。

「ほら！ カルバドスよ！ 彼は本物だし、わたしがミリアだっていう証人でもある！ だから早く映像を見せて！」

突然の事態を把握できないなりに、カルバドスはわたしの目的を察知したようだった。

「博美ちゃん」

カルバドスが女性に声をかける。どうやら博美という名前らしい。「よくわかんないけどさ、こいつはミリアだし、見たい映像つてのを見せてあげてくれないかな？」

「は、はい！ カルバドスさんの願いならどんなことでも！」

博美ちゃんの態度は、明らかにわたしの時と違った。どうやら彼女をカルバドスの毒牙にかかった一人らしい。

「誰のどの映像が見たいんですかあ？ ミリアさあん」

先ほどとは打って変わって、猫なで声を発する博美ちゃん。沸き起こる悪寒を抑えながら、わたしは博美ちゃんに告げた。

「名前は鷹野信也。見たい映像は、明日の十時ぐらいかな？」

「分かりましたあ。ちよつと待つてくださいねえ」

尋常じゃないスピードで、キーボードを打ちまくる。

わたしの望んだ映像は、あつという間に博美ちゃんのパソコンへと表示されていた。

「ミリア、この映像がどうかしたのか？」

カルバドスの質問を無視して、わたしは食い入るように映像を見つめた。

信也君は横断歩道の側で、ぼんやりと立っていた。時折通行人を観察しながら、何かを待っているようにそわそわしている。

「そっか、明日は信也君の命日……」

見覚えのある横断歩道で、わたしだけは察していた。なぜなら、わたしは信也君のDVを確認しているから。

信也君はこの場所で、少女をかばって死亡する。それはつまり、信也君がいなければ少女が死亡することを意味する。

それに気がついた信也君が、再び少女を助けるために、この横断歩道を訪れてもおかしくはない。

予想通り、信也君は少女を助けた。そして少女の母親に、お礼がしたいとせがまれている。

信也君はそのまま親子についていき、駅前の喫茶店『チュ・ターク』に入ってしまった。

しばらく談笑した信也君は、親子と別れて優美ちゃんの家へと向かった。

門に備え付けられたインターホンを鳴らすも、優美ちゃんは出てこない。

さつきみた優美ちゃんのDVで聞こえたインターホンは、どうやら信也君が押したものらしい。

「もういいよ。ありがとう」

わたしは博美ちゃんにそう告げると、ふらつきながら現生課を出た。途中で足をからませて、こけそうになるのを、カルバドスが支えてくれる。

「大丈夫か、ミリア」

「う、うん、大丈夫。とりあえず、エンマ様に相談してみるよ」

「俺じゃだめなのか？」

「うん……ゴメンね、カルバドス」

カルバドスの手を振り払い、わたしはエンマ様の元へと向かった。

ほんの数メートルの距離が、果てしなく遠く感じた。

10月24日^a(3)

エンマ様の部屋に入ると、わたしのただならない状況を感じ取ったのか、一時的に判決を中断してくれた。

「どうしたんだ、ミリア」

優美ちゃんの死が、早まった事実を告げると、エンマ様は腕を組んで考え込んだ。

そして、わたしに尋ねてくる。

「ミリア、お前はどうするつもりだ？」

「もちろん信也君に伝えますよ！ 明日の出来事なんですから、今日忠告すれば防げるはずですよ！」

「そうだろうな……だが、鷹野信也にこの事実を伝えてはならん」
悪魔のような言伝を受け、わたしは思わず絶叫していた。

「ど、どうしてですか！」

「では逆に聞くが、もしも山倉優美を助けた結果、次に死ぬのが三日後だったとしたら、どうするつもりだ？ また三日間ほど鷹野信也を生き返らせるというのか？」

「そ、それは……」

「それではきりがないだろう？ 鷹野信也には悪いが、生き返らせた時点の情報だけで、山倉優美を救ってもらう。その結果、山倉優美の死ぬのが早くなるうと、それは運命なのだ」

「はい……」

「もちろん、ミリアが山倉優美を助けることも許さんぞ。ミリアの役目はあくまでサポートであり、山倉優美を救うのは、鷹野信也でなければならん。ミリアはミリアで、現界人の恋愛を学ぶという使命もあるんだからな」

「わかりました……」

返事はしたものの、わたしは納得がいかなかった。

もちろん信也君が優美ちゃんを救えようが救えまいが、わたしの

中界での生活に影響はない。

「ただ毎日相談を聞いているわたしは、努力している信也君の姿を知っている。こんな終わり方で、信也君の望みが絶たれて欲しくなかった。」

「ところでだ、ミリア」

「はい？」

話を切り替えて、エンマ様はわたしをにらみつけた。

「お前は中界に帰って来すぎだ」

「えっ？ あ、そうかも……」

「そうかもじゃない。せつかく現界で生活するよう手配しているのだ。今後はよほどの用事がない限り帰ってくるんじゃないぞ？」

「も、もし帰ってきたら？」

怖いもの見たさといった感覚で、尋ねてみる。するとエンマ様は、にべもなく言った。

「地界巡礼ツアー一ヶ月に、今後の仕事は一生夜勤……でどうだ？」

「そ、それは勘弁してください！」

地界巡礼ツアーだけならまだしも、夜勤なんて絶対にやりたくないかった。

「よし、これならそう簡単には帰って来ないだろう。では、そういうことで、現界に戻すからな」

「あ、ちよっ！」

抵抗する間もなく、わたしは自分の部屋へと戻っていた。

10月24日α(4)

白いローブを普段着へと着替えてから、布団に包まる。頭の中の問題は、もはや処理できるような量ではなかった。

「信也君にも事実を伝えられない、わたしが優美ちゃんを救ってもダメ。それじゃあどうやったって、優美ちゃんの運命は変えられないよ……」

頭を抱えるわたしの耳に、突如電話の音が鳴り響いた。枕元にある電話を取るも、何も聞こえない。

そつえばここは信也君の家だった。

電話機を探して階段を下りる。すると食事をする部屋の隅のほうから、音が聞こえてきていた。

「はい、ミリスです」

「鷹野ですだろ……」

呆れた声で返してくるのは、間違いなく信也君の声だ。

「信也君？」

「ああ、母さんいる？」

「いや、まだ帰ってきてないよ。信也君こそまだ帰らないの？」

頭を悩ませていたせいか、気だるさが全身を襲って抜けてくれない。

「できるだけ早く帰るよ。とりあえず母さんに晩御飯はいらないとだけ伝えておいて」

夕飯がいらないとは、おかしい話だ。社会人ならまだしも、学生の信也君がお金を使う外食を自分からするとは考えにくい。

「もしかして……優美ちゃんのところ？」

一瞬だけ、信也君の声が止まった。どうやら図星らしい。

「ああ、そうだけど……」

「ダメよ信也君！ 優美ちゃんと仲良くなっちゃダメ！」

わたしは思わず、叫んでしまった。

優美ちゃんはDVの中で、信也君への恋心を語っていた。ならば、優美ちゃんと仲が良くなければ、未来は変わるかもしれない。

「なんでダメなんだよ？」

信也君が当たり前のように尋ねてくる。

「そ、それは、その……理由はエンマ様に喋るなって言われてるから」

「なんで喋っちゃいけないんだ？」

「エンマ様の判断だから、ダメなものはダメなの。ごめんね、信也君」

本当ならすべてを伝えたかった。だけど、その想いも空回りするだけ。

信也君は痺れを切らして、

「理由を言えないのは分かった。だけどミリア、山倉を放っておくわけには、いかないんだよ！」

「信也君！」

わたしの静止も聞かずに、向こうから電話を切られてしまった。

「信也君、ダメだよ……」

不通の音に変わった電話機に、ぼそりとつぶやく。もちろんその声が、信也君に届くとは思っていない。

受話器を置いて、わたしは自室へと戻ろうとした。すると今度は、家の中にインターホンの音が鳴り響いた。

10月24日^a(5)

「だれ……?」

警戒しながら、扉越しに声をかける。すると、聞き覚えのある声が名乗りをあげた。

「あの、竹下聡史です。美利亞はいらっしゃいますか?」

「えっ? 聡史君!?!」

慌てて玄関のドアを開けると、そこにいたのは確かに昨日出会った、聡史君だった。

「あつ、美利亞。こんにちは」

「こ、こんにちは……でも、どうしてここが分かったの?」

「そ、それは……その、昨日、美利亞の後をつけたんだ。ごめんなさい」

ばつが悪そうに、うつむく聡史君。

「別にいいけど、わたしに直接聞けばよかったじゃない。家はどこなのかって」

「それは、そうだけど」

「まあ、いいけどさ。で、どうかしたの?」

「その、実は……」

そのまま頭を掻いたり、頬を真っ赤に染めたりして、なかなか話し出さない。

「せっかくだから、家に上がる?」

「えっ? いいの?」

「もちろん。さっ、どうぞ」

なかなか話し出さない聡史君を、家の中へと招き入れる。外出禁止とは言われたけど、家の中に誰も入れるとは言われていない。

なんだか知らない抜け道を発見したみたいで、嬉しくなった。

自分の部屋へと案内して、二人でベッドに腰掛ける。ここは本当なら中界のわたしの部屋だけど、今なら入っても問題ないだろう。

わたしの部屋を見渡していた聡史君は、不意に、

「殺風景な部屋ですね……」

そう言い出していた。

「くっ、お、女の子らしくないって言いたいわけ？」

「い、いや、そういうつもりじゃ……」

慌てて否定する聡史君。何やら怪しいけれど、それ以上は追求しなかった。

「で、何があつたの？　もしかしてまたいじめられちゃったとか」
ようやく本題に戻ると、聡史君は大きく首を振ってわたしの発言を否定した。

「実はね、今日もあの三人に囲まれて殴られていたんだ」

「やっぱりいじめられてたんじゃない」

「ハハッ、確かにそうかも。でもね、そこからが昨日とは違うんだ」
「どう違ったの？」

「昨日、美利亜が言ったとおり、あいつらと戦ったんだ。そしたらあいつら、いきなり僕が齒向かうもんだから驚いたのなんのって」
高笑いした聡史君だったが、その笑いは長く続かなかった。

「でもね、結局負けちゃったんだ」

「それは……残念だったわね」

「だけど、すごく面白かった。慌てるあいつらの表情といたらさ！」

そこまで言つて再び吹き出し、布団の上で笑い転げる。

そこに昨日までの——臆病で全てから逃げようとしている——聡史君はいなかった。

「だから言つたでしょ？　集団でいる奴らなんて、それだけ臆病なんだって」

「うん、よくわかったよ。これから黙って殴られたりしない。絶対に今日と同じ表情を見てやるんだ！」

一層大きな声で聡史君は笑い、つられてわたしも笑う。

しばらく笑い続けた後、聡史君は突然笑うのをやめ、わたしに向

かつて頭を下げた。

「美利亜に出会わなかったら、僕は今日もお金を払えって言われて、殴られるだけの一日を過ごすところだった」

「きっかけを与えただけだよ。勇気を出して実行したのは聡史君自身なんだから」

「でも……」

「ほらほら、そんな情けない顔をしないで。もっと自分に自信を持ちなさい！」

背中をドンと叩くと、信也君は苦笑しながらも、お礼を述べた。

「ありがとう、美利亜」

「どういたしまして！」

お礼を言ってくる聡史君の頭を撫でながら微笑んであげると、聡史君は顔を赤くして、わたしから素早く離れた。

「どうかした？」

「な、なんでもないです。と、ところで美利亜、明日は何か用事があるの？ よかったら一緒に出かけない？」

「明日？」

言われて頭をよぎったのは、優美ちゃんの死ぬ光景だった。ただ、わたしには何もできない。

わたしがやらなければならぬのは、現界人との恋愛を経験すること。エンマ様もそう言っていた。

駅前に行くのも悪くないけれど、昨日と同じ結果になる気がする。それならば聡史君と一緒に過ごしたほうが、よほど有意義に過ごせるだろう。

「……と、特になにもないけど？」

平静を装いながら、答える。聡史君は疑うようす一つなく、話を続けてきた。

「それじゃあさ、遊びに行こうよ。昨日のお礼も兼ねてさ」

「二人で？」

「もちろん、遊園地なんかどうかな？」

「遊園地……って何？」

聡史君の顔色が、顕著に変わった。どうやら遊園地を知らない人なんて、現界にはいないらしい。

「なんて言ったらいいかな……とにかく楽しい所だよ」

「楽しいところか。行ってみたいな」

「でしょ？　じゃあ明日の午前九時に、駅前で待ち合わせしようよ」
少し考えてから、わたしはにっこりと微笑んだ。

「うん、いいよ」

「よかった！　じゃあ明日、駅前で待つてからね！」

聡史君を玄関で見送ってから、わたしは深い吐息を漏らしていた。正直に言えば、楽しく遊べるような気分じゃなかった。

だけど、瞳を輝かせている聡史君の申し出を、断るのは忍びなかった。

階段に座って、しばらく固まる。また、悩みの種が一つ増えてしまった。

「美利亞」

前触れもなく声が聞こえて、顔を上げる。

いつのまに帰ってきたのか、そこにはお母さんが立っていた。仕事での服装なのか、つなぎの作業服を着ている。

「お母さん……」

頭がごっちゃになっていて、そう呼ぶのが精一杯だった。

だけとお母さんは、それよりもわたしの一日に憤慨していたようだ。しかめっ面で、わたしを上から見下ろしている。

「お前、約束を破って出かけたな？」

「えっ？　で、出かけてないよ！　家にずっといたよ！」

「だったらどうして、玄関の扉に挟んでおいた紙が、下に落ちてるんだ？」

お母さんが指差した先には、確かに小さな紙切れがあった。

「そ、それは、その……お、お母さんが帰ってきた時に、落ちたんじゃないの？」

「それはない。わたしが仕掛けたんだぞ？　ちゃんと確認して入ってるさ。だがな、玄関の扉に挟まれた紙はなく、扉を開けた時にはすでに落ちた後だった。さあ、どう説明するんだ？　場合によっては一生飯抜きになりかねないぞ？」

眉を吊り上げた顔を、わたしに近づけてくる。仕方なくわたしは、きちんと説明した。

外出したわけではなく、友達を家に入れたただと……。

「ほう、なるほどな。そうやって、難を逃れたってわけか……」

「ごめんなさい」

「まあ、今回は許してやる。だが、次はないからな、覚悟しとけよ」
お母さんはわたしを階段に残したまま、玄関右の部屋へと入っていった。

部屋から出てきた時には、作業服からエプロン姿へと変わっていた。ようやくそこで、信也君からの言伝を思い出す。

「そういえば信也から、今日は晩御飯いらないって電話があつたよ」
「ん？　そうなのか？　じゃあ今日の夕飯は簡単なもので済みますか」
わたしが頷き、二人で食事の部屋へと向かう。お母さんの手には、カップラーメンが握られていた。

「昨日も、それだったんだけど……」

わたしは思わず、そう呟いていた。

もちろんカップラーメンは大好きだ。だけど、どうせなら他にも、現界でしか食べられないような物を食べてみたかった。

「そうだった。じゃあ、おでんにしよう。おとこの残りがまだあるんだ」

「カップラーメンが食べたい！　二日連続でもカップラーメンって美味しいよね！」

瞬間的にそう返答しながら、ハッと我に返る。どうせなら、物珍しいものを希望すればよかった。

だけど、わたしが知っているような名前の食べ物、中界でも食べれるものだろう。

「そうか？　じゃあお湯を沸かしてくる」

結局そのまま、今夜もカップラーメンで夕食が終わった。

味は悪くないけれど、昨日よりも感動が薄れていた分、少し物足りなかった。

「へつくち！」

何の前触れもなく、鼻がむずむずしだしたわたしは、くしゃみを放っていた。

「なんだ、風邪か？」

「分かんない……へつくちん！」

再びくしゃみが放たれ、ティッシュで鼻をかむ。

「誰かが美利亜の噂でもしてるんだろ」

「わたしの噂？」

そうかもしれない。だとすると、犯人は間違いなくカルバドスだろう。

それからくしゃみも止まり、夕飯も無事に終わる。すでに時間は八時を回っていたけれど、信也君はまだ帰ってこなかった。

優美ちゃんの家で夕飯を食べるにしても、こんなに遅くなると、心配になってくる。

「お母さん、信也遅いね」

わたしが訪ねると、お母さんは、

「連絡してくるだけ、美利亜よりはマシだけどな」

と、笑い飛ばされた。藪をつついて蛇を出すとは、まさにこれだ。まるでテラを相手にしているような気分になってくる。

10月24日α(6)

苦笑いでその場を濁し、自分の部屋に戻ろうと玄関を横切った時、玄関の扉が開いた。ようやく帰ってきたらしい。

「ただいま」

「あ、お帰り信也！　優美ちゃんは？」

尋ねると、それに答えるかのように、信也君の背後から優美ちゃんが姿を現していた。

「ゆ、優美ちゃん！？」

なぜ優美ちゃんがここに――混乱している脳裏に、さらに追い討ちがかかる。

「えっ？　わたしの名前、どうして知ってるんですか？」

「あ、そ、それは、その……」

慌てて弁解を考えようと、必死になる。それよりも早く、信也君が苦笑いで答えた。

「ちよつと前に、山倉の話姉さんにしたんだよ。どんな人かも話したから、想像通りの姿だったんじゃないかな？」

平然とごまかす。さすがは信也君だ。

何度も首を建てに振ると、それだけで優美ちゃんは納得したようだ。

「そうだったんだ。これからよろしくお願いしますね、お姉さん。

えつと、名前は……」

「み、美利亞です！　初めまして！　よ、よろしく！」

「美利亞さんですね。こちらこそ、よろしくお願いします」

差し出してきた優美ちゃんの手を、汗を服で拭ってから握り返す。それにしても、信也君はどういうつもりなのだろうか？　わたしの助言を完全に無視していると思えなかった。

「姉さん、山倉を僕の部屋へと案内してくれない？」

信也君に呼ばれて、わたしはようやく我に返った。

「わかった、こっちょ」

わたしが階段の上に促すと、微笑んだまま優美ちゃんはついてきた。

明日死んでしまうという、自分の運命も知らずに――。

「さ、ここが信也君の部屋よ」

扉を開けると、興味深そうに優美ちゃんは覗き込んだ。特に珍しいものはないけれど、整理はきちんとしてある。

「へえ、ちゃんと整理整頓してるんですね、鷹野くんって」

「そうだね。どっちかって言うとなわたしの部屋の方が汚いかも」

わたしが冗談交じりに言うと、優美ちゃんは小さな声で笑っていた。

「それじゃ、飲み物でも持ってくるから。その辺に座っていれば、信也君もすぐ来ると思うし」

「はい！」

元氣よく返事をした優美ちゃんを部屋に残し、台所へと向かう。はたから見ても、優美ちゃんは文句なしにいい子だった。

資料ではわからない、優美ちゃんの内面の優しさや明るさが、にじみ出ている。

冷蔵庫の中からお茶を取り出すと、ガラスのコップを二つ用意する。

だけど、急いで優美ちゃんの下へと戻ろうとしたのがいけなかった。

階段で思い切り蹴躓いたわたしの手から、コップが束縛を逃れた。そのままコップは綺麗な放物線を描き、床へと着地する。もっとも、その体はバラバラに砕け散ってしまったけれど。

10月24日^a(7)

音に反応して、信也君と優美ちゃんが部屋から出てくる。

「し、信也君……」

出てきた信也君を見上げると、嘆息まじりにわたしを見下ろしていた。

散乱したコップの破片を、わたしと信也君と優美ちゃんの三人で拾う。

「いま、なんか変な音しなかったか？」

コップの割れた音は、お母さんの部屋にまで聞こえたようだった。お母さんが部屋から出てきて、まくしたてる。

「ど、どうしよう」

昨日から、お母さんには怒られてばかりなのだ。コップを割ったといえば、まだどやされるに決まっている。

そんなわたしの気持ちを察してか、信也君はわたしの肩にそっと手を乗せてきた。信也君がなんとかしてくる——そんな安堵の気持ちが増える。

だけど、そんなわたしの期待を、あっさりと信也君は裏切ってきた。

「しつかり怒られてきなよ、姉さん」

「えっ、えええ！？」

わたしは全力で首を左右に振った。

「いやだよ！ 絶対怒られるもん！」

「だけど、グラスを割ったのは他の誰でもない姉さんだろ？ 早く行かないと、怒られる量が倍になるよ？」

「うう……」

事実なのだから、そう言われては、返す言葉もない。

渋々と、わたしは階段を降りていった。信也君の視線を、背後から感じる。

「美利亞、なにがあつたんだ？」

「ごめんなさい！ ごめんなさい！」

わたしは怒られる前に、手っ取り早く謝った。早く謝れば、それだけ早く説教も終わるかもしれない。

「ただ、現実はその甘くなかった。」

「ごめんなさいじゃ、なにがあつたか分からないだろ！」

わたしの気持ちとは裏腹に、お母さんは余計に怒りだしてしまつた。

両手の指先を軽く擦り合わせながら、簡潔に述べる。

「コップを、割っちゃったの」

「まあ、あの音から想像できるのはそれぐらいだろうな。で、怪我はなかったのか？」

怒られるとばかり思っていたので、不意をつかれて目を白黒させる。

自分の身体をおおまかにチェックする。特に異常は見当たらなかった。

「わたしは平気だよ。だけどコップが……」

「コップなんて、また買えばいいさ」

お母さんは鼻で軽く笑うと、わたしを台所へと連れて行った。わたしをそのまま放っておいて、何やら食器棚を探り始める。

「怒らないの？」

「ん？」

蚊のなくようなすすり声で質問すると、お母さんは少し考えてから、

「怒られたいのか？」

と返してきた。慌てて首を横に振る。

「じゃあ別にいいだろ」

「でも、昨日からお母さんに迷惑かけてばかり。わたしなんていないほうが……」

「美利亞！」

わたしの方へつかつかと近寄り、すぐそばで立ち止まる。

「今、なんて言おうとした？」

「えっ、わたし、その……」

「わたしなんて、いないほうがいいって、言おうとしただろ」

「う、うん」

肯定と同時に、お母さんの放ったビンタがわたしの頬を襲った。

何かが弾けるような、乾いた音が辺りに響きわたる。

一瞬なにをされたかわからず、お母さんの前で呆然と立ち尽くす。お母さんは黙ったままわなわなと肩を震わせて、わたしを鋭く睨みつけていた。

「な、なんで？」

ようやく痛み出した左頬が、わたしの頭をはつきりとさせる。

「いないほうがいいなんて、思うわけないだろ！　なんでそんなこと言うんだよ！」

その声は、家に遅く帰ってきた時よりも、外出したと疑った時よりも激しく、そして大きかった。

「だって、迷惑かけてばかりだし」

「親に迷惑かけない子どもが、どこにいる」

「だけど、だけどね！」

返事に苦しんで、息を詰まらせる。

すると、お母さんは突然、わたしを強く抱きしめた。

「えっ、おかあ……」

「あのな、美利亞。わたしが美利亞を叱るのは、お前が邪魔だからじゃないんだ。わかるか？」

お母さんの質問に、答えられなかった。

というよりも、いきなり抱きしめられて動揺し、なにも考えられなかったのだ。

「じゃ、じゃあなんのために？」

「美利亞を心配しているからさ」

とたんにわたしの胸が締め付けられ、苦しくなっていく。

味わったことのない——苦しいけど、痛いわけではなく、心臓を優しく押さえ込まれるような、そんな感触だ。

「心配しているから叱るんだ。昨日だって、帰りが遅くて心配してたんだぞ。事故にでも遭ったんじゃないか？　もしかしたら誘拐されたんじゃないか？　それだけ心配しているのに、お前は全然平気な顔して、のらりくらりと帰ってくる。心配している気持ちを無視されれば、美利亞でも怒りたくなるだろ？」

「うん……」

「わたしはな、いつだってお前たちを想っているんだぞ？」
「いつも？」

「ああ、お前たちには幸せになつて欲しいからな」

包んでいた手を放し、お母さんは元の位置へと戻って、またなにかを探し始めた。

「ねえ、お母さん」

「なんだ？」

探す手を止めずに、声だけでわたしの方へと意識を向けてくる。

「いや、なんでもないよ」

「そうか。とにかく約束してくれ。もう心配かけないって。わたしの娘なら、約束ぐらいちゃんと守ってくれるよな？」

「うん、わかった……」

お母さんは話を笑顔で締めくくり、あとは探しものに集中し始めた。

——本当は言いたかった。わたしの本当の名前はミリア＝ミリスで、お母さんに娘なんていないのだと。

子どもは信也君一人で、わたしはなんの関係もない、赤の他人なのだ——。

わたしにとってお母さんは、一昨日初めて会った女性というだけだ。

それなのに、お母さんにとってわたしは、ずっと一緒に暮らしてきた大事な娘なのだ。

わたしの安否を気遣い、想ってくれるのはとてもありがたい。だけど、わたしは偽者だ。すぐにお母さんの前からいなくなってしまう。

それを考えると、自分の娘を思うお母さんの気持ちを踏みにじり、騙しているようでやるせなかった。

だけど、言えない。ここですべてを話してしまつては、何もかもが台無しだからだ。

信也君が優美ちゃんを救おうとしている心も、エンマ様が成長するチャンスを与えてくれたことも。

そして、聡史君がわたしを誘ってくれたことも――。

「あつた。ほら、これなら割れないだろ？」

お母さんが食器棚からなにかを取り出し、こちらに向かって投げてくる。

それはビニール袋にまとめられた、紙コップの束だった。

「う、うん。ありがと」

今までの思考を悟られないように、急いで信也君の部屋へと向かう。

散らばっていたはずの、コップの破片は、きれいに片付いていた。ちりとりでガラスの破片を集めていた信也君の傍らで、優美ちゃんが心配そうにわたしの表情を伺っている。

「はい、信也君」

持っていた紙コップを信也君に渡すと、自分の部屋への扉を開いた。

背後から信也君が何やらお礼を言っていたし、優美ちゃんは未だ心配そうな顔で見つめていた。

だけど、何か言葉を返そうという気には、なれなかった。

自室の扉を閉めると、胸に手をやる。

「なにこれ……」

締め付けるような苦しみが、心を驚& amp;#25681;みにしていた。初めての経験で、どうすれば治まるのかすら、分から

なかった。

わたしは目覚まし時計を八時半に合わせてから、布団へと潜り込んだ。膝を抱えて、頭を空っぽにする。

わたしを苦しめる原因は、分からないままだった。

だけど、忙しい一日だったせいかな、眠りに落ちるまでにそう時間はかからなかった。

10月25日^a(1)

十月二十五日 土曜日

目覚ましの音で、わたしは目を覚ました。時計はもちろん、八時半を指している。

あくびまじりに着替えを済ませてから、部屋を出ると、ちょうど信也君の部屋から優美ちゃんが姿を現していた。

「あ、おはようございます！」

「あ、おはよ……」

元気よく頭を下げる優美ちゃんに、顔を伏せながら挨拶を交わすと、わたしは逃げるように階段を下りた。

食事をする部屋に入り、中を見渡す。お母さんがせっせと朝食の支度をしていた。

「おつ、なんだ、今日は早いな美利亜。雪でも降るんじゃないか？」

「あ、うん、ちょっと友達と出かけるんだ」

「友達？ まさか、男か？」

「ああ、うん」

気のない返事にも、なぜかお母さんが甲高い笑い声を響かせた。

「ハハハ！ ついに美利亜も彼氏ができたのか！」

「そ、そんなんじゃないよ」

「なんだ、いまからデートだってのに、暗い表情だな……」

返事に苦しんでいると、背後から人の気配を感じた。もちろん優美ちゃんである。

「おはようございます！」

「おはよう。信也はまだ寝てるのか？」

「ええ。かわいい寝顔で！」

二人して高らかに笑い出すも、わたしは笑う気にはなれなかった。あの、具合でも悪いんですか？」

そんなわたしのようすが気になったのか、優美ちゃんが尋ねてく

る。

「いや、別に……」

「そうか、分かったぞ。美利亞、おまえお金がないんだろ？ 仕方ない奴だな……」

言いながら、お母さんは財布から一枚の紙切れを差し出した。その紙切れには壹万円と書かれている。

「信也には内緒だからな？ 初デートの饞別として受け取っとけ」

「えっ？ 美利亞さん、今からデートなんですか？ うらやましいですね」

「なに言っただよ。優美ちゃんも今日は信也とデートだろ？」

「そ、それは……そうですね」

「またも二人して笑い出す。わたしはいたたまれなくなり、行つてきます！」

吐き捨てるように叫び、家から飛び出していった。そのまま聡史君との、待ち合わせ場所へと向かう。

それは遊園地に行くためではなく、今日の予定をキャンセルするためだ。

わたしには何もできないとはいえ、一人でのうのうと遊ぶなんて、無理な話だ。

駅前にたどり着くと、聡史君の姿を探す。「あ、美利亞！」

わたしが見つけるよりも早く、向こうから声をかけてきた。服装は学生服ではなく、髪型もきちんとまとめて整えている。

「聡史君……」

「どうかした？ 早く行こうよ」

遊園地に行く気満々の聡史君に、わたしは頭を下げた。テラに謝るときでも、こんなには下げないというほど深く――。

「ごめん、聡史君。遊園地に行くの、今日はちよつと無理かな？」

「えっ？ 何か用事でもあるの？」

「そついうわけじゃないんだけど、ちよつと気分が乗らないっていうか……」

すべてを話せないのが、こんなにも面倒くさいとは思わなかった。少しだけ、信也君の気持ちが分かる。

「そっか……じゃあさ、せっかくだし喫茶店にでも行かない？ 緊張して、朝ごはん食べてないから、お腹が減ってるんだ」

「喫茶店？ まさか、チュ・ターク？」

「そうだよ。よく知ってるね」

わたしの脳裏に、電撃が走った。まだ、わたしにできることがあった。

エンマ様は優美ちゃんの早死にを、信也君に伝えてはならないといった。そして、わたしが助けてもいけないと。

その二つさえ守っていれば、わたしの行動に制限はない。確実ではないけれど、信也君の行動次第で、優美ちゃんを救えるかもしれない。

「行こう！ 早く案内して！」

聡史君を急かすと、首をかしげる。

「チュ・タークを知ってるのに、場所は知らないの？」

「細かいことは気にしないの！」

聡史君の背中を押して、チュ・タークへの足取りを速める。

喫茶店チュ・タークは、それほど駅から離れていなかった。モダンな雰囲気の落ち着いた内装に、心地よいBGMが流れている。

わたしたちはカウンターの背後——店内がよく見渡せる場所へと座った。もちろんわたしがその座席を選んだのだ。

「僕はグラタンにするよ。美利亞は？」

「わたしも同じものでいいよ」

「じゃあ、グラタンを二つ」

エプロン姿の店員を呼んで、聡史君が告げる。店員は注文を繰り返してから、深々と頭を下げた。

「美利亞も朝ごはん食べてないの？」

「あ、うん。ちょっと急いでたから」

「じゃあ、ちようどよかったね。ここのグラタンは絶品なんだよ」

嬉々として話しかけてくる聡史君には、申し訳なかったけれど、わたしの意識は出入り口へと向けられていた。

一分一秒が、こんなにも長く感じられる。初めての経験だった。グラタンが運ばれてきて、聡史君がさましながら食べ始める。

「ミリア、食べないの？」

「あ、ごめん。わたし猫舌なんだ」

「そうなんだ……まあゆっくり食べなよ」

本当は猫舌などではない。だけどすんなりと嘘を言えたのは、そんなことを気にする暇なんて、ないからなのか……。

10月25日α(2)

九時半を回った頃、何度目かの出入り口の開放に目をやる。ようやく現れた、目的の人物——信也君。

わたしは気合を入ると、カウンターに座ろうとしている信也君に声をかけた。

「あれ？ 信也じゃない」

振り向いた瞬間、信也君の口が大きく開いていた。丸くなった双眸が、わたしを的確に捉えている。

「ミリ……姉さん！ どうしてここに！」

「どうしてって、デートに決まってるでしょう？」

「デートって……」

「デートだなんて、そんな……」

小声でつぶやく、聡史君の声が聞こえる。

そして勢いよく立ち上がると、信也君に向かって深々と頭を下げた。

「は、初めまして。竹下聡史です」

信也君は何か不満があるのか、聡史君には軽く会釈をするだけで、すぐにわたしへと向き直った。

「あのさ、姉さん……」

「わたしよりも、信也こそどうしたの？ まさか優美ちゃんをほったらかしにして、不倫でもしてるんじゃない……」

わたしはにべもなく、信也君を突き落とした。時間は一分一秒でも欲しい。無駄な話をしている暇はなかった。

「ま、まさか！ ちょっとこの子を助けたから、お礼にコーヒーでもって……」

「それで、優美ちゃんをほったらかしにしてるわけだ」

「そういうわけじゃ……」

「あーあ、信也君の愛情なんて、そんなもんだったのね」

信也君の良心を、するどくえぐる。

すると、信也君は親子に向かつて、頭を下げていた。

「あの、すみません……やっぱいいいです。僕はちょっと用事があるんで」

「そうですか……」

「よかつたら、その二人にご馳走してあげてください。僕の姉とその彼氏で、初デートらしいんです」

別にそこまでは望んでいなかったけど、話が丸く収まるならと、黙っている。

「わかりました。では、そうさせてもらいます。今日は本当にありがとうございました」

「お兄ちゃん、ありがとうね！」

「もう道路に飛び出しちゃだめだよ？」

「うん！」

少女の頭を撫でると、信也君はチュ・トークから飛び出して行った。優美ちゃんの家へと向かうのだろう。

これでわたしの役目は終わった。というよりも、わたしの出来る限界ギリギリのお手伝이었다。

信也君がどうして優美ちゃんを守れなかったかを、エンマ様に説明しなかった——それが最大の要因だった。

信也君がチュ・トークに来るのを知っているのは、わたしとカルバドス、それに現生課の博美ちゃんだけ。エンマ様は知らない。

わたしは信也君に、優美ちゃんの死を伝えていない。もちろん、わたし自身が優美ちゃんを救っているわけでもない。

ただ、優美ちゃんが母親に殴られるよりも早く、信也君を優美ちゃんの家へと向かうよう誘導した——ただ、それだけだ。

「じゃあ、これは払っておきますので……」

信也君と一緒に来た親子連れが、テーブルの上にあった伝票を持っていく。

そのままレジで会計を済ませると、会釈をしてチュ・トークから去

っていった。

ようやく人心地つき、グラタンを口へと運ぶ。まったりとした歩
ワイトソースが、濃厚な甘みを引き出し、幸せな気分になさしてくれ
る。

目的を果たした達成感や、朝食を抜いた空腹も相成って、わたし
はグラタンを瞬く間に平らげてしまった。

「さっきの人が、美利亜の弟なの？」

食事を終わるのを待ってから、聡史君が質問してくる。

「うん。そうだけど……」

「なんだか、怖そうな人だったね？」

「そんなことないよ。自分よりも相手の気持ちを大事にできる、い
い子だと思うよ」

だからこそ、エンマ様は信也君にチャンスを与えたのだ。

「そっか。まあ初対面だし、長く付き合わないと分からないっての
もあるよね」

「そうそう。わたしも最初は分からず屋の意地っ張りだと思ってた
もの」

「最初は？　なんだか最近、知り合ったみたいな言い方だね？」

言われて気がつく。弟として一緒に暮らしていたなら、最初なん
て言葉は出ないはず。

「そ、それより、早く遊園地に行こうよ！」

慌てて話題を変える。下手な嘘はいつものように、自分を苦しめ
るだけだろう。さっきのように難なく切り抜ける自信はない。

「えっ？　でも気分が乗らないんじゃない？」

「もう大丈夫。単にお腹が減ってただけみたい。さっ、早く行こう
！」

わたしはやるだけのことはやった。後は信也君が優美ちゃんを救
うだけ。

そして、信也君は優美ちゃんを救うだろうという、確信もあった。
それならば、わたしもわたしの目的を果たそう——そう思えてき

ただ。

わたし達はチュ・タークから出ると、バスに乗って遊園地へと向かった。

素早く流れていく景色が、わたしの瞳を捉えて離さなかった。世界の乗り物で、こんなにもスピードの出る乗り物はない。

三十分ほどバスに揺られ、わたしと聡史君は遊園地の前についた。園内から流れてくるリズムカルな音楽に混じって、子ども達の歓声が聞こえてくる。

「乗り物フリーパスで、五千円だって。美利亞はお金、持ってる？」
「五千円？　じゃあこれで」

わたしはお母さんから受け取った一万円札を出すと、五千円のおつりが返ってくる。

中に入るだけで残金が半分になった。少し自分の所持金に不安を覚えてくる。

「そういえば、さっきのバスのお金は？」

ふと気がついて、尋ねる。ああいった公共の乗り物は、現界ではタダでは乗れないという話を、聞いたことがあった。

「ああ、大丈夫だよ。あれは遊園地への直通バスで、運賃は無料なんだ」

「へえ、そうなんだ」

「それよりも、早く行こうよ。楽しい乗り物がいっぱいあるからさ！」

「うん！　楽しい乗り物、いっぱい乗ってみたい！」

園内に入ったわたしは、子どものようにはいしゃいで駆け回った。もしかすると、普通の子どもよりはしゃいでいたかもしれない。

10月25日^a(3)

園内で整備された乗り物は、わたしにとって新鮮な刺激を与えてくれた。

「ねえ、次はあれに乗りたい！」

「うん、いいよ」

乗り物に乗ってはしゃいでは降り、走って次の乗り物へと移動する。中界にはない乗り物の数々に、疲れなんて感じなかった。

「次は、あれかな？」

「ちよ、ちよつとまって！」

聡史君に止められて、ようやくその場に踏みとどまる。

疲れを感じないのはわたしだけの都合だった。聡史君は疲労の色を匂わせている。

「だ、大丈夫？」

「な、なんとか、でも、ちよつとき、休憩しようよ。ほら、お昼の時間だし。焦らなくなつて乗り物は逃げないからさ」

聡史君が腕時計をこちらに向ける。針は確かに正午を少し回っていた。

「そうだね。なにか食べよう！」

「じゃあさ、ここで待っててね」

近くにあった青いベンチにわたしを座らせると、聡史君は辺りを見回して、走り去ろうとしていた。

「ちよつ、どこ行くの！」

「すぐ戻るから」

軽く手を振りながら、人ごみの中に姿を消していく。

辺りに目を配ると、わたしの目に飛び込んできたのは、子連れの家族の姿だった。晴天の下で遊園地を楽しむ表情は、喜びに満ち溢れている。

ふと、信也君の顔が浮かぶ。優美ちゃんが母親に殴られる時間は、

とうに過ぎている。

電話をかけて確認しようにも、電話番号が分からなかった。

「おまたせ。どうかした？」

「うわっ！」

困惑するわたしの顔を伺い、いつの間にやら戻った聡史君が尋ねてくる。

「び、びつくりした」

「ごめんごめん。はい、食べ物と飲み物！」

聡史君から手渡されたのは、レタスとフランクが挟まれたホットドックと、日光の反射で淡く光る、黒い炭酸飲料だった。

「遠慮しないで、どんどん食べてね」

聡史君は笑顔でそう言ったけれど、あまり食事は喉を通りそうになかった。

先ほどまで楽しすぎて忘れていた優美ちゃんの運命が、気になり始めたからだ。

「あの、聡史君」

「ん？」

口いっぱいにホットドッグを頬張っている聡史君に、謝罪する。

「ごめん、そろそろ帰らないと」

「あ……そうなの？」

「うん、ちょっと用事を思い出しちゃって」

「そっか……」

残念そうに顔を曇らせる。ホットドッグを食べる手も止まり、落胆していた。

「急ぎの用事なの？」

「ううん、そこまで急ぎじゃないけど……」

「じゃあさ、もう少しだけ話したいんだけど。ダメかな？ 美利

亜に伝えなきゃいけないこともあるし」

ホットドッグを傍らに置いて、真摯な眼差しを向けてくる。

わたしとしては、優美ちゃんについての結果をいち早く知りたか

った。

「ただ、今さら急いだところで、結果は変わらないのも分かっている。」

「うん、いいよ」

「よかった……」

快諾すると、聡史君は大きく深呼吸していた。そしておもむろに告げた。

「僕は……、僕は美利亞が好きなんだ……」

震える声で、わたしへと告白してきた聡史君に、わたしの心が大きな変化を遂げた。

胸の中心が急に締め付けられ、頬が熱を帯びていく。

お母さんに抱きしめられた時と、ほとんど同じ感触だった。

「初めて会った時、美利亞に一目ぼれしたんだ。初対面は格好悪いところ見られたけど、美利亞に応援してもらえたから、あいつらにも向かっていった」

わたしはたまらず、胸を押さえつけた。呼吸が速くなり、荒々しい音をたてる。

「ど、どうしたの？ 大丈夫？」

わたしの異変に気がついたのか、聡史君が心配そうに、顔を覗きこんでくる。

「なんだか胸が、苦しくて……」

正直に話すと、聡史君は慌てて側に近寄ってきた。

「む、胸が苦しいって、痛いのか？」

「痛くはないよ。ただ、無理やり押さえつけられるような」

顔を火照らしつつ、答える。すると、聡史君はすぐに落ち着きを取り戻した。

「ああ、なんだ。びつくりした」

「わたし、病気なの？」

聡史君は小さく首を横に振った。

「違うよ。ばくも今、美利亞と同じ状態だからさ」

「聡史君も？」

今度は首を縦に振る。聡史君はすべて理解している——そんな表情だった。

「じゃあ、聡史君はこの苦しみの正体がわかるの！？」

「わかるよ。大体だけだね」

「教えて！ これは一体なんなの？ わたしには、まったく分からないの」

尻つぼみに、声が小さくなっていく。うつむいたわたしの肩に、聡史君がゆつくりと手を回してきた。

聡史君の手のひらから、わたしへと温もりが伝わってくる。

「その苦しみの正体は愛情だと思ってる」

「愛情？」

「あくまでぼくの見解だけだね」

一呼吸おいてから、聡史君は続けた。

「好きになった人を想ったり、その人の側にいたりすると、すぐに胸が苦しくなる。これは偶然なんかじゃない」

だとすると、わたしは聡史君が好きなのだろうか——考えた瞬間、今までで最高の苦しみが、わたしの胸を襲っていた。

「変な気持ち」

「その気持ち、嫌かな？」

「嫌じゃないよ。だけど、なんて言えばいいのかな。苦しいけど苦しくない、心地よい苦しさ。そんな感じ」

ぎこちない表現だと、自分でも思った。それでもなんとか伝わったらしく、聡史君は何度も頷いてみせた。

「でも、お母さんに抱きしめられた時も、同じように胸が苦しくなったよ？」

「お母さんのこと、嫌いななの？」

「嫌いじゃないけど……」

少し考えてから、聡史君が結論を述べてくれた。

「それは、お母さんの愛情が美利亜に移ったんじゃないかな？」

「愛情って、移るものなの？」

「わからない。だけど、きっと美利亞のお母さんは、美利亞のこと
凄く愛してるんだと思う。その膨大な愛情が、体を通して美利亞に
移ったんだよ」

「でも、わたしもお母さんも女だよ？」

「愛情っていうのは、なにも男と女の間だけに生まれるものじゃ
ない。大事に、そして大切に、安否を気遣ったり幸せを願うのも愛
情の一つじゃないかな？」

今まで感じたことのなかった愛情が、聡史君の見解で少し身近に
なった気がした。

大事に、そして大切に思う、それがすなわち愛情——今までのわ
たしは、愛情という大層な言葉に惑わされて、本質を見失っていた
のかもしれない。

「僕も美利亞に愛情を抱いている。だから、今美利亞と同じように、
胸が苦しいんだ」

聡史君から愛情という言葉を受けて、わたしは素直に嬉しかった。
仲の良い友達はいても、大事にされたり、大切にされたという記
憶はなかった。愛情は友達よりも、暖かくて、楽しくて、少し苦し
いけど——何より幸せな気分になった。

お母さんに抱きしめられた時も、わたしは苦しかったんじゃない。
お母さんに愛されて幸せだったんだ。

「ありがとう……わたしなんかを好きになってくれて。よく分からな
いけど、わたしも聡史君のこと、嫌いじゃないよ」

まだ好きという感情を、完全に理解できていると、自信を持つて
は言えなかった。

ただ、ここで聡史君がいなくなったら、今まで経験したこと
のないような、深い悲しみに捕らわれてしまうだろう。

それが好きという感情なら、わたしは間違いなく聡史君が好きだ。
聡史君は力強く頷き、わたしを思い切り抱きしめてきた。

「だったら、お願いがある。僕と付き合っただけいい。これからもず

つと、一緒にいて欲しいんだ」

そう言われて、わたしの胸の苦しみが、爆発したかのように膨れ上がった。

だけど、その苦しみの元は、幸せとは程遠い——むしろ絶望の感情だった。

「ずっと……一緒に？」

「うん、これからも遊びに行ったり、食事をしたりしてさ。お互いの愛情を深めて、もっと幸せになりたいんだ。一生、いつまでも、何があっても美利亞と一緒に……」

自分の想いをまくし立てていた聡史君は、わたしの異変に気がついて口をつぐんだ。

わたしは泣いていた。今まで噓泣きは何度も経験しているけど、本気で涙を流す日が来るとは思わなかった。

「どう、したの？」

恐る恐る、聡史君が尋ねてくる。聡史君の手を振り払い、わたしは顔を押しえて立ち上がった。

乾ききった唇が、おもむろに動く。

「ごめんなさい。ずっと一緒になんて、無理なの」「えっ？」

聞き返してくる聡史君に、わたしはもう一度、本心を伝えた。

「一緒には、いられない。すぐにお別れになるから」

「どうして？ やっぱ僕みたいな情けない男は嫌い？」

力いっぱい首を横に振り、全力で否定を伝える。

「嫌いじゃないよ。ううん、きっと好きなんだと思う。だけどずっと一緒になんて、不可能なのよ」

「なんで、どうして！ わけを言うてくれないと納得できないよ！」
強い調子で、聡史君が尋ねてくる。

説明できたら、どれだけ楽だろう。わたしは中界で生まれた——
いわゆる死者だから、ここにいてはいけないのだと……。

「言えない」

「引っ越すの？」

「言えないわ」

「どこかへ行くの？」

「それも言えない」

「遠くへ、外国にでも行っちゃうの？」

「言えないのよ！ わかってよ！」

大声で聡史君を怒鳴りつけて、両手で自分の顔を塞ぐ。

溢れ出る涙はそれでも止まらず、手の隙間から流れ落ちていった。

「わかったよ、もう聞かない」

悔しさと悲しさを混合させた、苦渋の表情で、聡史君がぼやく。

「だけど、一つだけ教えてほしい」

「……なに？」

勇気を出して手をどけると、聡史君と目を合わせる。

「いつまでなら一緒にいられるの？」

聡史君から洩れた問いには、再び顔を隠すしかなかった。

「答えてくれよ。どうして黙ってるんだ！」

わたしの手を無理やりどけて、聡史君が睨みつけてくる。

わたしは涙声で、簡潔に結論を伝えた。

「来週の、月曜日まで」

信也君は火曜日まで生きるけれど、わたしは月曜日まで。火曜日

は正式に、信也君を死者として迎えに行かなくてはならない。

信也君が優美ちゃんを救えても、救えなくてもだ。

「来週の月曜日っていったら、今日を合わせてもあと三日じゃない

か！ せっかく出会えたのに、そんなのないよ！」

「ごめん、ごめんね」

謝るしかなかった。元々中界で生まれ育ったわたしに、決定権な

んてない。

聡史君は諦めたのか、それ以上何も言わなかった。

「もう、帰ろうか」

聡史君の申しでに、わたしは頷いた。

遊園地を出て、無料送迎バスに乗る。わたしも聡史君も、一言も喋らなかった。

来る時と同じ三十分が、一時間にも二時間にも感じられた。早く駅に着いてほしい。わたしの願いはそれだけだった。

駅でわたし達はバスを降り、わたしは無言のまま駅から去ろうとした。

背後から、聡史君の声が聞こえる。

「美利亞。明日はまだ、会えるんだよね？」

「えっ？」

振り返ると、無理やりに微笑んでいる聡史君。なぜだが、とても遠くに見えた。

「明日また、会えないかな？ こんな別れ方はしたくないんだ」

わたしは首を横に振った。先ほどのまでの幸せの苦しみは消えうせ、今ではどうしようもない絶望が、わたしの脳裏を執拗に追い詰めていた。

「もう、会わないほうがいいと思うんだ」

「ど、どうして？」

予想外の返答に、聡史君は驚きを隠せないようだ。歩み寄ろうとする聡史君を、手で制する。

「これ以上会うと、お互いに別れるのが辛くなるでしょ？ 別の相手を探さなくちゃいけないんだし」

「そんなの関係ない！ できる限り美利亞の側にいたい！ 明日も、明後日も、お別れの

直前まで、一緒にいたいんだ！」

聡史君は納得していなかったけれど、わたしにはもう限界だった。初めて受けた愛情、大好きな聡史君からの抱擁、そしてやるせない別れ——これ以上、執拗に襲ってくる胸の痛みに、耐えられる自信はなかった。

「さよなら！」

吐き捨てるように言い放ち、わたしは駅前から走り去った。

背後から聡史君が、渾身の力を込めて叫んでいる。

「明日の朝九時！　ここで待ってるから！　ずっと、ずっと待ってるから！」

『待ってなくていい！　もうわたしのことなんて早く忘れて！』

心の中で絶叫すると、再び涙が流れ出し、風に乗って飛び散っていく。

一度も振り返らず、わたしは信也君の家へと向かった。息は切れ、足は披露で震え始める。それでも無我夢中で走り続けた。

10月25日^a(4)

家の中へと飛び込んで、扉を勢いよく閉める。大きな衝突音が屋内へと響き、右の部屋からお母さんが姿を現した。

「ドアはゆっくり閉め……どうした？」

一度は叱ろうとしたものの、わたしの容貌に驚いて近寄ってくる。

「なんでもない……」

「なんでもないことないだろ？ 泣いてるのにはわけがあるはずだ。話してみないか？ いつだって母さんは、美利亜の味方だぞ？」

「ごめん、今は、放っておいて」

わたしは涙を袖で拭い、階段を上っていった。昨日までは普通だった階段も、一段一段が異常につらく、のしかかってくる。

「美利亜」

背後から声をかけられて、わたしは足を止めた。

「放っておいて……」

「そうじゃない。信也から美利亜に伝言を預かってるんだ。帰ったらすぐに吉沢総合病院へ来てくれってな」

ようやくそこで、わたしは本来の目的を思い出していた。優美ちゃんの生死を確認するために、早く帰ろうとしていたのだ。

「吉沢総合病院……ってことは、優美ちゃんの身になにかあったの！？」

「詳しくは知らないさ。信也も切羽詰ってたのか、ほとんど説明しなかったからな。ただ美利亜に来て欲しいと伝えてくれってな」

「そう、分かった……」

再び靴を履き、外へ出ようとする、

「そういえばお前のこと、呼び捨てにしてたぞ。お前から説教してやれ」

お母さんから、情報が追加される。わたしを姉さんと呼ぶことから忘れてたとなると、相当に焦っていたのだろう。

わたしは震える両足に鞭打って、吉沢総合病院へと向かった。また駅の側まで行くのには抵抗があったけれど、優美ちゃんの運命が気がかりだった。

幸いにも聡史君には遭わず、吉沢総合病院へとたどり着いた。ふらつきながら、受付の看護士に尋ねる。

「あの……」

「はい、どうなさいました？」

「鷹野信也って子、知りませんか？ その子に呼ばれてきたんですけど……」

「鷹野信也？ そんな名前の患者さん、いたかしら？」

看護士が何やら患者のリストのようなものを調べていると、背後から別の看護士が、耳打ちをした。

「鷹野信也ってさ、ほら、山倉優美って子と一緒に来た……」

「ああ、確か、そんな名前だったわね」

「分かりましたか？」

わたしが再び訪ねると、看護士さんは笑顔で答えてきた。

「ええ、三。六号室——山倉優美って子の病室にいると思うわ」

「まさかとは思いますが、そこって、霊安室じゃないですよね？」
おもむろに尋ねると、二人の看護士は顔を見合わせ、口に手をあてて小声で笑った。

「大丈夫よ。命に別状はないわ。もう意識も回復してると思うけど」
「そ、そうですか！ よかった……」

わたしは胸に手を当て、大きく息を吐いていた。わたしの行動は、無駄にはならなかったのだ。

誰一人——信也君でさえ、わたしのアシストには気づいていない。それでも、自分の行動に間違いはなかったと、確信できただけで心が安らいだ。

「ありがとうございます」

頭を下げてお礼を言ってから、三。六号室へと向かう。現界の地理には詳しくないけれど、病院の中ならお手の物だ。

三。六号室にたどり着くと、病室の表札に山倉優美と書かれてあった。どうやらここで間違いないらしい。

ノックをしようと、拳を握る——と、中から話し声が聞こえてきた。

「あのね。果歩ちゃんにも三村君にも、全部話すつもり。だけど、やっぱりわたしの一番は鷹野君なの」

「ありがとう。山倉にそこまで想ってもらえるのは嬉しいよ」

「うん。だから……ずっと側にいてくれないといやだからね？」

信也君もわたしと同じように、ずっと一緒にいてくれと言われている。

わたしは上手に聡史君を諭せず、悲しいお別れとなってしまうた。信也君ならなんと行って、優美ちゃんを納得させるのか、少し興味があつた。

扉に耳を澄ませる。そこから聞こえてきた信也君の言葉は、わたしの想像を絶するものだった。

「当たり前じゃないか。山倉が僕を必要としている限り、ずっと一緒にいるよ」

『ずっと一緒！？』

声に出さずに絶叫する。信也君の魂胆が、まったく理解できなかった。

「本当に？」

「嘘なんていわない。山倉さえよければ、僕の家に住んだっていいさ」

「えっ、いいの！？」

「もちろん。自宅にいたら心が休まらないでしょ？ 僕の家だったら狭いけど、母さんもいるし。ちよつと怖いけど、悪い人じゃないからさ」

「ありがとう、ありがとう鷹野君！」

優美ちゃんのお礼の声を最後に、室内から出入り口へと近づいてくる足音が一つ。

とつさに扉から離れると、予想通りに信也君が姿を現した。

10月25日^a(5)

その顔には目的を達成した充実感が、一転の曇りもない笑顔になって現れている。

わたしは無言で、信也君の側へと近づいていった。

「ミリアか……遅かったな」

信也君がわたしに気がつき、声をかけてくる。

「そんなことより、ちょっと話があるの」

「話？」

「いいからついてきて」

わたしは信也君の手を握ると、廊下を歩き始めた。

「どこ行くんだよ」

「いいから」

信也君を黙らせてから、黙々と廊下を進んでいく。吉沢総合病院を出ても、わたしたちは無言だった。

わたしは聞かなくてはならない。あの言葉の真意を。ずっと一緒にいるなんて不可能なのだから。

途中、わたしたちは公園の前に差し掛かった。聡史君がいじめられ、わたしとの出会いを果たした——あの公園だ。

先ほどまで子どもが遊んでいたのか、砂場には作りかけのお城が、自らの完成を心待ちにしているようだ。

ただ、すでに子ども達は帰ってしまったようで、今は誰もいない。別に目的地があったわけではなく、人気のない場所なら、どこでもよかった。

わたしは公園へと入っていくと、ベンチへと腰をかけた。信也君は立ったまま、自分の行動に疑問すら抱いていない。

「どうしたんだよ、ミリア」

「優美ちゃんを助けられたのは、さすが信也君といったところね。おめでとうと言っておくわ」

最初にそこだけは褒めてあげたかった。わたしの胸のつかえもとれたのだから。

もっとも、新たな胸のつかえも、信也君のせいで生まれたけれど。

「ああ、ありがとう……」

「問題はその後だよ。信也君、優美ちゃんになんて言った？」

「えっと……僕の家に住んでもいいって」

「その前よ！」

論点を理解していない信也君に、苛立ちが募る。まだ自分の失言に、気がついていないらしい。

「な、何をそんなに怒ってるんだよ？」

「いいから！」

信也君はふてぶてしく、口をへ字に曲げていた。それでも自分の言動を思い出したらしい。

「確か、ずっと一緒にいるよって」

「それよ！」

わたしは怒りに身を任せ、信也君の胸倉をつかんでいた。

「は、放せよミリア！」

すぐに抵抗してくる信也君。だけど、離すわけにはいかない。わたしの苦渋の選択を、あっさりと破棄した信也君から、答えを聞くまでは。

「信也君は来週の火曜日には死ぬのよ！ もう分かっているはずですよ！」

「とりあえず、落ち着けて！」

わたしの腕を力ずくで振り解き、睨みつけてくる信也君。涙が溢れそうなのをこらえつつ、さらに問い詰める。

「ずっと一緒になんて不可能なのよ！ どうしてあんなことを言ったの！」

「じゃあなにか？ 火曜日に死ぬから、ずっと一緒にいるなんて無理ですって、答えればよかったのか？ そうやって山倉を絶望に追

い込めっというのかよ？」

「そうじゃない、そうじゃないけど！ あんなふうになんて断言しなくてもよかった！ このままじゃ信也君が死んだら、優美ちゃんは信也君の後を追うかもしれない！」

「大丈夫だよ。吉沢や三村がなんとかしてくれる。僕がいなくなつて、山倉は……」

わたしは信也君の手を振り解いて、鼻先に指を突きつけてやった。信也君が怯みつつ、一歩後退する。

「じゃあ聞くけど、信也君が逆の立場になったら、平穩にやっていける自信があるの？ 愛する優美ちゃんを失っても、励ましてくれる友人がいれば、それで満足だっていうの？」

わたしが告げると、信也君の動きはあっさりと止まった。

ほんの少しの間だけ考え込んで、信也君は声を張り上げた。

「ぜ、絶対に自殺なんてさせない！」

わたしは啞然としてしまった。この期におよんで、まだ自分の非を認めようとしない。

「どうやって？」

「それは……今から考えるさ！」

無責任にもほどがある。わたしは思い切り信也君を突き飛ばした。無様に尻餅をついた信也君が、苦痛に顔をゆがませる。

「話にならないわ。やれるもんならやってみなさいよ！ もしも優美ちゃんが後を追ったら、信也君なんて地界行きなんだから！」

わたしはそのまま、公園から走り去った。

これ以上信也君と話すこともないし、話したくもなかった。

家に帰ったわたしは、わき目も振らずに自分の部屋へと飛び込んだ。布団を頭からかぶり、絶叫する。

「うわああああああ！」

あつという間に枕が、涙でびしょびしょに濡れていく。それでも気分が晴れなかった。

わたしが間違っていたのだろうか——自分の気持ちに嘘について

まで、聡史君の望みを断ったわたしが。

それとも、信也君が間違っているのだろうか——優美ちゃんを安心させるため、望んでいる答えを渡してあげる。たとえそれが、最終的には嘘になるとしても。

わたしたちは同じように、ずっと一緒にいたいと言われ、その言葉に対し、二人とも嘘をついた。

わたしは自分の気持ちに、信也君は三日後に襲ってくる自分の運命に。

だけど、二人には決定的な違いがある。信也君には満面の笑顔があり、わたしには気だるい苦しみしかない。

だとすれば、やはり間違っていたのはわたしなのか——。

「もう嫌だ！ 人を好きになんてなりたくない！ こんなに苦しい想いを味わうなら、人を好きになる必要なんてない！」

わたしは残りの三日間、家でおとなしく過ごそうと心に決め、眠りについた。

——眠ってしまえば、何も考えずに済む。

そんなわたしの希望的観測は、夢という世界であっさりと砕け散った。

夢の中でわたしは中界の人間ではなく、現界人として生まれていた。聡史君と出会い、告白され、わたしは何の迷いも無しに承諾していた。

そこに、瞳を不気味に覗かせた、カルバドスが現れる。中界の人間であるわたしを迎えに来たというのだ。

「違うの！ わたしは現界人なの！ 聡史君と一緒にいさせて！」

わたしの叫びもむなしく、二人の仲は無理やり引き裂かれた。

そこでわたしは目を覚ました。夢の内容を思い出し、苦笑——というよりも冷笑が自然と生まれてくる。

「夢の中でも、バッドエンドだなんて……最低だわ」

連れ去られるわたしの前で、号泣しながらわたしの名前を呼ぶ聡史君。そのようすを思い出し、わたしはまたベッドの上で泣き崩れ

た。

10月26日(1)

十月二十六日 日曜日

腫れぼつたいまぶたを上げて目を覚ます。時計の針は、朝九時を少し回っていた。

今ごろ聡史君は、律儀に駅前でわたしが来るのを待っているのだろう。

だけどわたしは、ベッドから起き上がる気すら、さらさらなかった。

外は快晴で、明るい光が差し込んでくるにもかかわらず、心はどんよりとした雨模様のまま、回復する気配すらなかった。

そんな時、突然わたしの部屋の扉がノックされた。お母さんか？それとも信也君か――。

どちらにせよ、わたしは返事をする気にはなれなかった。

たとえ火事だとドアを叩かれても、おいしそうな食事の匂いが部屋に広がってきても。

そして、エンマ様に出てこいと怒鳴られたとしてもだ。

本来ならわたしは信也君と毎日のように顔をあわせ、相談にのる義務がある。

だけど、顔を合わせると昨日の出来事を鮮明に思い出してしまいそうだった。そうなればまた口論になってしまうだろう。

そうでなくても、わたしの胸中は穏やかではいられない。信也君の相談を、冷静に聞ける状態ではないのだ。

ノックは一度きりで、二度目はなかった。その方がわたしもありがたかったけど。

寝返りをうつて、再び瞳を閉じる。できれば明後日まで、信也君と顔を合わさずに済ませたかった。

だけど目が覚めてしまったので、なかなか睡魔の恩恵をえられない。

それでもわたしは、ひたすらに時間が経つのを待ち続けていた。

10月26日(2)

次に目を覚ました時、時計は十三時を過ぎていた。さすがに昨日の夕食と今日の朝食を抜いているので、お腹が悲鳴を上げる。

信也君に遭わないよう願いつつ、階段を下りていく。食事をする部屋で、お母さんはテレビを見ていた。

「信也は？」

「ああ、優美ちゃんのお見舞いだよ」

「そっか……」

椅子に座ると、お母さんはサンドイッチを出してくれた。

「ほら、腹減ってるんだろ？」

「うん……」

出されたサンドイッチは、卵とハムのサンドイッチだった。口の中に入れると、柔らかい甘みとハムの塩加減が絡み合い、口の中へと広がっていく。

「何があつたかまでは、詳しく聞かないけどな。元気出せよ？」

サンドイッチを頬張りつつ、頷く。心配しなくても、中界に帰れば元の日常へと戻る。

そうすれば聡史君なんて、思い出さなくなる——そう自分に言い聞かせた。

サンドイッチをすべて胃の中へ収めて、わたしは席を立った。自室へ戻って、もう一眠りするためだ。

考えてみれば、中界に戻ればすぐにまた仕事が始まるのだ。こんなに情眠をむさばれるチャンスはそうそうない。

ちょうどその時、インターホンの音が鳴り響いた。

「はぁーい！」

お母さんが玄関へと向かう。わたしは自室へと戻ろうと、廊下へ出た。

「美利亚！」

わたしを呼ぶ声がこだまする。だけど、それはお母さんの声ではなかった。

「聡史君……」

インターホンを押した張本人が、玄関でわたしを悩ましげに見つめている。背中には昨日は持っていなかったリュックサック。運悪く、聡史君と鉢合わせをしてしまったのだ。

「何しに来たの？」

「美利亞に会いに来たんだ。あんな別れ方で終わるなんて、嫌だったから」

「言っただけだよ。もう会わないって。会いたくないのよ」

「だけど……後悔はしなくなかったんだ。逃げるのは簡単だけど、逃げて何も変わらない。それを教えてくれたのは美利亞だろ？」

何も言えずに、わたしは口をつぐむ。

と、お母さんがわたしの頭を、思い切り押さえつけてきた。

「美利亞。こんなに熱心に想ってくれる人なんて、そうそういないぞ？ この子の何が不満なんだ？」

事情も知らずに、言いたいことを述べる。

「そんなこと……分かってるよ」

わたしだつて、本当なら喜んで聡史君と一緒にいる。喜んで迎え入れて、一緒に雑談でもしたい——信也君と優美ちゃんのように。

「とにかく、もう一度きちんと話をするんだな。最初からうまくいくような恋愛じゃ、先は見えてるよ」

無理やりに聡史君を家に上げて、わたしと一緒に階段の上へと押し上げる。

仕方なくわたしは、自分の部屋へと聡史君を招き入れた。目を合わさないよう、ベッドへと腰をかける。

「あの、美利亞」

「なに？」

わざとぶっきらぼうに、聞き返す。それでも聡史君は、めげずに話を続けてきた。

「美利亞とお別れしなきゃいけないのは、分かったよ。言えないなら理由も聞かない」

「それで？」

「だから、最後に、美利亞の肖像画を書きたいんだ」

「わたしの……肖像画？」

今日初めて、わたしは聡史君と目を合わせた。聡史君はリュックサックから、スケッチブックと鉛筆を取り出している。

「美利亞の顔を、残しておきたいんだ。会えなくなっても、美利亞の顔を忘れずに済むように」

聡史君の申し出に、瞳が潤むのが分かる。

わたしの苛立っていた理由——それは、わたしの現界での生活が、意味を持たなかったから。

だけど今、現界で生きた意味がようやく生まれた気がした。聡史君の手元に残る肖像画は、言い換えればわたしと聡史君が出会った証になる。

中界へと戻っても、聡史君の心の中にわたしが残ってくれる。

長い期間を要するけど、いつかわたし達はまた会える。肖像画が、そのバトンの役目を果たしてくれる。

わたしは聡史君の胸の中へと、埋もれていた。聡史君の黒い服が、涙で色濃く染まっていく。

「ごめんね、聡史君。本当にごめんね」

泣きじゃくるわたしを、聡史君は優しく撫でてくれた。全身から余計な力が抜ける。

「じゃあ、モデルになってくれる？」

「うん、喜んで」

「じゃあポーズをとって」

聡史君は簡単に言うけれど、とっさにポーズなんてとれない。

わたしはとりあえず座ったまま、膝の上に手を置き、聡史君に体を向けた。

「表情が硬いかな？ ほら、笑って！」

ぎこちない笑顔を聡史君に送ると、どうやら納得してくれたようだ。鉛筆を動かし描き始める。

「できた！」

「えっ、もうできたの？」

「ほら、これ！」

その絵は、『へ』で描かれた眉毛に『の』で描かれた目、そして『も』と描かれた鼻。

その下にまた『へ』の文字。輪郭は右側が途中で止まってしまっている。

「な、なにこれ？」

「これはへのへのもへじって言うんだ。美利亞にそっくりでしょ！」

「もう、聡史君！ ふざけないで！」

軽く頬を膨らます。聡史君は笑いながらも、素直に謝ってきた。

「ハハッ、ごめんごめん！ でも、今の表情は良かったよ！」

「えっ？」

「さっきまで表情が硬かったから、ちょっと笑わせようっと思ってさ」

優しく微笑む聡史君は、わたしの精神に快い安らぎを運んでくれた。

自然とわたしの口からも、笑みがこぼれていく。

「それだよ、その表情！ そのまま動かない

でね！」

再び鉛筆を動かし始める聡史君の期待に、必死で応える。

鉛筆を目の前に立てたと思えば、スケッチブックへとはしらせる。いらだち、悲鳴をあげていた心は、今では完全に落ち着きを取り戻していた。

感謝を繰り返しながら、身動きせず聡史君を見守り続けた。

先ほどまでとは打って変わり、真剣な表情で描き続ける。

二時間後、疲れを吐き出すような大きなため息とともに、聡史君は鉛筆を置いた。

「ふう、できたよ！」

「お疲れ様！ ちょっとみせて」

仕上がった自分の肖像画へと目を通す。

目元に愁いを帯びつつも、微笑んでいるわたしがそこにはいた。まるで、鏡を覗いているような——そんな感覚に捕らわれそうだった。

「う、うまい……」

「僕ね、将来は漫画家になって、小さい子供に夢を与えたいって、思ってるんだ」

「すごいすごい。びっくりしたよ！」

興奮してしまったわたしは、聡史君の手元からスケッチブックをくすねた。

それでも聡史君は、和やかな微笑を浮かべている。

「それじゃあ、その絵は美利亜にあげるよ」

「えっ？ でも……」

「どこに行っても、この絵だけは持って行ってほしい。たまに眺めることがあったら、その時は僕を思い出してくれないかな？」

聡史君が頬を染め、恥ずかしそうに顔を伏せた。

「うん、わかったよ」

「たとえ離れていても、心は一緒だよ」

そう言ってくれた聡史君の笑顔に、身の毛がよだつ。涙が溢れてきそうなのを、ぐっとこらえるのに必死だった。

聡史君はスケッチブックから絵を切り離すと、筒状に丸めて渡してくれた。

中界にこの絵を持って帰れるかどうかは、定かではなかった。

だけど、エンマ様なら絵の一枚や二枚、持って帰る方法を知っていてもおかしくない。

「でも、聡史君の分は？」

「そこでも願いがあるんだけど」

聡史君は真剣な表情を取り戻す。まるでわたしの瞳の奥を突き刺

すように。

「明日の夕方、もう一度だけ美利亜と会いたいんだ」

「えっ？ 明日？」

「美利亜と初めて会ったあの公園で、美利亜を描きたい」

「あの……」

「明日で最後なんだよね？ 十六時に公園で待つてるから」

わたしが返答を渋っていると、聡史君は立ち上がった。そのまま扉に手をかける。

「ずっと、待つてるから！」

返事を聞くのが怖かったのか、聡史君は逃げるように、部屋から飛び出していった。

階段を下りていく足音に続いて、玄関の扉が開閉する音が耳に入ってくる。

わたしは改めて、聡史君の絵を広げた。どうすればいいか絵に問いかけても、返事はしてくれない。

胸中ではもちろん、会いたい感情で埋めつくされている。

だけど、会ってしまったえば絶対に別れるのが辛くなる。

タイムリミットまでずっと、聡史君から離れられないかもしれない。いい。

それだけならまだしも、自分の正体を明かしてしまい、信也君の計画をぶち壊しにしてしまう可能性だってある。

枕に顔を押し付けて、わたしはしばらく動かなかった。異様なまでに静かな室内が、逆に落ち着かなかった。

会いたいけど会いたくない、会いたくないけど会いたい。そんな矛盾した感情が、わたしの中で渦巻いていった。

10月26日(3)

いつの間にやら眠っていたらしく、気がつくとき窓の外が暗くなっていた。枕に染み込んだ涙の痕が、冷たく頬を撫でる。

部屋を出て、階段を下りてくると、ちょうど信也君が家に帰って来たところだった。なにやらお母さんと会話をしているらしい。

「どうだった？」

「うん、大分元気になってるみたいだよ。もう大丈夫じゃないかな？」

靴を脱ぎつつ、笑顔で答えている。

わたしがこんなにも悩んでいるのに——そう思うと、何だか急に腹立たしくなった。

「本当に大丈夫かしら？」

わたしが声をかけると、信也君は一度動きを止めてから、わたしを見上げてきた。

「姉さん……」

「優美ちゃんは、信也君が側にいるから元気なだけ。あなたが側にいなくなったら……」

「そ、そんなわけないだろ!？」

信也君は家に入ると、即座にわたしの口を塞いだ。そのまま階段上へと連行する。

お母さんはわたし達の言動に、疑惑の念を抱いていたようだった。信也君の部屋へと押し込まれ、ようやくわたしは解放された。慌てて信也君が部屋の扉を閉める。

「全部ばれたらどうするつもりだ!」

信也君の怒りはもっともだ。わたしは素直に謝ると、わけを簡単に説明した。

「ごめん。ちょっとしたやつあたりなの」

「やつあたり? どうしてやつあたりなんかする必要があるんだ?」

その問いに、わたしは答えなかった。正確には答えられなかった。信也君のサポートに来たわたしが、逆に信也君からサポートされるわけにはいかない。

「明日から、修学旅行だよね？」

代わりに尋ねると、信也君はそれ以上何も聞いてこなかった。

「ああ……」

「優美ちゃんも？」

「残念ながらね。でも絶対に山倉を死なせはしない。もちろん後を追わせたりもしない」

どうやって阻止するかは分からなくても、信也君の気持ちは痛いほど分かった。わたしを訪ねてきた聡史君と、同じ気持ちだろう。

「信也君、なんでそんなに落ち着いていられるの？ もうすぐ、好きな人とお別れだよ？ 次はいつ会えるか分からない。それなのに、どうして？」

意に反して、わたしは聞いてしまった。これでは自分から悩みを暴露しているようなものだ。

だけど、信也君はそこには触れず、真剣にわたしの問いへの答えを考え、導き出した。

「ミリア、前に言ってたろ？ 今は自分がやるべきことをやれって。多分そのおかげじゃないかな？」

「自分がやるべきこと？ そんなこと、言っただけ？」

自分では覚えていなかった。だけど、信也君の心には強く残ったらしい。

「言っただけ。だから僕は、自分がやるべきことを全部やってる。それで山倉を助けられなければ仕方がないさ。それに『あなたは明後日死にます』って、急に言われたんなら落ち着いていられないけど、明後日死ぬのは、前から決まっていたからね。だから落ち着いてられるんだと思う。本当のところは自分でも分かんないけどね！」

そう言っただけで信也君は笑い飛ばす。わたしは笑う気になれなかったけど、ただ、サポートとしての役割を十分に果たせていた自分を、

褒めてあげたかった。

そのおかげで、今現在のわたし自身も、救われたのだから。

「なあ、何があったんだ？ 最近のミリア、ちよっとおかしいぞ？」

「なんでもない。なんでもないの」

わたしは信也君を押しつけて、自室へと帰ろうとした。

「待てよミリア！」

背後からの信也君の声に、振り返る。

「信也君、頑張ってるね。応援してるから。絶対に優美ちゃんを救わなきゃダメだよ？」

それだけ言うのが、やっとだった。これから先は信也君の力にならない。

自室へと戻ると、すぐにノックの音が聞こえてくる。きっと信也君のものだろう。

わたしはそれを無視して、ベッドへと腰掛けた。

「自分がやるべきことをやる……か」

自分で言った言葉のくせに、さっきまでのわたしからは、消えうせていた考えだった。

今のわたしがやるべきこと。それは後悔をしないために、聡史君に会いに行くことだ。

何もしないで過ごすというのは一番、消極的な考えだ。ただ逃げているだけで、何も変わらない。

逃げる行為は、必ず後悔の元になる。それを教えてくれたのは聡史君だ。

もともと、それも最初はわたしが、聡史君へと伝えたのだけれど。わたしは愛情という初めての経験で、自分を見失っていたのかもしれない。

「行こう！ どうなってもいい。何もしないで後悔はしたくない！」
信也君と聡史君、二人のおかげでわたしは自分の意思を取り戻し、決断できた。

やるべきことをやり、後悔しないですむように全力を尽くす。中

界に帰っても、この一週間を振り返るように。

——いつか聡史君と、明日という日を笑顔で語り合えるように。

10月27日(1)

十月二十七日 月曜日

今日でわたしの、現界での生活は終わる。明日は信也君を迎えに行かなければならない。

サーカス会場で起こる爆発事故。悲惨な事件から優美ちゃんを救えるかは、信也君の腕にかかっている。そして、それが終われば信也君は死ぬのだから。

目を覚ましたのは昼過ぎだった。信也君はすでに修学旅行へと向かっただろう。

わたしは昼食をとるために、階段を下りていった。するとなぜか、一階全体に嗅ぎ慣れた匂いが充満していた。

「これって……お酒だよね？」

一部屋だけならまだしも、一階全体に広がっているとすれば、相当な量のお酒が動いたに違いない。

わたしは食事をする部屋を覗いてみた。踏み出した足に何かがぶつかり、床を転がっていく。

それは、ブランデーの空き瓶だった。よく見るとビール、ワイン、日本酒など——ありとあらゆるお酒のビンが、あちらこちらに散らばっている。

「信也君が……まさかね。じゃあ……」

眩きながら周囲を見渡すと、台所の隅から人間の足が見えた。どうやら床に倒れているらしい。

「お母さん？」

近寄りながら、尋ねる。倒れている人物の全貌が明らかになると、やはりその人物はお母さんだった。

シャツと短パンという女性らしからぬ格好と、手に握られた一升瓶。顔を真っ赤にして薄目を開けて、酒臭い声を出す。

「うーん、なんだあ、ミリアかあ。今日も遅起きだなあ」

遅起きとは、ようするに早起きの反対という意味だろう。

「ちよつと、大丈夫？」

「なんだあ、お前。母親を心配できるほど、高い身分になったのかあ？」

「いや、身分とかじゃなくて」

「だったら、黙ってる！」

怒鳴りつけてから、手に持った一升瓶を口元へ運ぶ。

「どう考えても飲みすぎだよ、お母さん。ほら、しっかりして」

「しっかりしてますよあ、わたしはいつだってしっかりしてますよおだ！」

お母さんの体を起こして、壁へと寄りかからせる。それからコップに水を汲んで、お母さんへと渡した。

その水を一息で飲み干し、大きく息を漏らす。酒の強烈な匂いが、わたしを襲った。

「わうつ！」

いくら酒好きのわたしでも、思わず鼻をつまんでしまった。匂いだけで酔ってしまいそうな、まるで瘴気だった。

「美利亞！ たまには肩でも揉め！」

「えっ？」

「えっ？ じゃないだろ！ 母親を敬う気持ちが、お前には足りないんだよ！」

仕方なくわたしは、お母さんの肩を揉んであげた。時計を見ても、まだ約束の時間には早い。

口やかましかったお母さんとも、今日でお別れなのだ。感謝の気持ちを肩揉みで表すのも、悪くはない。

「あのさ、お母さん」

肩を揉みながら、わたしはお母さんに尋ねた。

「んっ？ なんだあ？」

「わたしがいなくなったら、寂しい？」

言った後で、後悔する。愚問であるのは明らかだった。

わたしが中界に帰れば、お母さんの記憶は元に戻されるだろう。実際には、美利亞という娘はいなかった。元々いないのだから、寂しい、寂しくない以前の問題だ。

だけど、お母さんは極端に顔を強張らせていた。わたしの胸元を掴み、壁へと叩きつける。

「いだっ！」

うめき声を発したわたしにもかまわず、お母さんはまくし立てた。「バカやろう！　なんでお前までそういうこというんだよお！　悲しいに決まってるだろおが！」

「そ、そうだよ。悲しいよね」

言いながら、わたしの手を握り締める

悲しいに決まっている——その言葉はすごく嬉しかった。心配してくれて、一緒になって悩んでくれるお母さんの気持ち、ちくりと胸を刺す。

「ごめんなさい。変なこと言っちゃって」

謝りながら、お母さんの手をゆっくりと外す。これ以上ここにいては、何か大きな失敗をしそうな気がした。

いったん出直そうと、その場を離れようとするも、背中からお母さんが、覆いかぶさってきた。

「お、重いよ、お母さん」

「なあ、美利亞」

「な、なに？」

「お前達、どこかに行っちゃうのか？」

「えっと、その……」

返事を先延ばしにしつつ、お母さんの束縛から逃げ出す。二、三歩間合いを取ると、お母さんはその場から動かなかった。

「なあ、わたしを置いてどこかに行っちゃうのか？」

「い、行かないよ」

「嘘だ！」

「嘘じゃないって」

「だったらなんでいなくなったらとか、そんな話をすんだよ！」

お母さんは大きく拳を振り上げ、わたしに向かって突進してきた。
「ちよつ、お母さん、やめて！」

殴られる！　と思つて目をつぶつた瞬間、わたしを襲つたのは痛みではなかった。

腕を通して伝わってきたのは、力強さと温もり——それは抱擁だった。

「お、お母さん？」

お母さんの目から、大粒の涙が幾重にもこぼれていく。

その涙は、わたしの肩にと落下し、大きな痕跡を残していった。

「どこにも、どこにも行かないでくれ。わたしを一人にしないでくれ！」

「お母さん……」

「もう一人は嫌なんだ、誰も失いたくないんだよ！」

泣きじやくるお母さんの姿は弱々しく、まるで迷子の子どものように震えていた。

普段のお母さんのりりしさからは、まず想像できない。

「お前たちはわたしの希望なんだ。お前たちがいたからどうにか頑張れたんだ。頼む、どこにも行かないでくれ。お願いだよ！」

わたしは目をつむると、お母さんの肩を軽く叩き、微笑んでみせた。

「大丈夫だよ。どこにもいかない。行くわけないじゃない」

ふと、優美ちゃん伝えた信也君の嘘が、頭をよぎる。あの時の信也君の気持ち、ようやく理解できた。

わたしが聡史君に事実を告げたのは、聡史君を想っていたからじゃない。聡史君の愛情が苦しかったからだ。

だから逃げ出した。叶うはずのない巨大な愛情に、押しつぶされるのを恐れて、全力で逃げ出した。

信也君は違う。たとえ未来は決まっていようとも、優美ちゃんからの愛情へと勇敢に立ち向かった。

最終的には嘘になるとしても、優美ちゃんには必要な言葉だったから。

今ならわかる。お母さんの愛情を受け、逃げることをやめた今なら。

「本当か！ 本当だな！」

「当たり前じゃない。どうしてわたしたちがどこかに行っちゃうのよ」

聞き返すと、お母さんはばつが悪そうにうつむいてしまった。

少しの沈黙が流れ、お母さんがゆっくりと口を開く。

「いつもお前たちを叱ってばかりで、嫌いなんじゃないか？ もう一緒に生活するのが嫌なんじゃないかって……」

「そんなわけないよ。お母さんはわたし達を心配してくれてるんだもん。逆に感謝しなくちゃ。それに」

「それに、なんだ？」

満面の笑みで、お母さんへと告白する。

「わたし、お母さんのこと大好きだもん！」

「ほ、本当か！」

「嘘なんて言わないよ」

「嘘じゃないなら、もう一回言ってくれ！」

「何度だって言ってあげるよ。お母さん大好き、大好きだよ！」

これは、建て前でも、嘘でもなくわたしの本心だった。

たった一週間だけのお母さんでも、本当の家族のように、わたしの行動に一喜一憂してくれた。言葉だけでは足りないくらいだ。

「ありがとう、ありがとう！」

お母さんはわたしの胸に顔をこすりつけ、嗚咽まじりの涙を流し続ける。

数分後、泣き止んだお母さんは、涙を拭いながら力なく微笑んでいた。

「なあ、美利亞。頼みがある」

「なあに？」

「今日は一日、一緒にいてくれないか？」

「えっ!？」

突然の申し出に、口をつむぐ。もちろんそうしてあげたいのは山々だけど、わたしは聡史君に会いに行く約束がある。

「いや、なのか？」

「違う、違うよ! ただ、夕方から用事があるから」

「あの、男の子か？」

わたしが無言でうなずくと、お母さんは小さく息を漏らした。

「しかたないな。じゃあ約束してくれ」

「約束？」

「遅くなってもいいから、無事に帰ってきてくれ。元気な笑顔でな」
頭を撫でてくるお母さんに、わたしは力強く頷いた。

「うん、わかった。約束は守るって言ったもんね!」

「ああ、わたしの娘なら当然だ!」

お互いに抱きしめていると、お母さんの鼻から安らかな寝息が漏れ始めた。

「お母さん。わたしにとって、お母さんは一人だからね。約束、絶対に守るから」

お母さんをソファへと運び、自分の部屋から持ってきた布団を掛ける。散らばった酒瓶を一箇所に集めて、軽く掃除をした。

あとは部屋のベッドに腰を掛けて、時間が来るのをひたすらに待つ。

最高の一日として、胸に刻み込める日にするんだ——そう、自分に言い聞かせながら。

10月27日(2)

「よし、行こう」

十五時三十分を時計が指した頃、わたしは勢いよく立ち上がった。一階に降りて、お母さんのようすを伺う。まだお母さんは、深い眠りの中だ。

「行ってくるよ。お母さん」

そう呟いてから、玄関から外へと出た。

青く晴れわたった空に、わたがしのような白い雲。これから始まる二人の時間に、雨の入り込む可能性はなさそうだ。

わたしは地面を強く蹴って、公園へと駆け抜けた。まだ約束の時間よりは早いけれど、聡史君は待っている。そんな予感がした。

「美利亞！」

公園に入ると、わたしが声をかけるよりも早く、聡史君が声をかけてきた。

予想通り、聡史君はすでにいた。ベンチに座って、スケッチブックと鉛筆を早々に準備している。

「ごめん、待った？」

「ううん、今さっき来たところだよ」

近寄っていくと、聡史君は立ち上がり、わたしの手を握り締めた。来てくれてありがとう。嬉しいよ」

「もちろんですよ。聡史君の頼みだもんね」

ウインクしてみせると、聡史君は頬をふくらませた。

「昨日は来てくれなかったじゃないか」

「それはそれ、これはこれよ」

聡史君が先に笑い出し、わたしも口に手を当てて一緒に笑う。

「本当に……ありがとう」

もう一度お礼を言ってから、スケッチブックを握りなおす。

「じゃあ、そこのベンチに座って！」

「うん」

聡史君に言われるままに座り、微笑んでみせる。瞳が熱くなつていくのを、我慢しながら――。

聡史君は時折唸り声を上げながら、鉛筆をスケッチブックへと走らせていった。二人に会話はなくとも、胸は弾んでいた。

この絵が完成すれば、聡史君ともお別れになるだろう。

それでも、わたしに後悔はなかった。こうして笑顔で分かり合えたのだから。

昨日と同じ二時間が経過して、辺りが夕焼けに包まれていく。

それでも聡史君の手は、止まらなかった。それだけ真剣に描いてくれているのだろう。

時が重なるにつれ、幸せが無限に蓄積されていく――そんな感覚だった。

だけど、そんな静寂の時間を破る、とげとげしい声が聞こえてきた。

「ん？ 聡史じゃねえか」

招かれざる客を、わたしと聡史君が同時に捕らえる。

初めて聡史君と出会った時に、聡史君を脅して金を巻き上げようとしていた連中だ。

「んっ？ この間のかわいい姉ちゃんもいるじゃねえか。やっぱり幽霊なんていないって言っただろ？」

「お前だつて逃げたくせに、よく言っぜ」

醜い争いを始める三人を、横目で伺う。嫌な予感に身をすくませていると、三人はゆっくりと、半笑いでわたし達に近づいてきた。

「おっ、肖像画か？ なかなかうまいじゃないか」

「お前にこんな才能があったとはな。初めて知ったぜ」

せせら笑う三人に聡史君は、

「どうも……」

形だけのお礼を述べて、尚も描き続けた。

「せっかくだから、俺たちも描いてくれよ」

「おお、面白そうだな」

乗り気の三人に、聡史君の答えは当然ノーだった。

「悪いけど、いま忙しいんだ。また今度にしてくれる？」

平然と言つてのける聡史君。以前いじめられていた光景が、嘘のようだった。

だけど三人にとっては、その態度が気に食わない。

一人が突然に、聡史君からスケッチブックを取り上げる。そして遠くへ向かつて放り投げてしまった。

「なにするんだ！」

当然のごとく食つて掛かる聡史君に、平然と答える。

「いや、忙しいつて言つたからさ。肖像画なんて描いてる暇ないんじゃないかと思つたんだよ。悪気はなかつたんだ」

「そうそう、悪気はなかつたんだよな」

三人が三人、腹を抱えて笑い出した。聡史君の歯軋りが、わたしにまで聞こえてくる。

もちろん、わたしだって黙つていられるわけがなかった。

「ちよつと、いい加減にしないよ！」

ベンチから立ち上がったわたしは、力いっぱいビンタを叩きつけた。

だけど、相手は子どもとはいえ男の子。ビクともせずに、わたしを睨みつけてくる。

「調子に乗つてんじゃねえぞ、このアマ！」

今度は相手の攻撃だった。拳を頬に叩きつけられ、わたしは声も出せずに、背中から地面へと倒れた。

「美利亜！」

慌てた聡史君が、倒れたわたしを抱き起こす。

殴られた頬に響く、痺れるような痛み。

口の中に広がる、血液の味。

わたしでは到底敵わない、そう思い知らされた一撃だった。

「さあ、聡史。どうすんだ？ その子を守る騎士にでもなるか？」

「もちろん逃げてもいいぜ？　いつもみたいにな。その後は、俺たちがこの姉ちゃんの相手をしてやるさ」

聡史君がわたしの前に立ちふさがる。

「ここは僕が食い止めるから、美利亜だけでも逃げて」

小声で、聡史君がわたしに告げる。

「だけどわたしは、即座に拒否した。」

「無理だよ。聡史君を残して逃げるなんて」

確かにわたし一人なら、中界の姿へと戻って逃げる方法もある。

「だけど、残った聡史君はどうなるだろう。考えただけで、身震いに襲われていた。」

「だけど、このままじゃ二人とも……美利亜だって、何をされるかわからないんだぞ？」

「それでもいい。聡史君と一緒になら……最後のお別れがこんな形なんて、絶対に嫌だ」

聡史君の背中に抱きついて、わたしは離れなかった。離れたくなかった。

「美利亜……」

「今日が最後だもん。大好きな聡史君と一緒にいられる、最後の日だもん」

わたしは目を閉じて、聡史君の背中に顔を押し付けた。

「なに、いちゃいちゃしてんだ？」

そんな声が聞こえたと思うと、わたしの体は吹き飛んでいた。

正確には聡史君の体が殴られた衝撃で、体を掴んでいたわたしも一緒になって飛んだらしかった。

顔を上げると、聡史君の口元から、赤い液体が流れている。

「聡史君！」

「大丈夫、大丈夫だよ。これくらい」

わたしを押しつけて、聡史君は颯爽と立ち上がった。だけど、小さく体が震えている。

「無理しないで、寝てた方がいいんじゃないか？」

相変わらずにやけたままの男に、今度は聡史君から殴りかかった。だけど、その一撃もあっさり止められてしまう。

「パンチってのは、こうやるんだよ！」

言いながら放たれたそれは、まるで金槌で殴られたような威力だった。先ほどよりも遠くまで吹き飛ばされた聡史君の体は、小刻みに痙攣している。

「聡史君！」

駆け寄ろうとしたわたしの腕を、殴った男とは別の男が掴む。

「へへっ、あんな弱い奴は放っておいて、俺たちと遊ぼうよ」

「いや、放して！」

「俺たちと付き合ってくれるっていうなら、聡史を見逃してやってもいいぜ？」

そう言われて、抵抗を止める。大人しくしていれば、これ以上聡史君は殴られない。

たとえどんな目に遭おうとも、殴られ続ける聡史君の姿を見せられるよりはましだ。

「どうすんだ？ 俺たちはどっちでもいいんだぜ？」

悪魔の囁きに、わたしは無言で頷いた。悔し涙が溢れて止まらなかった。

「だよ。よかったな、聡史」

倒れたままの聡史君を見下ろし、男が吐き捨てる。だけど、それで話は終わらなかった。

「待、て……」

ゆっくりと、聡史君が地面に手をつける。

懸命に起き上がると、口から何かを吐き出した。

それは、血まみれになった歯だった。先ほど殴られたせいで、折れたのだろっ。

「美利亜は、渡さない……」

「へえ、いい度胸じゃねえか」

指の関節を鳴らしつつ、男は聡史君の前に立った。数秒後には、

再び聡史君の体は地面に転がっている——それは誰の目にも明らかだった。

「聡史君！ もういいの！ 早く病院へ行つて！」

「美利亞、今、助ける……」

歩み寄ってくる聡史君に、男のパンチが再び唸りを上げる。

鈍い音がする——わたしの予感、幸運にも外れていた。

紙一重で聡史君は、男のパンチを避けた。そして脇をすり抜け、力強く一歩踏み込む。

狙いはわたしの腕を掴んでいる男だった。

「うああああ！」

拳に全体重を乗せて、手を掴んでいる男の頬を殴りつける。またも吹き飛びそうになったわたしを、今度は聡史君が掴んでいた。

「聡史君！」

抱きつくわたしを引きずりつつ、聡史君はベンチのそばまで歩いていった。そこでわたしを下にして、地面へと倒れる。

「さ、聡史君！？」

「美利亞、少しだけ、我慢してね」

聡史君はわたしを下にしたまま、左腕をベンチの脚へと絡ませた。右腕はわたしを抱えたまま、動こうとしない。

「へっ、それで守ってるつもりか？」

言われてわたしは、ようやく聡史君の目論見に気がついていた。

聡史君はわたしを渡さないために、身を挺してわたしをかばっているのだ。ベンチに腕を絡ませたのも、持ち上げられないようにするため。

「聡史の分際で……生意気なんだよ！」

聡史君が殴った男が、容赦なく仕返しを始める。他の二人もそれに続き、あつという間に聡史君は傷だらけになっていった。

「いつまで持つかなあ、聡史」

まるで飽きたおもちゃでも扱うように、聡史君をひたすらに痛め続ける。

単に殴るだけでなく、蹴ったり踏み潰したり——もはやなんでもありだ。

「もういいから、やめてよ聡史君！」

大粒の涙が、止め処なく零れ落ちていく。

わたしにはそれを拭うことすら、許されなかった。

「わたしにそんな価値なんてない！ 聡史君が身を挺してまで、守る価値なんてないんだから！」

絶叫すると、聡史君が顔を上げる。その顔は迷いのない、すがすがしい笑みに包まれていた。

「僕にできることを、やりたいようにやってるだけだよ。後悔はしたくないから……」

それだけ言うとなわたしの頭を抱え、再び身動き一つしなくなった。「聡史君お願い、もう離していいから。あんたたちも、もう気がすんだでしょ！ これ以上聡史君を痛めつけないで！」

わたしの叫喚も、暴行の音でかき消されていく。

聡史君が殴られる音と、型のはずれた無邪気な笑い声だ。

叫ぶだけで何もできないわたしは、自分の無力さを呪いながら、ひたすらに涙を流し続けた。

聡史君の体を通じて、わたしに伝わってくる衝撃が、ようやく収まる。

それはある声がかきつけた。

「こ、こら、何をやっているの！ け、警察呼ぶわよ！」

公園の前を偶然に通りがかった、見知らぬ女性が、小さな声を懸命に張り上げていた。

「やばい、逃げるぞ！ 捕まって学校や親に連絡されたらたまないからな！」

三人は慌てて、公園から逃げ出していた。

「だ、だいじょうぶですか？」

心配そうに声をかけてくる女性に、わたしは泣きながら絶叫した。

「聡史君、聡史君が！」

「ほ、本当にひどい怪我ね。えっと、すぐに救急車を呼んでくるわ！」

女性はいい残すと、足早に公園から去って行ってしまった。公園にはわたしと聡史君だけが残され、急激に静かな空間へと戻っていった。

「聡史君！ あいつらもう行ったよ！ もう大丈夫だから！」

だけど、聡史君から反応がなかった。ぐったりとしたまま、痙攣すらしていなかった。

裂傷や打撲で体中を包まれていて、傷がついていない場所を探すほうが難しそうだ。

「聡史君！ 聡史君ってば！」

手を握りつつ、何度も名前を呼ぶ。すると聡史君はうつすらとまぶたを上げて、力なく微笑んだ。

「美利……だ、じょぶ？」

全身に広がる傷よりも、わたしを心配してくれる聡史君。わたしは鼻をすすりながら、頷いた。

「待ってて、また傷口を拭いてあげる！」

初めて会った時と同じハンカチを、同じように濡らす。

違うのは、聡史君の傷が尋常じゃないところだ。ハンカチで拭いたぐらいで、どこかなるようなものではない。

「聡史君、すぐ救急車が来るから、ちょっとだけ我慢してね！」

ゆっくりと頷く聡史君。だけど、さっきの女性が呼んだはずの救急車は、一向に現れる気配をみせない。

「美利亜……」

聡史君が、わたしに顔を向ける。だけど視点が定まっていなかった、わたしと視線が交わらない。

「ぼくは、もうダメかもしれない」

「ば、馬鹿なこと言わないで！ ダメって何よ、死んじゃうってこと！？」

「体が、思うように動かないんだ……」

諦めかけている聡史君を、わたしは力いっぱい否定した。

「そんなの関係ない！ 漫画を描いて、子ども達に夢を与えるんですよ！ だったらまだ死んじゃダメ！」

傷だらけの聡史君を胸に引き寄せ、思い切り抱きしめる。

わずかに動く腕をわたしにまわし、逆に抱きしめ返してきた。

「そうだったね。こんなところで、死んじゃダメだよね」

「そうだよ、絶対ダメだよ！」

再びボロボロと、わたしの目から涙が溢れ出る。もう止まらないし、止める気もない。

「絶対に死なないよ、死ぬもんか……」

「その意気だよ。絶対にあきらめないで」

聡史君と同時に小さくうなずく。

だけど、言葉とは裏腹に、聡史君の体から次第に力が抜けていった。

「聡史君！」

「ちよつと疲れちゃった。少し休むよ」

微弱な声を最後に、聡史君は身動き一つとらなくなった。

聡史君の生きている証は、わずかに動く心臓だけだ。それも心なしか、弱まっている気がする。

感覚では、すでに数時間が経過している。にもかかわらず、救急車の高鳴るサイレンは未だに聞こえてこない。

先ほどの女性が本当に救急車を呼んでくれたのか、不安になってくる。

「最後の手段しか、ないよね……」

脳裏に聡史君を助ける、唯一の方法が浮かぶ。手段を選んではいられなかった。

「聡史君、少し待っててね！」

聡史君の頭を軽く撫でてから、わたしは大きく深呼吸をする。

そして、空に向かって絶叫した。

「エンマ様ああ！」

10月27日(3)

光に包まれる体。聡史君の姿が目の前から消え、替わりに現れたのはエンマ様の部屋。

最後に来てから二、三日しか経っていないのに、何ヶ月ぶりかに来たような――そんな錯覚に捕らわれた。

「どうしたミリア。お前が帰ってくるにはまだ早いが。それとも、あれほど嫌がっていた夜勤を希望しているのか？」

上方から冗談交じりの、エンマ様の声。

もちろんわたしに、笑っている余裕なんてなかった。

「エンマ様！ お願いがあります！」

土下座をして、床に頭をこすりつける。

「聡史君を、どうか聡史君を殺さないでください！」

「聡史君？」

顔を上げると、少し考える素振りをしてから、資料を探し始めた。机上の資料から一枚の紙を取り出すと、それを淡々と読み上げた。

「竹下聡史。この子か？」

「そうです！ わたしをかばったせいで死にそうなんです！ お願いします！ 助けてあげてください！」

わたしの頼みに返事もせず、エンマ様は資料に軽く目を通す。

「この子はあと三十分後に死ぬ予定だ。すでにカルバドスが迎えに行ってるぞ？」

「そ、そんな！ どうにかして助けてあげられないんですか！」

「お前ならよくわかってるはずだぞ。運命は変えられないという現実を」

顎鬚をなぞりながら、エンマ様は続ける。

「それに、ミリアの言葉を借りて言えば、幸せなのではないか？
すぐに二人は、この世界で一緒になれるのだから」

「えっ？」

「そう言っただら？ 鷹野信也に」

「そ、それは……」

畏怖を生み出すエンマ様の視線に、言葉を詰まらせ、ただ口ごもるしかなかった。

「確か死んだ人達に、こうも言っていたはずだ。何をやっても無駄。別れを言っても絶対に聞こえない。ミリアはよくわかっているではないか」

全身を脱力感が襲い、わたしはその場に膝をついた。

今まで自分が言っていた言葉を、初めて生きていた人の立場になつて聞いた。

そして、その言葉の残酷さ、非道さも同時に理解する。

涙を溜めながら、わたしを軽蔑の眼差しで見下す——そんな亡くなった現界人の顔が、走馬灯のように蘇っていた。

「わたし……今までなんてことを」

「分かってくれたか？ 死んだ人達がお前に言われた言葉で、心を受ける傷の苦しみを」

無言のまま、力なくうなずく。知らなかったとはいえ、許される行為ではなかった。

「それなら、わたしも嬉しい」

「分かりました……だから、だからお願いします！ 聡史君を！」

エンマ様は目を閉じると、うつむきながら首を横に振った。

「それは無理だ」

「どうしてですか！」

「運命は変えられない。それだけは紛れもない事実だからだ」

「そんな、どうして！ 聡史君はずっとわたしの助けを待ってるんです！」

必死の形相で訴えても、エンマ様は首を縦に振らなかった。

「ミリア、わたしはお前の言った言葉が、間違いだと言っているのではない。それを死者に伝える必要はないと言っているのだ」

そんなことは、言われてなくても分かっている。だからといって、

何もしないで聡史君を待つなんて、無理な話だった。

「信也君は……」

わたしは思い出していた。唯一人、愛する人を救うチャンをもらえた人物を。

「信也君は優美ちゃんを助けられるじゃないですか！　どうしてわたしは聡史君を助けてあげられないんですか！」

「まだ助けられるとは決まってるじゃない」

「助けますよ！　大事な人だから！　わたしだって、聡史君が同じ運命になるってわかってたら、絶対に助けてみせます！」

胸の内が、異様に熱い。それが嗚咽になって、口から漏れる。

もう一度、頭を地面へと擦りつけ、最後の嘆願を試みた。

「お願いします、お願いします！　わたしはどうなってもいいんです！　聡史君はわたしの為に体を張って、助けてくれました。今度はわたしが体を張って、助ける番です！」

床を濡らしていく涙が、飽和上に広がっていく。

刹那、笑い声がわたしの耳を急襲した。

「フフ、ハハハハハ！」

慌てて顔を上げるとエンマ様が口を大きく開け、部屋中に伝わる笑声を響かせていた。

振動で部屋がわずかに横揺れしている。

——人の苦しみを笑うエンマ様が、異様に腹立たしかった。

「何がおかしいんですか！　好きな人を救いたって気持ちだが、そんなにおかしいんですか！　矛盾してますよ！　エンマ様だって人の気持ちをわかってない！」

エンマ様は笑いを止めたものの、謝りはしなかった。

「まあ、落ち着けミリア」

「愛する人を失ったつらさなんて、まったく理解してない！　わたしよりも全然です！　それなのに、偉そうにのけぞって、天界行きだの地界行きだの威張りちらして！」

「いいから落ち着け！」

エンマ様が机をおもいきり叩き、辺りに爆音を響かせる。
積み重なった資料が宙に浮きあがり、そのうちの何枚かが足元へと落ちてきた。

「笑ったのは謝る。予想以上にうまくいったのでな、つい笑ってしまったのだ」

「うまく、いった？」

「おい！」

エンマ様が呼ぶと、奥の扉から一人の青年が現れた。
頭を掻きつつ、のそのそと近づいてくる青年。近づいてくるにつれ、その正体が明らかになる。

——現れたのは聡史君だった。

「さ、聡史君!？」

わけがわからないまま、歩み寄っていく。聡史君は頬を緩めながら、

「何を泣いてんだ美利亜？ お前らしくないなあ」

鼻で笑ってみせる。聡史君と同じ声で、聡史君とは違う口調。
全身を覆っていた重傷も、すべて消え去っている。

「ど、どういう、ことですか？」

「こういうことだ」

エンマ様が、パチンと指を鳴らす。

「そう。つまり、こういうことだ」

聡史君のいた場所から、今度は聞き覚えのある声。

慌てて視線を聡史君へと向けると、そこにいたのは――。

「力、力、力」

「蚊？ どこに蚊がいるんだ？」

そんなジョークも無視して、わたしは指を差して叫んでいた。

「カルバドス！」

「はいはい、なんでしょうか？ お姫様」

カルバドスは手を胸の前に当て、執事のようなお辞儀をしてみせた。改めてエンマ様を見上げる。

「言いたいことはわかる。実はなミリア。わたしは保険をかけておいたのだよ」

「保険？」

「そうだ。お前が駅で好みの男性と出会えればいい。だが、出会えなければ、この一週間無駄に過ごしてしまう」

「そこでおれの登場って訳だ」

カルバドスはわたしの肩を抱えながら、親指で自分を指さした。

「鷹野信也の家に行くために、一度戻ってきただろう？　ちょうどあの時カルバドスがいたからな。ミリアが戻った後で頼んでみたんだ。カルバドスなら生きていた経験もあり、ミリアとの付き合いも長いしな」

「おれの芝居、上手だったろ？　でも焦った時もあっただぜ？　なんで家を知ってるのかって言われた時は、正直やばかったな。中界から来たなんて言えるはずもないし」

「まったくだ」

エンマ様が豪快に笑い、カルバドスもそれに続く。

わたしはというと――呆然としていた。少なくとも一緒に笑う気にはなれなかった。

それよりも、頭の中を整理するのが精一杯だった。

「結局……全部芝居だったんですか？」

そう尋ねるのが、やっとだった。

「まっ、そういうことだ。でもこれで少しは分かっただろ？　愛する人を失った現界人の気持ちかな。これでミリア……」

カルバドスの得意げな高説が終わる前に、わたしはカルバドスの頬をぶん殴っていた。

不意をつかれたのか、カルバドスはあっさりと倒れてしまった。

「な、何しやがるんだ、ミリア！」

即座に起き上がり、頬を押さえながら反論してくる。

「わたしが……」

パンチ一発程度で、わたしの高ぶった感情は治まらなかった。

「どれだけ聡史君を心配したと思ってるの！ この二、三日、聡史君が頭から離れなくて、さっきだって本気で自分の命を捨てても、聡史君を救いたいって思ってたのよ！ それなのに芝居ですって！ ふざけないで！」

やっと現状を把握したのか、カルバドスは顔をうつむけながら立ち上がった。

もう一度殴ろうと繰り出した拳を、カルバドスが受け止める。

あろうことが、そのままわたしを抱きしめてきた。

「な、何よ！ 放しなさいよ！」

「悪かったよミリア。でもな、おれもエンマ様も、お前には死んだ人の気持ちの理解できる案内人になってほしかったんだ。分かってくれ」

「知らないわよ、どうだっていい！ あんたなんか、エンマ様も、みんな大嫌いよ！」

カルバドスの背中を、両拳で何度も殴りつつ、わめき続ける。

「それとも何？ わたしは中界で造られたから、現界人じゃないから、わたしの気持ちはどうだってよかったっていうの！？」

「違う、そうじゃないんだ。ただ、わかって欲しかったんだ」

「他にも方法はあったでしょ！ こんな目に合わされたら、一ヶ月ぐらいわたしの仕事もやってくれないと、許さないんだから！」

「わかった。今から一ヶ月の間、ミリアの仕事は俺が引き受ける。だから機嫌直せて」

カルバドスの言質を取ったわたしは、うつすらと笑みを浮かべながら動きを止めた。

「やった！ ありがとうカルバドス！」

「へっ？」

油断した隙にカルバドスの腕から離れる。

呆気にとられる二人を尻目に、バンザイを繰り返した。

「わーい、わーい！ 仕事をしないで一ヶ月間、朝寝を堪能できるぞー」

カルバドスとエンマ様が顔を見合わせる。

一瞬だけ早く、カルバドスのほうが現状を理解していた。

「わかったよ、おれの負けだ。一ヶ月の間、仕事やってやるよ」

「フフツ、ありがとうカルバドス」

頭を下げると、カルバドスが首をかしげながら、逆に尋ねてきた。
「でもお前、一ヶ月の間、仕事もしないで何をするつもりだ？ 暇じゃないのか？」

「あつ……」

口をあんぐりと開けて呆けていると、カルバドスに頭をはたかれてしまった。

「まったく、考えなしだなお前は」

「しょうがないなあ、今回は許してあげる」

「ああ、悪かったよミリア。本当にごめん」

「もういいよ。終わったことだし。それに、人の気持ちがわかったのは確かだから」

「そうだな、ミリアは立派に成長したよ」

わたしの頭を押さえつけ、カルバドスが激しく撫でる。

その影響で、わたしの髪はぐしゃぐしゃになってしまった。

「なにするのよ！」

「まあ、いいじゃないか。ご愛嬌だ」

豪快に胸を張って笑うカルバドスを前にすると、怒る気力も失せてしまう。

「それにしてもよく気づけなかったわね。わたしが抜けてるだけかもしれないけど」

カルバドスは腰に手をやり、下目づかいでニヤリと微笑んだ。

「当たり前だ。おれの演技力をなめるなよ」

「全部演技だったなら、ばれていたかもしれないがな」

「それって？」

即座にカルバドスの微笑が消え、あたふたと狼狽し始める。

「なっ、なんでもない。なんでもないぞミリア！ それよりこれを

見ろ」

カルバドスを取り出したのは一枚の紙だった。それを広げてわたしの前に掲げる。

「そ、それは！」

「さっきまで公園で描いてたミリアの肖像画だ。いい出来だろ？」

「まあモデルがいいからじゃない？」

冗談で言っただけだが、カルバドスは意外にも真に受けていた。

「確かに……っていうか、こんな笑顔初めてだぜ」

「本当に？」

「ああ、いつもは笑っていても、どこかかげりがあつただけだな。あまり実感が湧かない。ただ一枚目の絵よりは、笑顔がより鮮明に、輝いているのは間違いなかった。

「あつ、でもこの絵、変な奴らに投げ飛ばされなかったつけ。もしかして？」

「ああ、彼らはは全員、地界の鬼だぞ」

エンマ様の想像外の言葉で、わたしの動きが止まる。

「ミリア達の姿を変えるのと同じ原理だ。現界の空気が気に入たと言っていたぞ」

「まったく、本気で殴りやがって。高校生があんな力出せるかっての……」

どうやら傷はなくなっているものの、殴られた痛みはあつたらしい。

「そ、それって……本当ですか？」

半信半疑で訪ねると、カルバドスが白い歯を見せた。

「嘘じゃないさ。俺たちを助けてくれた女性も、クレアだしな」

「ク、クレアって、待合室の！？」

「緊張してまともに喋れなかったから、気づかれたんじゃないかって、心配してたぞ」

愕然とするというより、啞然としてしまった。ようするにわたしは、エンマ様たちの手の上で踊っていたに過ぎなかったのだ。

「みんなしてわたしを騙すなんて、もう知らない！」

そっぽを向くと、エンマ様がパンパンと手を叩き、会話に入ってきた。

「これにて一件落着だな。さてミリア。帰ってゆつくり休むといい。明日はいよいよ、鷹野信也の運命の一日だからな」

「家って、中界の家ですか？」

「もちろんだ。鷹野信也に助言をする必要もない。結果は神のみぞ知るというやつだ」

慌ててエンマ様の意見に食いつく。わたしにはまだ、やり残した約束があるのだ。

「待ってくださいエンマ様。お母さんの下に帰らないと……」

カルバドスはまったく理解していなかったが、エンマ様はわたしの真意を瞬時に理解してくれていた。

「だがなミリア、すぐにお前の記憶はなくなる。なにをやっても彼女の記憶には、お前の断片すら残らないぞ？」

「わかっています。だけど、約束したから。絶対に無事に帰るってわたしはお母さんの娘だから、約束を守るのは当然です」

エンマ様は大きく、そして何度も頷いた。

「ではこうしよう。今は大体二十時ぐらいだから、明日になる瞬間——つまり二十四時に鷹野信也の母親の記憶を戻す。同時にミリアも中界の姿へと戻そう。それまではゆつくりしてくるといい」

「わかりました！」

「では送り届けてやろう」

エンマ様の言葉と共に、温かい光に包まれていく。

目を開けると、わたしは信也君の家の前に立っていた。

家の中の電気が、暗闇の中に煌々と光っている。

「ただいま！」

「よく帰ったな。待ってたぞ美利亜！」

居間から勢いよく出てきたお母さんは、すぐさまわたしを力強く抱きしめてきた。

「だから言っただでしょ、お母さん。約束は守るって」

「ああ、さすがわたしの娘だ！」

わたしの背中を二度三度と叩き、ようやくわたしを解放する。

「夕飯はもうできてるぞ。美利亞の好物ばかりだ！」

「そ、それってもしかして、おでんとか？」

恐る恐る聞くと、お母さんは口をへの字に曲げた。

「そんなわけないだろ。美利亞が嫌いなおでんを、どうして準備しなきゃいけない」

「そ、それじゃあ」

「ああ、エビフライにハンバーグだ！ 遠慮せずにどんどん食べる！」

「やったあ！」

エビフライにハンバーグは、正真正銘わたしの好物だった。

中界がある上方へ向かって、親指を立ててみせる。間にある天井が視界を阻んでいるけど、エンマ様には伝わっているはずだ。

わたしはすぐさま席に着くと、フォークとナイフを両手に持った。

「いただきますーす！」

「ああ、たくさん食べてくれ！」

二人で会話を楽しみながらの食事に、後片付けも手伝い、お風呂にまで一緒に入った。

同時に、着々と別れの時が近づいてくる。

二十四時はもう間近にまで迫っていた。

「お母さん」

「ん？ なんだ？」

部屋で布団を敷いているお母さんに、背後から近づいていく。

自分でも分かるぐらい、顕著に声が震えていた。

「今日はすごく楽しかった。多分今までで一番楽しい思い出だよ」

「ああ、わたしもだ」

涙が出るのを堪えようと、目頭に力を込める。それが逆効果になり、搾り出された涙が頬に弧をえがいていった。

「なんで泣いているんだ？」

慌ててお母さんが、わたしの側に駆け寄ってきた。
力強い両手で、わたしの肩をやさしく支えてくれる。

「う、嬉しくてさ！　こんなにお母さんと仲良く接したのって、初めてだから」

「そうだな。まあこれからもどんどん仲良くしていけばいいさ！　なんなら、次の連休にでも家族三人で旅行に行くか？　きっと楽しいぞ！」

何度もうなずくお母さんの提案に、わたしは辛抱できずに抱きついてしまった。

「楽しいだろうね！　家族三人！　きっと楽しいよ！」

「ああ、楽しいに決まってる！　どこに行くか計画立てないとな！」

お母さんはわたしを抱き返し、大きく体を持ち上げてくれた。
視界に入った柱時計は、二十四時まで残り一分をきっていた。

「お母さん、わたしね」

「なんだ？」

「お母さんの子どもで、本当に良かった！」

「なんだよ急に、改まってさ」

「一生誇りに思うよ、お母さんの子どもだったこと」

「な、何を言ってるんだ？」

お母さんの目が、愁いを帯びだしていた。瞬きのたびに瞳が、潤みを増していく。

もしかしたら、わたしがいなくなると、気づき始めたのかもしれない。

頃合いを見計り、わたしはお母さんに聞こえる最後の声を出した。
こんなことなら、もっといい言葉にしておけばよかった。そう思いながら――。

「カルバドスのおたんこなす」

「美利……」

その瞬間、柱時計が時刻を知らせる鐘を響かせた。

10月28日(1)

十月二十八日(火曜日)

わたしは中界への姿へと戻ったけれど、まだお母さんのそばにいる。

「な、なんだ？」

お母さんは驚いたように辺りを見回し、そして自分の目から流れ出る液体を拭った。

「なんで、わたしは泣いているんだ？」

完全にわたしを忘れ、元の記憶に戻っているようだ。

もう、お母さんの前に姿を現しても、わたしの名前を呼んではくれないのだ――。

「お別れ、言わなくていいのか？」

振り向くと、そこにはカルバドスが立っていた。きっと迎えに来てくれたのだろう。

「言うよ！ 言うに決まってるじゃない！」

何が起こったかわからず、オロオロと辺りに気を配るお母さんに、自分の想いを吐き出した。

「ありがとう。たった一週間だったけど、わたしのたった一人のお母さん。ずっと、ずっと忘れないから……」

たとえ聞こえなくても、無駄だとわかっていても、言わずにはいられなかった。

「信也君もわたしもいなくなるけど、次に会えるときを楽しみにしています。その日まで頑張って、長生きしてください」

わたしの口から、嗚咽が漏れはじめ。

これ以上は何も言えない。そう判断してお母さんに背を向けた――その時だった。

「美利、亜？」

「えっ？」

お母さんの口から漏れた言葉は、間違いなくわたしの名前だった。
「だ、だれの名前だ？　一瞬だけ浮かんで、消えた……」

呆然としているお母さん。思い出してはいなくても、確かに発されたわたしの名前。

二度とお母さんの口から出るはずのなかった、美利亞と呼ぶ声。

「カルバドス！　今、聞いたよね！」

「ああ、聞いた」

わたしはカルバドスに抱きつき、ただひたすらに泣き続けた。

わたしの名前を、記憶が無くなっても美利亞と呼んでくれたお母さんに、心の底から感謝をしながら――。

それからわたしは、カルバドスに肩を抱えられながら動く階段を上った。

もう二度と、わたしは生き返ることはない。だけど、今日までの一週間を生きたという経験は、今後も生きていくだろう。

「ところでミリア」

「んっ？」

カルバドスに聞かれて、首をかしげる。

「あれは、どういう意味だ？」

「あれって？」

聞き返すと、わたしを逃がさないようにと、腕に力を込めた。

「く、苦しい……」

「カルバドスのおたんこなすってのは、どういう意味だっけ聞いてるんだよ」

「あっ……」

そうか、しまった。聞かれることなんてないと思っていたから……。

「気のせい気のせい」

「気のせいじゃねえ！」

ギリギリと首を絞めてくるカルバドスと、必死に逃げようとする

わたし。

だけど、二人とも憎しみの表情ではなく、満面の笑顔だった。

エピソード

ビデオが終わり、顔中に広がっていた液体をくまなく拭う。

「ふう……」

一息ついてから、淡い模様の天井を見上げた。驚くほど、胸の中がすっきりしている。

「また一年待たないと、お母さんに名前を呼んでももらえないって、思ってたんだけどな」

年に一度しか呼ばれないわたしの名前が、ビデオの中とはいえ、何度もお母さんの口から発されていた。

ただ名前を呼ばれるだけでも、相手がお母さんなら、甘美な安らぎを与えてくれる。

最後に名前を呼んでくれたお母さん。今でもあの奇跡は強い印象を残している。

夢の中で再現されようものなら、一日中テンションが上がったまままだ。

あの事件以降、わたしは遅刻をしなくなった。お母さんの記憶は消えても、わたしはまだお母さんの娘だと自負している。

そして、お母さんが言っていた言葉『わたしの娘なら約束は守る』という言葉を胸に刻み、それを守り続け、お母さんの娘であるという実感を得ているのだ。

——それでもテラには未だに嫌われているのだから、確執というのは根強いものだと思ってしまう。

ソファで背伸びをして、ビデオデッキからテープを取り出そうと立ち上がる。

その瞬間、背後からわたしは羽交い絞めにされた。

「よっ、なに見てたんだ？」

「うっ、うわっ！」

声の主は振り向かなくても分かる。カルバドスだ。いつの間にや

ら室内に入り込み、忍び寄っていたらしい。

すぐさま束縛を解き放ち、背後に向かって怒鳴り散らす。

「なんで勝手に入ってくるのよ！」

「いいじゃねえか！ 俺とお前の仲だろ！」

「どういう仲よ！」

わたしが怒鳴っても、カルバドスは全然懲りていなかった——というか、これで懲りるのならばすでに改心しているだろう。

口笛を吹きながら、そっぽを向く。その顔は可愛くも憎たらしかった。

「で、何を見てたんだよ？」

わたしのビデオに興味津々のカルバドス。

「あんたのくされ芝居よ！」

舌を出しながら告げると、カルバドスは感嘆の声をあげた。

「おお、三年前の映像か！ それなら俺も呼んでくれればよかったのに！」

「やめといたほうがいいわよ。原稿用紙とにらめっこしたくないからね」

「なんだそれ？」

「エンマ様からの宿題よ。原稿用紙二十枚分の感想を書いて、提出しないと減給なの」

「それはさすがに、ごめんこうむるな」

こめかみを掻きながら、半笑いでばやく。

わたしはビデオテープを箱に戻すと、机の引き出しから原稿用紙を準備し始めた。早く感想を書き始めないと、明日までに間に合わない。

「そういえば、あの時のエンマ様の言葉、覚えてるか？」

頭をひねり、原稿用紙に向かい合ったわたしに、ふとカルバドスが、意味ありげな言葉を漏らす。

「えっ？ なにそれ？」

「全部演技だったのなら、ばれたかもしれんがなって言ってただろ

！」

「あ、ああ。言ってたわね。確かに」

記憶半分でうなずくと、カルバドスは呆れたように嘆息した。

「お前、ビデオを再生したまま、ずっと寝てたんじゃないのか？」

「失礼ね！　で、それがどうかしたの？」

カルバドスの目が、鋭さを増していった。

わたしを突き刺すように見つめて、両肩を力強く掴んでくる。

「あれは、本当なんだ」

「えっ？」

「芝居じゃなかったんだよ。ごく一部を除いてな……」

「も、もしかして？」

「ああ、そのもしかしてだ」

「カルバドスって、わたしのことを？」

言いかけると、カルバドスは途端にいつもの表情に戻った。人を

小馬鹿にしたような態度で、鼻を鳴らす。

「何を言ってたんだ、お前」

「だってあの時の聡史君って、いつもわたしを想ってくれてたじゃない」

「お前、勘違いしてるぞ？」

「えっ？」

聞き返すとカルバドスは、

「おれが言ってるのは、ミリアの肖像画のことだぞ？」

腰に手をやり、口元を緩ませる。

その顔は職場でよく見る、わたしや信也君をからかっている時の表情だ。

「肖像画？」

「あの『へのへのもへじ』ってのがあっただろ。あれがおれの本心だ」

「はっ？」

分かっていないわたしに、カルバドスは人差し指を突き出すと、

二度、三度と横に振ってみせた。

「あの絵がミリアを本気で描いたおれの最高傑作ってことだ。上手に描けてたたる？」

「な、なんですって！」

わたしが腕を振り上げると、慌ててカルドバスは逃げ出していた。
「ハッハッハ。こっちまでおいで！」

「ちよつと、待ちなさいよ！ このおたんこなす！」

しばらく室内で追いかけてこをした後、カルバドスは家の外へと飛び出していった。当然わたしもそれに続く。

「いつも仲がいいですね、二人とも」

帰宅途中のクレアが、わたしたちの追いかけてこに微笑みかけてきた。

「どこが！」

「どこがよ！」

「ほら、二人の声が見事にはもったじゃないですか。仲のいい証拠ですよ」

笑いを堪えながら、クレアがわたしたちの脇を通り過ぎていく。

「クレアもわかってないな。おれがミリアのレベルにまで、精神年齢を下げてやってるだけなのに」

「それは初耳ね」

傍らで頬をひきつらせながら、ぼそりとつぶやく。

「げっ、やべえ！」

カルバドスは再び全速力で逃走し、早くも視界から姿を消した。

嘆息が自然と、口から漏れてしまう。

結局わたしの恋愛は、あれからまったく進展していない。

それが幸か不幸か——それは今でも分からなかった。

だけど、信也君やカルバドスと一緒に、楽しい毎日を過ごせ、死んだ現界人から冷血呼ばわりされることもなくなった。年に一回とはいえ、お母さんに名前も呼んでもらえる。

わたしの毎日は、以前と比べ物にならないほど満たされている。

この日常が、永遠に続きますように——わたしの願いは、ただそれだけだった。

エピローグ（後書き）

『未来のキミを救いたい ミリアⅡミリス編』を最後まで読んでいただき、ありがとうございます。水鏡樹です。

鷹野信也編よりも少し早いですが、これでミリアⅡミリス編は終了です。

まずはミリアⅡミリス編だけを先に呼んだ方へ。

信也は優美を救えたのか？ ミリアと一緒に居ないときに信也はどんな行動をしていたのか？

それらに興味がある方は、ぜひ鷹野信也編も読まれてください。

お互いの行動や細かい思考のすれ違いなど、ミリアⅡミリス編を読んだ後でないと分からない楽しみがあると思います。

次に鷹野信也編と同時に読んでいる方。

二人の細かい係わり合いが一番よく分かりやすいと思うので、楽しんでいただけたなら幸いです。鷹野信也編のエピローグまで、もうちょっとだけお付き合いください。

最後に鷹野信也編を読んでからミリアⅡミリス編を読まれた方。

長い時間をお付き合いいただき、本当に感謝の限りです。

お互いの行動による係わり合い、思考のすれ違い、鷹野信也編では分からなかったミリアの行動など、時には笑い、時には悲しみ、時には感動していただけたなら、作者にとってこれ以上の幸福はありません。

最後までお付き合いくださって、本当にありがとうございました。

また、全ての読者の方へ。感想などありましたら、ぜひお聞かせください。その際はこういった読み方をしたか（ミリア編を先に読んで、両方同時に読んだなど）も併記していただければありがたいです。

それではまた、違う作品でお会いしましょう。水鏡樹でした♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5027b/>

未来のキミを救いたい ミリア＝ミリス編

2010年10月8日12時01分発行